

〒371 前橋市上泉町 664-4
前橋市教育委員会管理部文化財保護課
TEL 0272-31-9531

内堀遺跡群 IV

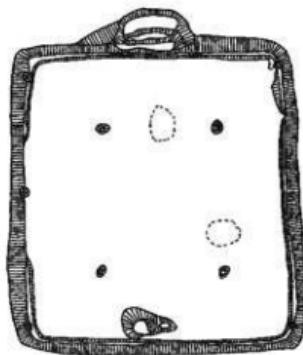
一大室公園整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報一

1991

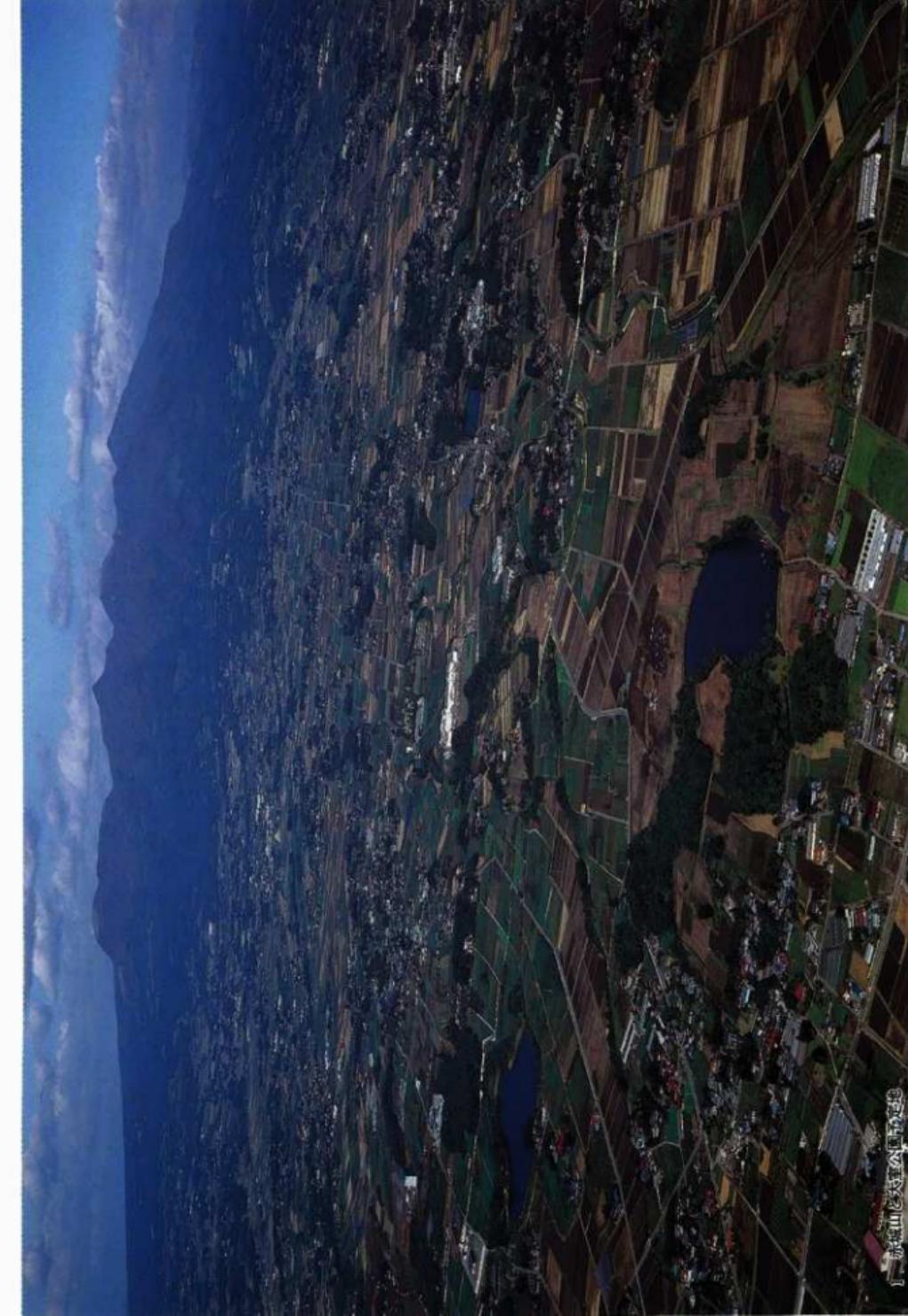
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

内堀遺跡群 IV



階段状施設を持つ大形住居

前橋市埋蔵文化財発掘調査団





2. E区全景



3. 平安時代の大地震による地割れ

はじめに

内堀遺跡群のある大室地区は、自然景観に恵まれた場所です。先人の汗によって造られた五料沼には、多くの水鳥が飛来し、林に一步足を踏み込めば蟻時雨を浴びることができます。また、ここには国指定史跡である前・中・後・小二子古墳という4基の前方後円墳とこれらの古墳に葬られた豪族の館である梅木遺跡も存在し、悠久の時間を体験させてくれます。情報が氾濫し、時間の短縮に追われる現代であるからこそ、自然・歴史的空間の持つゆとりが、人間性の回復のために必要と思われます。

前橋市では、こういった貴重な場所であることから公園を造ることになりました。ここに報告する内堀遺跡群下繩引II遺跡は、公園造成に先立って行われている発掘調査で解明されてきました。遺跡の調査は、昭和62年から継続して実施されてきました。これまでの調査で、約1万年前の狩りの道具もみつかりました。その後も連続と生活の跡がみられ、集落が形成されるのは、古墳時代初頭（西暦350年前後）です。この時代の住居跡は、100軒近い数が予想され、昭和55年にすぐ北で調査された「上繩引遺跡」の円形周溝墓が、本遺跡の人々の墓と考えられます。集落と墓域が有機的な関係で存在しているため、当時の社会を復原する上で重要な遺跡といえます。また、古墳時代初頭は新たな文化の幕明けであるため当時の人々の脈動が、本遺跡で出土した日本各地の地域色をもつ土器からも窺えます。

さらに、本年度の調査での大きな成果は、階段状施設をもつ大形住居跡で、県内でも類例が無く、集落構造を研究する上で貴重な発見となりました。

最後に発掘調査と遺物整理を円滑に進められたのは、公園緑地課をはじめとする関係機関や各方面の方々の御配慮の結果といえます。また、本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、斯学の参考になればさいわいと存じます。

平成3年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 遠藤 次也

例　　言

- 1 本報告書は、前橋市公園緑地課（前橋市長　藤嶋清多）が造成する大室公園に係る内堀遺跡群発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は群馬県前橋市西大室町1295番地ほかに所在する。
- 3 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長　遠藤次也が前橋市長　藤嶋清多と委託契約を締結し実施した。調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者	前原　豊・伊藤　良（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）
試掘・発掘調査期間	平成2年5月9日～昭和2年11月30日
整理・報告書作成期間	平成2年12月5日～平成3年3月25日
- 4 本書の原稿執筆・編集は前原・伊藤が行った。整理作業をはじめ報告書の作成には、伊藤孝子・佐手利子・佐藤佳子・竹内りり子・内藤貴美子・巾千恵子・峰岸あや子・吉田真理子の協力があった。
- 5 住居址の構造について、奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏、発掘調査に関する千葉大学麻生優教授・岡本東三助教授に現地指導をいただいた。地質分野の鑑定は早田勉氏（古環境研究所）、土器については小島純一氏（柏川村教育委員会）・若狭徹氏（群馬町教育委員会）、常滑焼については大江正行氏（財団法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団）にご指導をいただいた。
- 6 発掘調査で出土した遺物は、当調査班より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

- 1 指図中に使用した北は座標北である。
- 2 指図に、建設省国土地理院1/20万地形図（長野、宇都宮）と1/5万地形図（前橋）を使用した。
- 3 本遺跡の略称は2E11である。
- 4 各遺構の略称は次の通りである。

J T…縄文時代の竪穴状遺構、H…古墳時代の住居址、T…竪穴状遺構、
Z…遺物集中区、I…井戸、D…土坑、W…溝、X…地割れ
- 5 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　住居址・土坑・井戸…1/60、全体図1/400、
遺物　土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/2、1/4
- 6 スクリーントーンの使用は次の通りである。

遺構平面図　焼土…淡点、炭化物…粗い斑、粘土…細かい斑
遺構断面図　火山降下物…濃点、焼土…淡点、粘土…細かい斑、構築面…斜線
遺物実測図　黒色処理…斑、須恵器断面…黒塗、施釉陶器断面…点、
織維含有土器の断面…点、石器使用痕…線
- 7 遺物分布図のシンボルの使用は次の通りである。

●…土器、○…土製品、▲…鉄器、■…石器・石製品、□…種子（果核）、
なお接合状態は実線で結んだが、個体別資料数の多いものは結んでいない。

目 次

はじめに

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	3
III 調査の経過	
1 調査方針	6
2 調査経過	7
IV 層序	10
V 遺構と遺物	
1 住居址	12
2 壓穴状遺構	27
3 遺物集中区	28
4 井戸	28
5 土坑	28
6 溝	30
7 地割れ	32
8 グリッド出土の遺物	33
VI 成果と問題点	
1 古墳時代の土器について	33
2 古墳時代の住居址について	39
3 階段状施設を持つ大形住居について	39
4 古墳時代前期の集落	41
付編	
内堀遺跡群下縄引遺跡のテフラと地割れ (早田勉)	43

図 版

- 口絵 1 赤城山と大庭公園予定地
口絵 2 E区全景
口絵 3 平安時代の大地震による地割れ

- P.L. 1 平成2年度調査区全景
2 遺跡全景
3 住居址にみられる地割れ
4 H-35~38号住居址
5 H-39・40・42号住居址
6 H-43~47号住居址
7 H-48・49号住居址
8 H-49~53号住居址
9 H-54・56~59号住居址
10 H-59・61・62号住居址
11 H-63~65号住居址
12 H-66・82~85号住居址
13 H-86・89・90・91号住居址、
T-1~3号竪穴状遺構
14 J T-1号竪穴状遺構、I-1号井戸、
D-1~4号土坑
15 D-5・6・10~15号土坑
16 D-16・17号土坑、W-1・2・
9号溝

- 17 W-3・4・8・10号溝、
X-1号地割れ
18 X-2~5号地割れ、瓦塔出土
状態、記念撮影
19 H-35~39号住居址出土の土器
20 H-39・40・43・45・46号住居
址出土の土器
21 H-46・47号住居址出土の土器
22 H-47~49号住居址出土の土器
23 H-49・50号住居址出土の土器
24 H-50号住居址出土の土器
25 H-51~53号住居址出土の土器
26 H-54・56・57・59・62号住居
址出土の土器
27 H-62~64号住居址出土の土器
28 H-64・65号住居址出土の土器
29 H-65・66・82号住居址出土の
土器
30 H-82~84・85・90号住居址、
D-2号土坑出土の土器
31 石製品・土製品・石器
32 鉄器・石器・繩文土器・常滑焼・瓦塔

挿 図

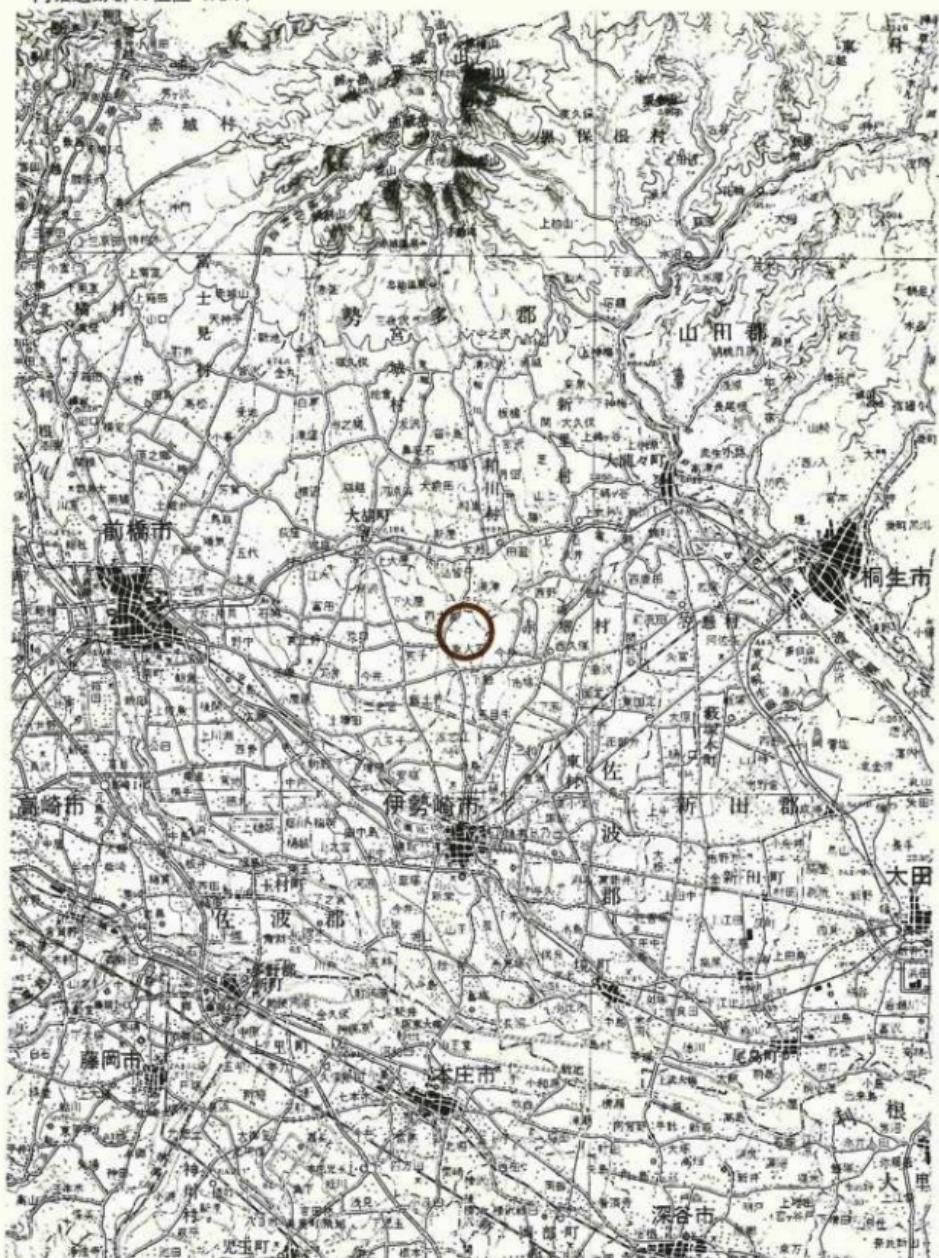
頁	頁		
Fig. 1 内堀遺跡群の位置	vi	Fig. 11 住居址規模相関図	39
2 内堀遺跡群位置図	2	12 住居址分類図	40
3 内堀遺跡群周辺図	4・5	13 H-35・36号住居址	55
4 平成2年度調査区呼称図	6	14 H-37・38号住居址	56
5 内堀遺跡群調査経過図	7	15 H-39号住居址	57
6 内堀遺跡群A~C区全体図	8・9	16 H-40・42号住居址	58
7 内堀遺跡群D・E区全体図	10	17 H-43号住居址	59
8 内堀遺跡群標準土層図	11	18 H-44・45号住居址	60
9 土器片種類の割合	35	19 H-46号住居址	61
10 土器集成変遷図	36・37	20 H-47・48号住居址	62

Fig. 21	H-50・51号住居址	63	Fig. 47	H-44・45号住居址出土の土器	89
22	H-49号住居址(1)	64	48	H-45・46号住居址出土の土器	90
23	H-49号住居址(2)	65	49	H-46・47号住居址出土の土器	91
24	H-52・53号住居址	66	50	H-47号住居址出土の土器	92
25	H-54・56号住居址	67	51	H-47~49号住居址出土の土器	93
26	H-57・58号住居址	68	52	H-49号住居址出土の土器	94
27	H-59号住居址	69	53	H-49・50号住居址出土の土器	95
28	H-61号住居址	70	54	H-50号住居址出土の土器	96
29	H-62・65号住居址	71	55	H-50号住居址出土の土器	97
30	H-63号住居址	72	56	H-51~53号住居址出土の土器	98
31	H-64号住居址	73	57	H-53・54号住居址出土の土器	99
32	H-66号住居址	74	58	H-56・57・59号住居址 出土の土器	100
33	H-82号住居址	75	59	H-61・62号住居址出土の土器	101
34	H-83・89号住居址	76	60	H-63・64号住居址出土の土器	102
35	H-84号住居址	77	61	H-64・65号住居址出土の土器	103
36	H-85号住居址	78	62	H-65号住居址出土の土器	104
37	H-86号住居址	79	63	H-66・82号住居址出土の土器	105
38	H-90・91号住居址、 J T-1号竪穴状遺構	80	64	H-82号住居址出土の土器	106
39	Z-1号遺物集中区、 I-1号井戸	81	65	H-83~85号住居址出土の土器	107
40	T-1~3号竪穴状遺構、 D-1~4号土坑	82	66	H-85・86・90号住居址、 Z-1号遺物集中区、D-1・ 4号土坑出土の土器	108
41	D-5~7・10~17号土坑	83	67	D-2号土坑・W-8号溝出土 の土器と土・石製品	109
42	X-1号地割れ	84	68	土製品・石器・鉄器	110
43	X-1~5号地割れ	85	69	石製品	111
44	W-1~4・8・9号溝	86	70	石製品	112
45	H-35~37号住居址出土の土器	87	71	縄文土器	113
46	H-38~40・42・43号住居址 出土の土器	88	72	縄文石器・常滑焼	114

表

	頁
Tab. 1 住居址時期別一覧表	38
Tab. 2 遺物観察表	45~54

内堀遺跡群の位置（九印）



1:200,000 宇都宮

0 5 10 15 20 キロメートル

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市の「大室公園整備事業」に先立って行われたものである。この調査は昭和62年度に始まり今年度で4年目になるが、公園建設予定地の埋蔵文化財を調査し公園設計の基礎資料にすることが目的である。

昭和62年度は、公園予定地約370,000m²のうち国指定史跡である前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳、小二子古墳や山林、沼などを除く約200,000m²について東西に10m間隔でトレンチを入れる方法で確認調査を行い、予定地全域についての埋蔵文化財の分布状況を知るとともに、その結果を踏まえ、昭和63年度には予定地の北西部約10,000m²についての発掘調査を実施した。また、平成元年度は、昭和63年度調査区の西側を中心に約12,600m²について発掘調査を実施した。

今年度は、昭和63年度と平成元年度の調査区を取り囲む範囲の発掘調査と確認調査を実施した。発掘調査の面積は約9,000m²・確認調査の面積は約2,500m²で合計11,500m²である。当初は公園整備において便益施設が予定される地域であったため、記録保存を目的とした調査であったが、3カ年の調査で検出された古墳や集落跡の内容を鑑みて公園整備に活用するべく現地保存が決定された。

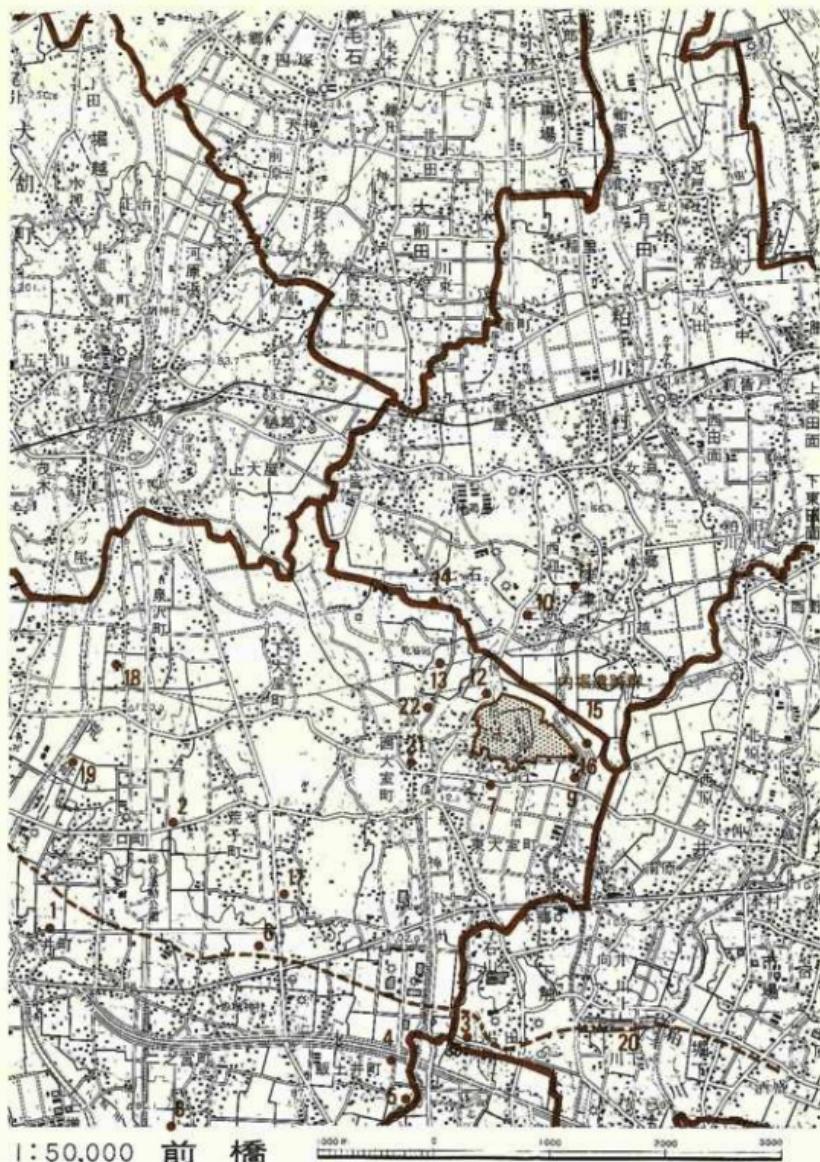
今年度の調査は、平成2年4月5日に市長（公園緑地課担当）より発掘調査の依頼が教育長あて提出され、4月10日に前橋市埋蔵文化財発掘調査団で調査受諾を決定し、4月27日付けで発掘調査委託契約が締結された。初年度以前の経緯については「内堀遺跡群Ⅰ」に詳しく述べられているので本書では省略する。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

内堀遺跡群が所在する前橋市西大室町は、前橋市の中心市街地から東へ約15kmの所にある。遺跡は国道50号線東大室十字路より北へ2kmで、県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点から北東1kmに位置している。またJR両毛線伊勢崎駅から遺跡へは北約7kmにあり、上毛電鉄柏川駅からは南南西に約3kmにある。東側は多田山と呼ばれる火山泥流による丘陵地形があり、赤堀町との境となっている。また、北に接する柏川村とは、七ツ石とよばれる信仰の対象となっている巨石のある丘陵とそれに連なる丘陵地形を行政上の境界としている。

本遺跡の東側には五料山とよばれる自然丘陵があり、上縄引遺跡のある西側の台地と挟まるよう並んでいます。南側の後二子古墳のある位置も丘陵地形となっている。この西側にある小山もやはり自然丘陵で、最近まで碎石を切り出していた跡がある。この地区の丘陵地形の基盤は、



1:50,000 前 橋

Fig. 2 内堀遺跡群位置図

すべてこうした輝石安山岩よりなる火山泥流によって形成されており、それらが露出しているのが、七ツ石や石山観音、産泰神社裏の巨石などである。本遺跡と後二子古墳との間には小さな谷地があり、かつては湧水による小河川があったものと推定される。また、現在も五料山と本調査区の間に小河川が流れしており、江戸時代に谷地の南側に堤をつくり、堰止めてできたものが五料沼である。本遺跡のある丘陵の北側には現在水田地帯が広がっているが、下繩引遺跡や柏川村五反田遺跡の存在から生産基盤と考えることが難しいため、この谷地を含めた南側に生産基盤を求めたい。本遺跡地の標高は、130m～137mである。

2 歴史的環境

内堀遺跡群のある荒砥地区は自然に恵まれた風光明媚な所であるとともに、3（4）二子古墳をはじめとした周知の遺跡が存在する考古学上にも重要な地域である。そこで、本遺跡の遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境をみてみたい。

まず、荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に荒砥北三木堂遺跡①、また、宮川の沖積地に臨む柳久保遺跡群②においてナイフ形石器、細石刃等の旧石器文化の遺物が出土している。続く縄文時代には、草創期の遺跡として爪形文土器が検出された下触牛伏遺跡③がある。二本松遺跡④や柳久保遺跡群からは、田戸下層期の土器が出土している。前期の遺跡は、荒砥二之堰遺跡⑤、荒砥上ノ坊遺跡⑥、荒砥上御防遺跡⑦など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているが、いずれも5～10軒の中・小規模の集落にとどまっており、赤城村三原田遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。

弥生時代の遺跡は水田耕作に適した冲積地を臨む台地や微高地に立地しており、中期後半から後期の小規模集落が荒砥島原遺跡⑧、荒砥上川久保遺跡⑨、西原遺跡⑩、西迎遺跡⑪などで見られる。古墳時代前期の遺跡としては、本遺跡の北西に隣接する上綱引遺跡⑫をはじめ、北山遺跡⑬、七ツ石遺跡⑭、久保皆戸遺跡⑮、梅木遺跡⑯などがある。この時期の遺跡は、住居出土の土器を見る限り複雑な様相を呈しており、弥生時代後期の樽式・赤井戸式土器はこの時期まで残存し、土師器と共に伴する。そのうち、浅間C軽石降下後およびF A降下前の各遺跡の住居は、本年度内堀遺跡群の集落に対応するものであると考えられる。5世紀後半から6世紀代に入ると、強大な支配者の存在を暗示する3（4）二子古墳が築造され、この地区が当時の中心的様相を呈するようになる。梅木遺跡で検出された首長層の居宅は3（4）二子古墳と何らかの関係があると推定される。このほかに居館址として、荒砥荒子遺跡⑰、丸山遺跡⑲などがある。6世紀後半から7世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、1～3基程度の敷在する小円墳も出現するようになり、支配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。奈良・平安時代には居住域が台地全体に広がり、水田開発が進み、荒砥源訪西遺跡⑳では微高地まで水田化している。また、12世紀の中頃、開削されたとされる女堀㉑の遺構も残存している。中世以降の城郭としては、大室城㉒、元大室城㉓、今井城、赤石城などがあり、荒砥北三木堂遺跡などでは多数の墓坑が調査され

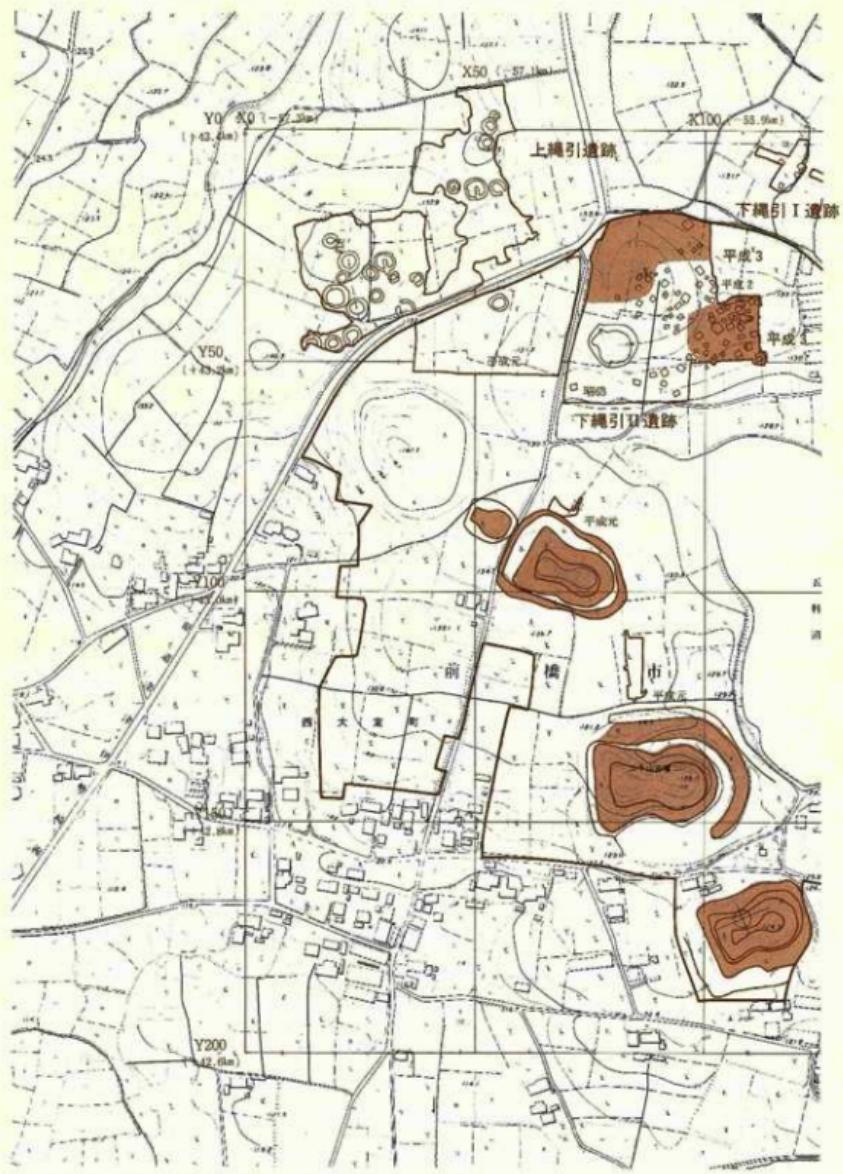
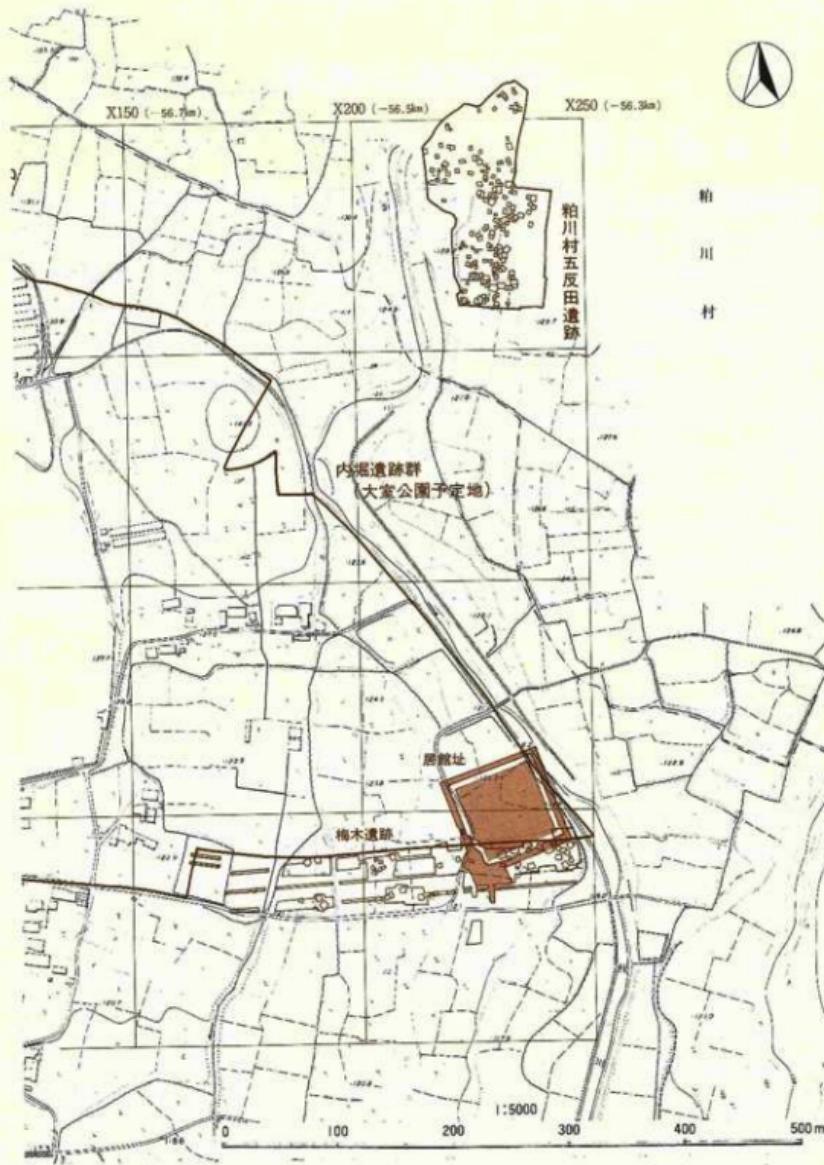


Fig.3 内堀遺跡群周辺図



ている。また、井戸や溝など近世の遺構も、多くの遺跡で確認されている。

III 調査の経過

1 調査方針

調査開始にあたって、発掘調査区域の大部分に麦が栽培されており、麦の収穫を待たなければならなかった。そこで、空いている土地から逐次調査を進行させるため、遺跡全体を細かくA～Eまでの5つの調査区にわけて呼称し、発掘調査できる調査区から行うこととした。調査の実施にあたっては、国家座標に基づいた原点を据えて、調査区全体に4mグリッドの設定を行った。各グリッドの呼称は北西隅の杭を用い、西から東へ算用数字、北から南へカタカナで番付を行った。ちなみにサー10Gは第IX系の-57km・+43.3kmである。なお、各年度毎の調査区設定枠が微妙に異なっているため内堀遺跡群全域にわたるグリッド設定を行った。4mグリッドを基本とし、西から東へX 0～X250・北から南へY 0～Y200の設定を行った。サー10Gは全体グリッドではY 25-X 75Gになる。調査は、期間的制約があるため掘削用重機を用いて表土の除去を行い、As-Cが混じる黒色土面もしくは、軟質（ソフト）ローム上面を出した。この時点で直ちに古墳時代以降の遺構の確認に入り、並行してグリッド設定、B、M、の設置を行った。その後、平板測量で遺構の配置図を縮尺1/100にて作成し、各遺構の調査工程を検討した。その結果、住居址の調査は、

1 中央部でクロス

するセクションペルトを設けて土層観察を行う。

2 遺物について、10cm四方以上ものは縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。

3 炉と竈の図化については、原則と

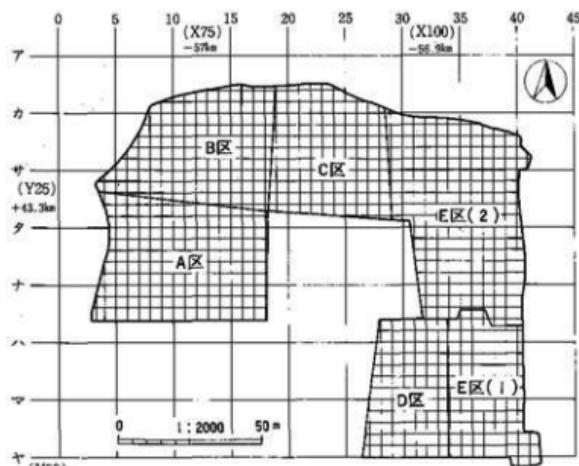


Fig.4 平成2年度調査区呼称図

して縮尺1/10にて、遺構平面図については、原則として縮尺1/20にて実施する。

以上、大まかな方針のもとに調査を進めたが、予想をはるかに超えた多数の住居址の検出と例年ない猛暑と乾燥化は、大きく進捗を阻んだ。

なお、本遺跡は大室公園予定地内で、地下に存在する遺構は十分に保存されるということで、原則として弥生時代以前の遺構調査は行っていない。

2 調査経過

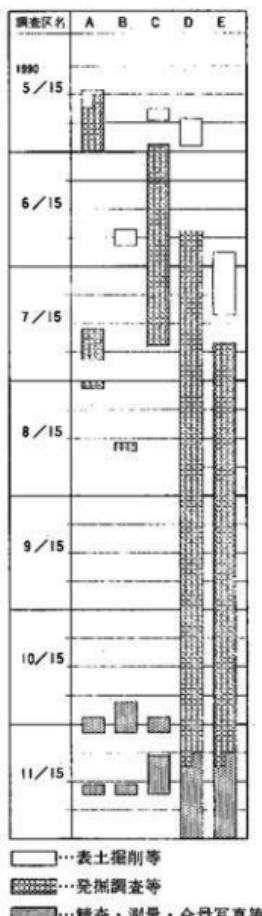
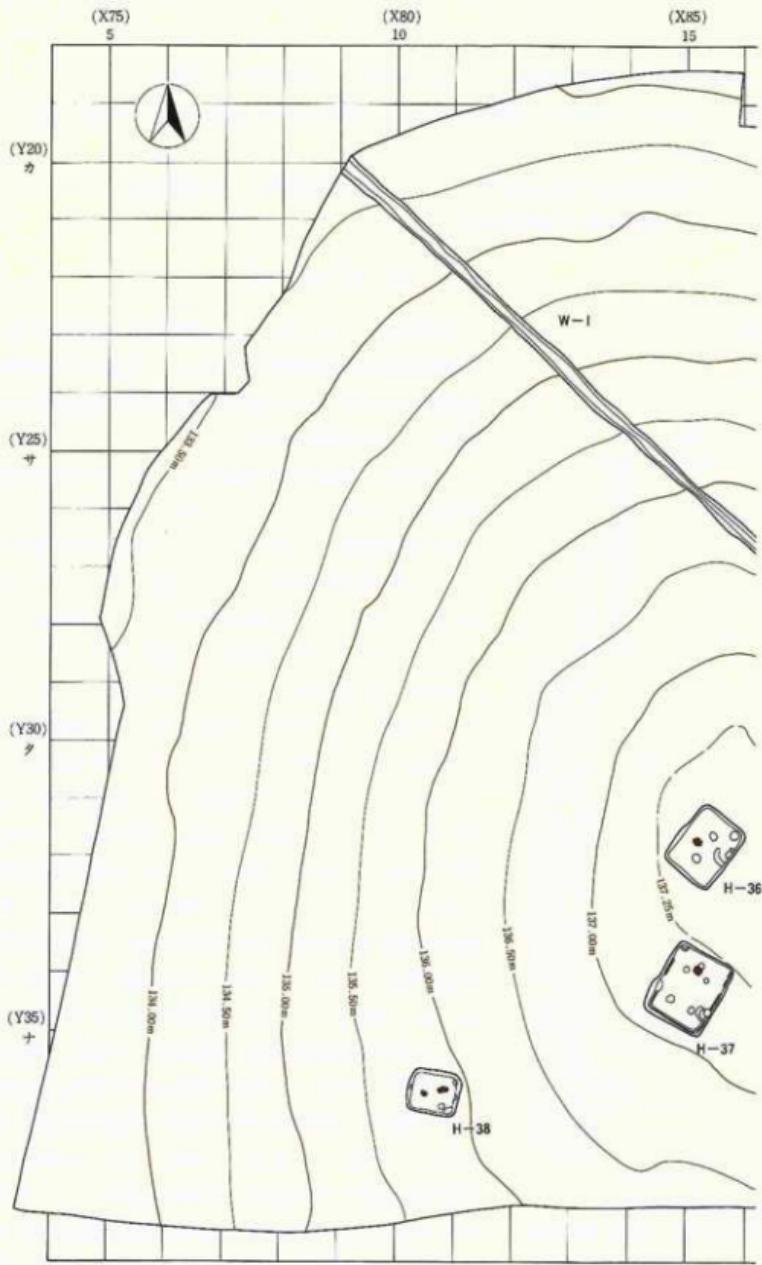


Fig.5 発掘調査経過図

発掘調査は、平成2年4月より現地調査、発掘事務手続き、公園緑地課との事前協議などを行い、4月27日に発掘調査の委託契約を締結してから現場事務所の設置や発掘調査用具の搬入など本格的な準備が始まった。

5月14日より発掘調査を開始する。同日、麦畑以外の調査可能なA区からバックフォー(0.7m³)と10tダンプトラックなどで表土掘削を開始し、続いてC区→D区の順に表土掘削を済ませた。表土掘削に追従してプラン確認を行い、A区から遺構の掘り下げを始めた。調査の結果、A区より住居址5軒・土坑1基・溝1条・繩文時代竪穴状遺構1基が、またC区より住居址4軒・遺物集中区1カ所・土坑5基・井戸1基・溝3条・地割れ4条、D区より住居址13軒・竪穴状遺構1基・土坑5基・溝2条が検出された。B・E区の表土掘削を、麦刈りが終了した6月22日より開始した。E区の表土剥ぎは途中であったが、プラン確認した結果、30軒を超える住居址が検出された。このため、E区については、当面の調査範囲を『40』ライン以西・『ネ』ライン以南に定めるとともに、調査内容の見直しを計った。当初の予測を超えた住居数や遺構保存状況の良さと相俟って、例年ない猛暑は、発掘調査の進捗に著しく影響を及ぼした。現地調査は11月末日をもって完了した。調査面積は11,500m²(発掘調査…9,000m²、確認調査…2,500m²)に及んだ。その間、現地説明会の実施、業者委託による気球空中写真撮影・住居平面図・遺跡全体測量や土器の水洗・注記もすべて完了した。特に、11月4日に実施した現地研修会では、季節はずれの台風を思わせるような悪天候にもかかわらず、100名を超える熱心な市民の参加があった。

12月3日に器材・出土品の運搬、4日に整理事務所の開設、



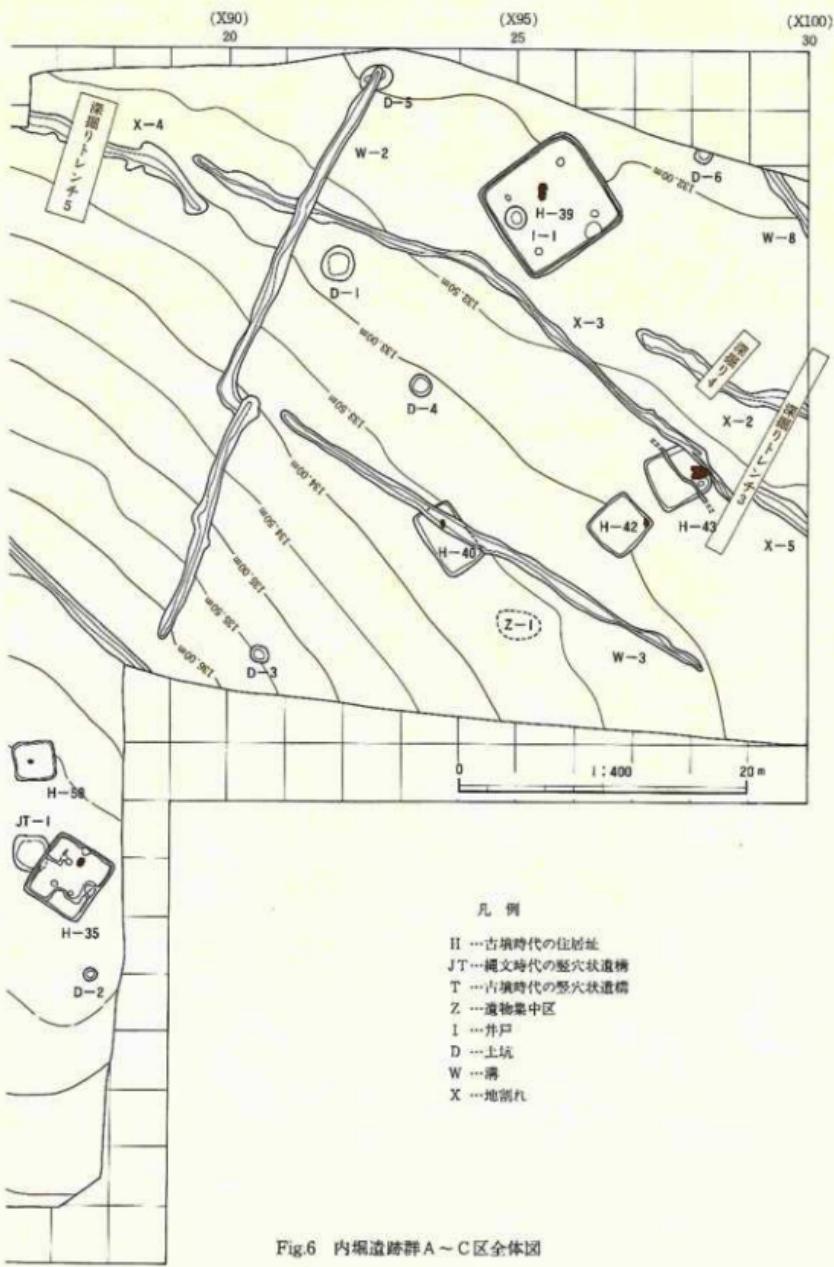


Fig.6 内堀遺跡群A～C区全体図

5日より平成3年度3月25日まで遺物整理作業と報告書作成を行った。

IV 層序

ケ-28グリッドの土層を基にして本遺跡の標準土層図を作成した。本遺跡は、内堀遺跡群の北部に存在し、約20~30万年前に赤城山の山体崩壊によって、引き起こされた梨木泥流によって形

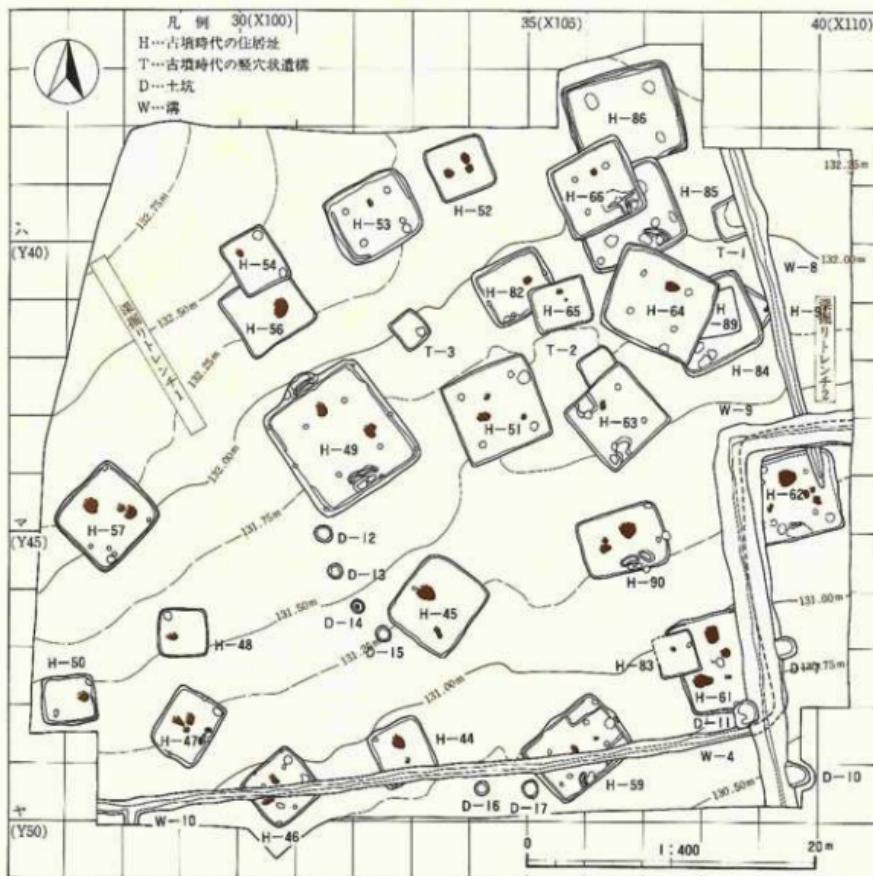


Fig.7 内堀遺跡群D・E区全体図

成された流山を中心とした標高130~137mの丘陵性台地である。流山の頂上には梨木泥流によって運ばれた大形の礫が一部露出し、土層の堆積も薄く、ちなみにVII層のATが表面から50~60cm程度で検出できる。この台地と沖積地の比高は6~7mである。

- I a層 黒褐色粗砂層。耕作土層。As-B(1108年降下)を50%以上含む。粘性なく、締まりあり。
- I b層 黒褐色土層。As-B、浅間C軽石(As-C、4世紀中葉降下)、二ツ岳軽石(Hr-FP、6世紀中葉降下)を含む粗砂層。粘性はないが、締まりはある。
- II a層 黒色細砂層。As-C、Hr-FP(径20mm)を15%含む細砂層。粘性を少し有し、締まりあり。
- II b層 暗灰黄色細砂層。粘性は少しあるが、締まりが弱い。
- III 層 黄褐色細砂層。淡色黒ボク土。ソフトローム層。粘性は少しあるが、締まりが弱い。龜文時代遺物包含層。
- IV a層 明黄褐色硬質ローム層。As-YP(約1.3~1.4万年前)を10%、As-SP(約1.5万年前)を5%を含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

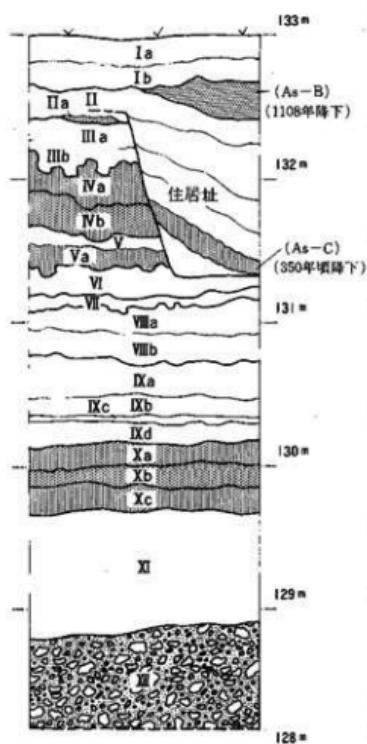


Fig.8 内堀遺跡群標準土層図

- IV b層 明黄褐色土層。ハードローム層。As-YPを5%、As-SPを10%程度含む微砂層。粘性があり、かたくしまる。
- V 層 明黄褐色硬質ローム層。As-BP(1.6~2.1万年前)をブロックで20~30%程度含む層。粘性があり、硬く締まる。
- VI 層 明黄褐色硬質ローム層。As-BPをブロックで15%程度含む層。粘性があり、締まりが弱い。
- VII 層 明黄褐色微砂層。風化土壌。粘性を有し締まりは弱い。AT(約2.1~2.2万前)の含有が極大値を示す。
- VIII 層 明黄褐色粘土層。暗色帶。粘性が強く、締まりの弱い粘土層。色調でa・bの2亜層に分類できる。
- IX 層 明黄褐色粘土層。粘性が強く、締まりのある粘土層。a~dの4亜層に分類できる。
- X 層 明黄褐色軽石層。Hr-HP(4.1万年前)。3亜層に分類でき、Xa層は比較的大粒な軽石層、Xb層は火山灰層、Xc層は軽石層である。
- XI 層 褐色粘土層。水性堆積で非常に粘性が強い。
- XII 層 青灰色砂疊層。巨疊によって構成される。梨木泥流(約20~30万年前)。

V 遺構と遺物

本年度の発掘調査では、住居址37軒・竪穴状遺構4基・遺物集中区1基・土坑15基・井戸1基・溝7条・縄文時代包含層のほか、平安時代の大地震によって形成された地割れが南北2カ所に検出された。調査の主体となった古墳時代初頭の住居址は32軒を数え、すでに「内堀遺跡群II」「内堀遺跡群III」で報告されている住居址を合わせると70軒近い数になる。このほかに、古墳時代中期の住居址4軒と後期の住居址1軒を検出した。竪穴状遺構4基のうち1基は、縄文時代後期初頭のものであった。残りの3基は、古墳時代前期のもので、遺物集中区と土坑5基も同様に古墳時代前期であった。井戸1基と溝1条が古墳時代後期の所産で同時期の住居址との関連が考えられる。このほかの土坑や溝は中世から近世にかけてのものと考えられる。W-9号溝と呼んだものは、方形区画の溝の一部分の調査であったが、本地域の中世を考察する上で重要な遺構となつた。縄文時代や旧石器時代の調査は、遺跡保存のため実施しなかつた。しかし、縄文土器や石器が古墳時代の住居覆土や遺構確認作業の際に出土した。

1 住居址

H-35号住居址 (Fig. 13・45・67・70, P.L. 4・19・31)

(位置) チヘテー16~18G(重複) J T-1を切る。(形状) 正方形(規模)長軸5.30×短軸4.58m。確認面からの壁高80cm(面積)20.8m²(方位)N-35°E(覆土)3層に大別できる。1層がAs-Bを含み、2層がAs-C混じりで、3層がローム土を主体とする。(床面)炉址周辺と主柱穴に囲まれた部分がきわめて堅緻であった。(戸址)主柱穴を結んだ線より外に設置される。北東壁寄り中央で、長径60×短径44×深さ6cmで炉緑石を使用。(柱穴)4個の主柱穴が検出された。規模は、P₁・長径38×短径36×深さ52cm、P₂・長径46×短径36×深さ56cm、P₃・長径36×短径34×深さ43cm、P₄・長径36×短径31×深さ45cm。ほかに、P₅・長径43×短径42×深さ23cmがP₁の北西隣りで、また、入り口ピットと思われるP₆・長径61×短径58×深さ34cmが、南東壁際中央で検出された。(貯蔵穴)北東壁際中央部でP₇・長径53×短径45×深さ61cmが検出。(周溝)全周(馬蹄形状施設)南東壁際中央部のP₈周辺にある。(ベッド状遺構)北隅と南隅とに段差5cmの高低差を有する。(遺物)出土遺物は総数135点である。このうち、赤井戸式や樽式系の土器は、15%程度占める。刷毛目を有する破片は出土しなかつた。図示した遺物は7個体である。4はH-36の破片と接合をみせる。このほかに紡錘車と砥石が出土している。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期はI期に位置付けられる。

H-36号住居址 (Fig. 13・45, P.L. 4・19)

(位置)チツテー14~16G(形状)正方形(規模)長軸4.86×短軸4.04m。確認面からの壁高63cm

(面積) 18.0m² (方位) N-38°-E (覆土) 3層に大別できる。1層がAs-Bを含み、2層がAs-C混じりで、3層がローム土を主体とする。(床面) ほぼ平坦であり、馬蹄形状施設から中央部にかけて堅緻面が広がる。(炉址) 住居の中心より北西壁寄りに位置し、長径77×短径49×深さ2cmの規模で、土器2片と1石を用いていた。(柱穴) 長軸線上に2個の主柱穴を検出。P₁・長径57×短径46×深さ49cmで、P₄・長径56×短径53×深さ51cmである。ほかに、P₂・長径51×短径38×深さ29cmの入り口ピットが南東壁際中央付近で検出された。(貯蔵穴) 東隅でP₁・長径65×短径63×深さ61cmが検出された。(馬蹄形状施設) 南東壁ぎわ中央付近のP₂周辺にある。(遺物) 遺物は総数43点と少なかった。赤井戸式や樽式系の割合は13%程度である。刷毛目を持つ破片はない。このうち2個体を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はⅠ期に位置付けられる。

H-37号住居址 (Fig. 14・45, P L. 4・19)

(位置) ツ～ナ-14・15G (形状) 正方形 (規模) 長軸5.37×短軸4.60m。確認面からの壁高77cm (面積) 22.8m² (方位) N-29°-E (覆土) 3層に大別できる。1層がAs-Bを含み、2層がAs-C混じりで、3層がローム土を主体とする。(床面) 住居の北東半分に焼土3カ所、炭化物2カ所あり。(炉址) P₁とP₄の主柱穴を結んだ線より外部に位置し、土器破片を石の代わりに用いた長径61×短径54×深さ8cmである。(柱穴) 4個の主柱穴が検出された。規模は、P₁・長径45×短径39×深さ55cm、P₂・長径46×短径42×深さ53cm、P₃・長径43×短径35×深さ62cm、P₄・長径32×短径31×深さ55cmである。ほかに、P₅・長径49×短径46×深さ44cmの入り口ピットが南東壁際で検出された。(貯蔵穴) 北西壁を抉りこんだ形で横穴形貯蔵穴P₆・長径85×短径75×深さ26cmが検出された。(周溝) 北東、南東、南西壁に沿ってみられる。(馬蹄形状施設) 南東壁際のP₅周辺にある。(遺物) 総数89点の遺物が出土した。赤井戸式や樽式系は10%の割合である。磨きを多用するものが多い。このうち3点が図示。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はⅠ期に位置付けられる。

H-38号住居址 (Fig. 14・45, P L. 4・19)

(位置) ナ-ニ-10-11G (形状) 正方形 (規模) 長軸3.75×短軸3.08m。確認面からの壁高68cm (面積) 9.9m² (方位) N-81°-W (覆土) 5層に大別できる。1層は、As-Bを含み、2～4層はAs-C混じりで、特に5層には、よごれたAs-Cが高い割合で検出された。(床面) ほぼ全面にわたって堅緻面を検出できた。(炉址) 住居長軸上に2個検出。F₁は、北東隅寄りに位置し、長径68×短径34cm×深さ9cmで炉縁石を使用。F₂は、住居の中央からやや西壁寄りに位置し、長径46×短径33cm。(柱穴) 長軸に直行する2壁面に、斜めの掘り込みを持つ主柱穴P₄・P₅がそれぞれ1個ずつ検出。立ち上がりの角度はP₄が73°、P₅が71°であった。規模はP₄が長径29×短径22×深さ46cm、P₅が長径23×短径12×深さ49cmである。ほかに、P₃・長径20×短径19×深さ34cm、が確認された。

P₂は、長径35×短径27×深さ33cmの規模を有し、馬蹄形状施設に囲まれて存在することから、入り口ピットと判断できた。(貯蔵穴) 北東隅に横穴形貯蔵穴P₁・長径59×短径41×深さ20cmが検出された。(馬蹄形状施設) 南東隅。入り口ピットP₂を伴う。床面と比べ3cm前後の高まりを持つ。(遺物) 総数4点のうち土器が2点と極めて少なかった。このうち、1点は、口縁部分を除いて完存していた。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はⅠ期に位置付けられる。

H-39号住居址 (Fig. 15・46, P L, 5・20)

(位置) オヘキ-24~26G(重複) I-1に切られる。(形状) 正方形(規模) 長軸8.06×短軸7.84m。確認面からの壁高43cm(面積) 58.3m²(方位) N-57°-E(覆土) 3層に大別できる。1層はAs-Bを主体とし、2層はAs-C混じりで、3層は、ローム土を主体とする。(床面) ほぼ平坦な床であった。丘陵の低い面に構築されていたため、床面の構築層が軟らかく、やや確認が困難であった。しかし、部分的に貼床が認められ、炉址周辺に堅緻面が存在していた。(炉址) 主柱穴で囲まれた部分のやや北西壁寄りに位置する。炉体土器として甕の下半分を用い、長径60×短径57×深さ8cmの規模。炉体土器は調査中、行方不明。(柱穴) 主柱穴4個が検出。規模は、P₁・長径44×短径40×深さ79cm、P₂・長径36×短径35×深さ68cm、P₃・長径53×短径36×深さ43cm、P₄・長径56×短径44×深さ64cmである。(貯蔵穴) 北東壁際や北寄りに一段テラスを持った状態のP₅が検出された。長径134cm×短径98cm、深さ98cm。覆土中位から多量の粘土が出土。(周溝) 壁面に沿って全周。(遺物) 総数557点の遺物が出土。このうち図示したものは、7点である。H-49の98と接合関係を持つ破片が出土している。遺物の出土状態は、貯蔵穴に集中していた。接合関係はあまりみられない。赤井戸式や樽式系はほとんど出土しなかった。ほかにS字状口縁台付甕破片が20数点出土している。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はⅢ期に位置付けられる。

H-40号住居址 (Fig. 16・46, P L, 5・20)

(位置) サヘス-23・24G(重複) W-3に切られる。(形状) 長方形(規模) 長軸5.10×短軸3.06m。確認面からの壁高18cm(面積) 13.8m²(方位) N-34°-W(覆土) 最上部に搅乱層があったが、2層に大別できる。1層は黒色土主体で少しAs-C・Hr-FPを含み、2層はローム土を主体とする。壁・床面の検出は困難であった。(床面) ソフトローム面で形成され、堅緻面も存在しない。(炉址) 住居中央よりやや北隅に位置し、長径53×短径48cmの地床炉。(遺物) 総数45点の遺物が出土。樽式系が20%近くを占める。図示した遺物は2点である。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、Ⅰ期に位置付けられる。

H-41号住居址 遺構確認で、遺物分布・土層から住居址と判断したが、精査によってZ-1号遺物集中区に名称変更を行った。従って、H-41号住居址は欠番扱いとなる。

H-42号住居址 (Fig. 16・46・68、P.L. 5・31)

(位置) サ・シー-26・27G (形状) 正方形 (規模) 長軸3.47×短軸3.42m。確認面からの壁高46cm (面積) 11.1m² (方位) N-46°-E (覆土) 3層に大別できる。1層はAs-B混じり、2層はAs-C、Hr-FP混じりの黒色土で、3層はローム土主体とする。(床面) 住居の東隅に焼土が堆積していた。(遺物) 総数96点の遺物が出土した。このうち樽式系の破片が53%を占める。図示したものは、有段口縁の壺である。S字状口縁台付壺の破片は1点である。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、I期に位置付けられる。

H-43号住居址 (Fig. 17・46、P.L. 6・20)

(位置) コ・サー-27・28G (重複) X-3に切られる (形状) 正方形 (規模) 長軸3.76×短軸3.71m。確認面からの壁高58cm (面積) 13.1m² (方位) N-25°-W (覆土) As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入度によって5層に細分できる。(床面) X-3数条によって床面が破壊され、段差を有してした。堅敏面は竈前面に広がっていた。(竈址) 東壁中央南寄りに位置し、X-3によって煙道の一部を破壊されている。主軸方向はN-66°-Eで、推定全長141cm、幅115cmを測る。構築材に粘土を主体として用いていた。(貯蔵穴) 竈の右隣で、P₁・長径64×短径47×深さ51cmが検出された。(周溝) 南東壁ぎわに一部みられる。(遺物) 総数218点の遺物が出土。土師器が主体を占めたが、須恵器も12点出土した。図示した24はMT-15に比定できよう。このほかに3点の遺物を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、V期に位置付けられる。

H-44号住居址 (Fig. 18・47、P.L. 6)

(位置) メ・モー-32・33G (重複) W-4に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸4.27×短軸3.85m。確認面からの壁高26cm (面積) 15.2m² (方位) N-23°-W (覆土) 3層に大別できる。1層にはAs-Cの純層がみられ、最大厚18cm堆積していた。(床面) ほぼ平坦に作出されており、炉址周辺に堅敏面が認められた。(炉址) 主軸方向に2個並んで検出。F₁は北寄りに位置し、長径98×短径76cmの地床炉。F₂は南寄りに位置し、長径44×短径28cmの地床炉。(柱穴) 北西隅にP₁・長径40×短径27×深さ11cmの橢円形のものが検出された。(遺物) 総数68点の遺物が出土。このうち、赤井戸式1%と樽式系21%を占める。図示した遺物は2点である。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、I期に位置付けられる。

H-45号住居址 (Fig. 18・47・48・67・68、P.L. 6・20・31)

(位置) マ～ム-32-34G (形状) 正方形 (規模) 長軸5.89×短軸5.28m。確認面からの壁高29cm (面積) 28.9m² (方位) N-37°-E (覆土) As-C、Hr-FP、ローム土等の混入度から4層に大別できる。特に、3層には、よごれたAs-Cが80%以上も含まれていた。(床面) 西側一帯には、堅敏面が広がっていた。(炉址) 炉を2個検出。F₁は中央西壁寄りに位置し、長径130×短径99×深さ

6 cm の地床炉。F₂ は南隅付近に位置し、長径 81 × 短径 40 cm の地床炉。(柱穴) 2 個検出。規模は、P₁・長径 26 × 短径 25 × 深さ 14 cm、P₂・長径 81 × 短径 40 × 深さ 29 cm。なお、P₂ は入り口ビットと思われる。(周溝) 壁面に沿って全周。(遺物) 総数 411 点が出土。赤井戸式 13%、樽式系 27% を占める。このうち 12 個体を図示。遺物分布は北西壁側に集中して分布。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、I 期に位置付けられる。

H-46号住居址 (Fig. 19・48・49・67・69、PL. 6・20・31)

(位置) メヘヤ-30・31G (重複) W-4 に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸 4.49 × 短軸 4.27 m。確認面からの壁高 77 cm (面積) 17.6 m² (方位) N-48°-E (覆土) As-B, As-C, Hr-FP、ロームブロック等の混入度によって、6 層に細分できる。特に、1 層は As-B が主体で、また、5 層はよごれた As-C を高比率で含有していた。(床面) ほぼ全面にわたって堅緻面が存在。東隅に粘土が分布。(炉址) 2 個検出。F₁ は北寄りに位置し、長径 72 × 短径 41 × 深さ 3 cm で炉縁石を使用。F₂ は南西寄りに位置し、長径 86 × 短径 39 × 深さ 4 cm の地床炉。(柱穴) 4 個の主柱穴が検出された。規模は、P₁・長径 32 × 短径 24 × 深さ 69 cm、P₂・長径 35 × 短径 26 × 深さ 68 cm、P₃・長径 48 × 短径 39 × 深さ 71 cm、P₄・長径 32 × 短径 28 × 深さ 69 cm である。主柱穴と関連をみせるかのように P₅～P₁₀ が存在していた。この中で、馬蹄形状施設の在り方から、P₁₀ は入り口ビットの可能性も考えられる。規模は P₅・長径 23 × 短径 22 × 深さ 9 cm、P₈・長径 25 × 短径 22 × 深さ 7 cm、P₉・長径 39 × 短径 22 × 深さ 12 cm、P₁₀・長径 50 × 短径 40 × 深さ 29 cm である。さらに、南東壁寄り中央付近に P₁₁・長径 28 × 短径 21 × 深さ 32 cm を、また、北東壁寄りに P₁₂・長径 67 × 短径 52 × 深さ 26 cm を検出できた。なお、P₁₁ も入り口ビットの可能性が考えられる。

(貯蔵穴) 北西壁際に P₆・長径 58 × 短径 32 × 深さ 39 cm の横穴形貯蔵穴、北隅付近に P₇・長径 61 × 短径 56 × 深さ 77 cm のほぼ円形のものが検出された。(馬蹄形状施設) P₁₀ を取り囲んで存在。(遺物) 総数 487 点の遺物が出土。土器の割合は赤井戸式が 4%、樽式系が 14% を占めていた。図示した土器は 8 点で、ほかに管玉・砥石がある。48 の台付壺は受口状を呈する。また住居址の周囲から滑石製勾玉も出土。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、I 期に位置付けられる。

H-47号住居址 (Fig. 20・50・51・68、PL. 6・21・22・32)

(位置) ムヘモ-28・29G (形状) 長方形 (規模) 長軸 4.88 × 短軸 3.80 m。確認面からの壁高 72 cm (面積) 17.4 m² (方位) N-31°-E (覆土) As-C、ロームブロック等の混入度によって、8 層に細分できる。特に、5 層には、よごれた As-C が 70% 含まれていた。(床面) 全面にわたって堅緻面が広がっていた。(炉址) 中央部に 3 個検出。F₁ は北西壁寄りに位置し、長径 82 × 短径 51 × 深さ 5 cm の地床炉。F₂ はほぼ中央に位置し、長径 39 × 短径 34 × 深さ 6 cm で炉縁石を使用。F₃ は北東壁寄りに位置し、長径 76 × 短径 62 cm の地床炉。(柱穴) 向かい合う壁の中央に斜めに掘られた主柱穴 P₁・P₂ を検出。規模は、P₃・長径 60 × 短径 40 × 深さ 76 cm、P₄・長径 67 × 短径 38 × 深さ 60 cm。ほかに、

南東壁際中央付近でP₁・長径22×短径13×深さ38cmの入り口ピットを検出する。(貯蔵穴)住居東隅に梢円形のP₁・長径60×短径47×深さ47cmのものと南東壁際中央部にP₂・長径93×短径50×深さ60cmの瓢箪形のものが検出された。(馬蹄形状施設)南東壁際P₂、P₃を取り囲んで存在。(遺物)総数1,174点の遺物が出土。土器の割合は赤井戸式7%・樽式系20%を占める。図示したものは26個体である。このほかに鉄鎌1点を図示。遺物は西壁に寄った部分からの出土が多い。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期は、I期に位置付けられる。

H-48号住居址 (Fig. 20・51・67、P.L. 7・22・31)

(位置) ミ・ム-28・29G (形状) 正方形 (規模) 長軸3.38×短軸3.38m。確認面からの壁高9cm (面積) 10.3m² (方位) N-2°-W (覆土) As-C、Hr-FP、ローム土の混入度によって1層を2つに細分化する。(床面) III層面構築のため検出困難であったが、部分的に貼床面検出する。(炉址)住居西壁寄りに位置し、長径75×短径39cmの規模を有する地床炉。(貯蔵穴)北西隅に長径69×短径53×深さ53cmのものを検出する。(遺物) 総数367点の遺物が出土。土器の割合は、赤井戸式11%・樽式系14%である。図示した遺物は赤井戸式の壺1個体である。ほかに手捏土器を図示。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、I期に位置付けられる。

H-49号住居址 (Fig. 21・22・51~53・67~69・72、P.L. 7・8・22・23・31・32)

(位置) フ-ホ-30~33G (形状) 正方形 (規模) 長軸9.50×短軸8.27m。確認面からの壁高117cm (面積) 69.6m² (方位) N-34°-W (覆土) 3層に大別できる。1層はAs-B主体で、As-Bの純層が多量に存在していた。2層、3層は、As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって分けられる。なお、3層からは、粘土、焼土、炭化物が多量に出土したため焼失住居址と判断できた。(床面)全体にわたって堅緻面を検出できた。(炉址) 2個検出。F₁は北西壁寄り中央に位置し、長径100×短径75×深さ8cmの地床炉。F₂は南東壁寄りほぼ中央に位置し、長径88×短径84×深さ8cmの地床炉。(柱穴) 柱受け粘土貼りの主柱穴を4個検出。各主柱穴の規模は、P₁・長径36×短径29×深さ95cm、P₂・長径42×短径36×深さ92cm、P₃・長径39×短径34×深さ81cm、P₄・長径37×短径37×深さ70cmである。また、南西壁と北東壁とにそれぞれ3個ずつ計6個の壁柱穴を検出。各壁柱穴の規模は、P₅・長径37×短径30×深さ33cm、P₆・長径35×短径26×深さ34cm、P₇・長径33×短径24×深さ44cm、P₈・長径30×短径24×深さ50cm、P₉・長径37×短径28×深さ50cm、P₁₀・長径28×短径27×深さ49cmである。ほかに、P₁₁・長径63×短径43×深さ52cmの入り口ピットが、南東壁際中央に検出された。(貯蔵穴) 南東壁際中央P₁₂の南西にP₁₃・長径107×短径78×深さ46cmのものが検出された。(周溝) 南西壁際の一部を除いて、ほぼ壁面に沿って巡らされている。(馬蹄形状施設) 南東壁際、P₅・P₁₂の周りにある。(階段状施設) 北西壁中央に間口2.45m・奥行き1.12mの住居外へ掘りこんだ「階段状施設」が存在した。3段の階段状になっており、下から1段め・間口157×奥行き26×高さ26cm、2段め・間口160×奥行き12×高さ34cm、3段め・間口157×

奥行き44×高さ36cmである。(遺物) 総数7,245の遺物が出土。覆土上部から多くの土器片が出土しており、平安時代の土師質土器(77)・古墳時代後期の椀(80)が出土している。土器の割合は赤井戸式0.6%・樽式系1.9%と少なくそのほかの土器が主体を占める。図示した土器は33個体である。このうち95~97は特殊器台であり、98は外来系の壺である。このほかに、算盤玉状土製品・匙形土製品・手捏土器3個体・鉄器3点・土製円盤・凹石・磨石が出土。他の住居址との遺物の接合関係は、98がH-39・100がH-38を有し、H-50の124との関係も有す。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、III期に位置付けられる。

H-50号住居址 (Fig. 23・53~55・68・72、P L. 8・23・24・32)

(位置) ム・メー26・27G (形状) 正方形 (規模) 長軸3.77×短軸3.43m。確認面からの壁高55cm (面積) 11.7m² (方位) N-82°-E (覆土) As-C, Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって、4層に大別できる。2b層によごれたAs-Cが多量に入る。(床面) 貼床で施され、堅織面が全面にわたって分布。(炉址) 東壁寄り中央に長径73×短径67×深さ5cmの地床炉。(貯蔵穴) 2個検出。P₁は南西隅に位置し、長径47×短径35×深さ41cm。P₂は北東隅に位置し、長径45×短径36×深さ44cm。(周溝) 南東部に存在。(遺物) 総数268点の遺物が出土。このうち図示したものは、18個体にのぼる。ほかに、鉄器1点を図示。113・117は東海系の高杯。118は片口壺・124は東関東系の壺・122は赤井戸式の壺と考えられる。124はH-49と接合関係を有する。土器の割合は、赤井戸式10%・樽式系20%を占める。(備考) 出土遺物から、住居址の所産時期はI期に位置付けられる。

H-51号住居址 (Fig. 23・56、P L. 8・25)

(位置) ヒヘヘ-33~35G (形状) 正方形 (規模) 長軸6.28×短軸6.12m。確認面からの壁高16cm (面積) 36.7m² (方位) N-68°-E (覆土) 2層に大別できる。1層はAs-C, Hr-FP等を含む粗砂層で、2層はローム土主体の細砂層である。(床面) ソフトローム面で構築されていたため確認が困難であったが、貼床面が検出できた。炉址より南に堅織面が広がっていた。(炉址) 3個検出。F₁は住居中央やや北壁寄りに位置し、長径43×短径31cmの地床炉。F₂は住居中央やや西壁寄りに位置し、長径98×短径60cmの地床炉。F₃は東隅寄りに位置し、長径42×短径33cmの地床炉。(柱穴) 4個の主柱穴を検出する。規模は、P₁・長径44×短径42×深さ50cm、P₂・長径47×短径42×深さ51cm、P₃・長径61×短径51×深さ60cm、P₄・長径41×短径39×深さ57cmである。(貯蔵穴) 東壁際北東隅寄りに位置し、長径91×短径83×深さ40cmの規模。(遺物) 総数415点の遺物が出土。土器の割合は、赤井戸式や樽式系にくらべS字台壺が多い割合を示す。図示した土器は、5個体である。128は台付壺である。(備考) 出土遺物から、住居址の所産時期はIII期に位置付けられる。

H-52号住居址 (Fig. 24・56、P.L. 8・25)

(位置) ネ・ノー33・34G (形状) 正方形 (規模) 長軸4.22×短軸3.83m。確認面からの壁高13cm (面積) 14.9m² (方位) N-71°-E (覆土) As-Cの混入率の違いによって2層に大別できる。(床面) ソフトローム面に構築されていたため確認が困難であったが、炉址周辺に堅緻面を確認できた。(炉址) 3個検出。F₁は北寄りに位置し、長径76×短径61cmの地床炉。F₂は西寄りに位置し、長径70×短径53cmの地床炉。F₃はやや南寄りに位置し、長径63×短径48cmの地床炉。(遺物) 総数69点の遺物が出土。このうち図示したものは1個体である。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H-53号住居址 (Fig. 24・56・57・67・68、P.L. 8・25・31・32)

(位置) ネ～ハ-31～33G (重複) X-1に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸6.04×短軸5.33m。確認面からの壁高69cm (面積) 28.9m² (方位) N-66°-E (覆土) As-C、Hr-FP等の混入率の違いによって、5層に大別できた。(床面) 西壁に沿って高まりを検出。主柱穴に囲まれた部分に堅緻面が存在。(炉址) 住居中央やや北西壁寄りで、長径57×短径38×深さ6cmの地床炉を検出。(柱穴) 4個の主柱穴を検出する。各主柱穴の規模は、P₁・長径46×短径43×深さ74cm、P₂・長径54×短径47×深さ66cm、P₃・長径48×短径42×深さ48cm、P₄・長径54×短径40×深さ70cmである。(貯蔵穴) P₅・長径67×短径60×深さ45cmが、東隅付近に検出された。また、周囲はテラスを持つ。(周溝) 北壁中心にやや幅広の周溝が存在。(遺物) 総数619点の遺物が出土。このうち図示したものは12個体である。136～138は棒状浮文を持つ壺、142は小形丸底の壺、143は小形の横刷毛を持つS字台壺である。このほか、鉄器・手捏土器3個体である。土器の割合は、赤井戸式0.7%・樽式6.6%を占め、S字台壺が3%を占める。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H-54号住居址 (Fig. 25・57、P.L. 9・26)

(位置) ノ・ハ-29・30G (重複) X-1に切られ、H-56を切る。(形状) 正方形 (規模) 長軸4.25×短軸3.56m。確認面からの壁高30cm (面積) 14.1m² (方位) N-30°-W (覆土) As-B、As-C、Hr-FP等の混入率の違いによって、3層に大別できる。特に、1層は、As-Bを50%含む。(床面) 住居南側、東西方向にX-1号地割れが走り、床面に亀裂を生じている。中央部に堅緻面が存在。(炉址) 北西隅で、長径56×短径37×深さ4cmの地床炉を検出。(貯蔵穴) 2個検出。P₁は北東隅に位置し、長径68×短径66×深さ27cm、P₂は東南隅に位置し、長径67×短径54×深さ19cmである。(遺物) 総数249点の遺物が出土。このうち図示したのは5点である。土器の構成はS字状口縁台付壺が49%と主体を占めていた。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はIII期に位置付けられる。

H-55号住居址 精査の結果、遺構ではなくなったため欠番扱い。

H-56号住居址 (Fig. 25・58, P.L. 9・26)

(位置) ハ・ヒ-29・31G (重複) H-54に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸5.17×短軸4.88m。確認面からの壁高11cm (面積) 推定24.5m² (方位) N-56°-E (覆土) 遺構構築面が極めて浅かったため、覆土はほとんど存在しなかった。しかし、As-C、Hr-FPの混入率の違いによって、3層に細分できた。(床面) 炉址周辺に堅織面が存在した。(炉址) 住居中央やや東寄りに、長径136×短径83の地床炉を検出する。(遺物) 総数25点と遺物の数は少なかった。このうち図示できたのは、4点である。151は東海系の高杯脚部、152は樽式系の壺、153は欠山式高杯脚部に類似した器台、154は内面頸部に横刷毛調整がなされ、外面に格子目に刷毛が入るS字状口縁台付甕である。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H-57号住居址 (Fig. 26・58・67, P.L. 9・26・31)

(位置) ヘーマ-26・28G (形状) 正方形 (規模) 長軸6.04×短軸5.66m。確認面からの壁高30cm (面積) 36.7m² (方位) N-56°-E (覆土) As-C等の混入率の違いによって4層に大別できる。特に、2層はよごれたAs-Cを50~70%含む。(床面) 全体にわたって堅織面が確認された。(炉址) 3個検出。F₁は西寄りに位置し、長径103×短径94×深さ7cmの地床炉。F₂は東寄りに位置し、長径92×短径64cmの地床炉。F₃はF₂の西側にあり、長径53×短径53cmの地床炉。(柱穴) 6個検出。P₁は東隅にあり、長径32×短径29×深さ42cm、P₂はP₁の北東側に位置し、長径37×短径27×深さ23cm、P₄はP₁の北側に位置し、長径37×短径27×深さ23cm、P₅は南西壁際にあり、長径33×短径26×深さ10cm、P₆は北隅にあり、長径47×短径36×深さ24cm。P₇は炉址F₂の下にあり、長径33×短径28×深さ36cmである。(貯蔵穴) P₈は南隅にあり、長径66×短径60×深さ47cmである。(周溝) 全周。(遺物) 総数209点の遺物が出土。このうち図示したものは、3点である。土器の割合は、樽式系が30%と高比率を占める。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はI期に位置付けられる。

H-58号住居址 (Fig. 26, P.L. 9)

(位置) タ-16・17G (形状) 正方形 (規模) 長軸2.87×短軸2.58m。確認面からの壁高14cm (面積) 6.8m² (方位) N-83°-E (覆土) 2層に大別でき、1層がAs-C混じりで、2層はローム土を主体とする。(床面) ソフトローム面で構築されていたため床面の認定が困難であった。また、炉址周辺にわずかな堅織面が検出できた。(炉址) 住居中央に位置し、長径39×短径30の地床炉。(遺物) 総数13点と遺物はすくなかった。(備考) 古墳時代前期の所産。細かな時期判定は困難。

H-59号住居址 (Fig. 27・58・67・68、P.L. 9・10・26・31・32)

(位置) ム～モ-34～36G (重複) W-4に切られる。(形状) 長方形 (規模) 長軸6.80×短軸5.18m。確認面からの壁高87cm (面積) 32.1m² (方位) N-50°-E (覆土) As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって、10層に大別できる。特に、9層にはよごれたAs-Cが50%以上入る。(床面) 全面にわたって極めて堅緻な床面が検出できた。(炉址) 3個検出。F₁は住居のほぼ中央に位置し、長径68×短径38×深さ6cmの地床炉。F₂は南西壁寄り中央に位置し、長径101×短径52×深さ6cmで土器片を使用。F₃は北東壁寄り中央に位置し、長径33×短径19cm。(柱穴) 4個の主柱穴を検出する。規模は、P₁・長径30×短径28×深さ78cm、P₂・長径31×短径31×深さ81cm、P₃・長径34×短径32×深さ74cm、P₄・長径39×短径33×深さ83cmである。ほかに、P₁・長径31×短径19×深さ33cmが南隅付近で、P₅・長径39×短径34×深さ30cmが北隅際にあり、入り口ピットと考えられるP₁₀・長径44×短径33×深さ33cmが南東壁際ほぼ中央に検出された。(貯蔵穴) P₅・P₉は北東壁に2個まとめて検出された。P₉は横穴形貯蔵穴である。規模は長径66×短径60×深さ52cm。P₉は円形で、長径63×短径63×深さ135cmである。P₉の覆土に多量のロームブロックが堆積していたことから、P₉→P₅という変遷がとらえられた。ほかに、P₄・長径65×短径59×深さ30cmが南東壁に存在。(周溝) ほぼ全周。(馬蹄形状施設) 南東壁際のP₆・P₁₀に沿って存在。(ベッド状遺構) 北隅と東隅に向かいあって2基が、ほぼ長軸に線対象の位置で検出。2基とも長方形をしており、北は幅2.4×長1.0×高6cm、東は幅2.1×長0.8×高8cmである。(遺物) 総数1,089点の遺物が出土。このうち図示したものは、8個体である。ほかに、鉄鎌・紡錘車・手捏土器2個体を図示。土器の割合は赤井戸式が5%・樽式系が1%を占める。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は1期に位置付けられる。

H-60号住居址 確認調査を実施。メ・モ-39・41Gに存在。H-88号住居址に切られる。

H-61号住居址 (Fig. 28・59・67・68・70、P.L. 10・31・32)

(位置) ミ～メ-37～39G (重複) W-4・9、H-83、D-11に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸6.82×短軸推定5.93m。確認面からの壁高44cm (面積) 推定40.9m² (方位) N-16°-W (覆土) As-B、As-C、ロームブロック等の混入率の違いによって5層に大別できる。1層はAs-Bを20～30%含む。3層はよごれたAs-Cが30～40%入る。(床面) ほぼ全面にわたって堅緻面が確認された。(炉址) 地床炉を7個検出。F₁は北壁に位置し、長径120×短径86×深さ8cmの地床炉。F₂は住居中央に位置し、長径76×短径62×深さ6cmの地床炉。F₃は東壁寄りに位置し、長径80×短径59cmの地床炉。F₄は西壁寄りに位置し、長径132×短径92×深さ7cmの地床炉。F₅は住居中央やや南壁寄りに位置し、長径132×短径92cmの地床炉。F₆は住居中央に位置し、長径15×短径11cmの地床炉。F₇は北西隅近くに位置し、長径38×短径23cmの地床炉。(柱穴) 2個検出。P₁は住居のほぼ中央にあり、長径65×短径59×深さ90cm。P₂は南壁中央にあり、長径49×短径47×深

さ64cm。入り口ピットか。(周溝)部分的に存在。(遺物)総数1,197点の遺物が出土。このうち図示したものは、3点である。ほかに、鉄器・紡錘車・砥石がある。遺物の割合は、赤井戸式4%、樽式系18%である。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期はI期に位置付けられる。

H-62号住居址 (Fig. 29・59・67、P.L. 10・27・31)

(位置)ヘーマー38~40G(重複)W-4・8・9に切られる。(形状)正方形(規模)長軸推定6.74×短軸5.80m。確認面からの壁高30cm(面積)推定37.7m²(方位)N-75°-E(覆土)As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって4層に大別できる。(床面)ほぼ平坦な床で中央部に堅緻面が検出できた。(炉址)4個検出。F₁は最も北壁寄りに位置し、長径127×短径115×深さ6cmの地床炉。F₂は東壁寄りに位置し、長径103×短径55cmの地床炉。F₃はF₂の南東にあり、長径70×短径49cmの地床炉。F₄は西壁寄りにあり、長径57×短径23cmの地床炉。(柱穴)9個検出された。4個の主柱穴の規模は、P₁・長径27×短径22×深さ72cm、P₂・長径45×短径37×深さ75cm、P₃・長径32×短径30×深さ72cm、P₄・長径32×短径32×深さ83cmである。ほかに、P₅・長径96×短径72×深さ34cm、P₆・長径62×短径57×深さ37cm、P₇・長径51×短径47×深さ17cm、P₈・長径68×短径53×深さ55cm、P₉・長径72×短径54×深さ22cmである。なお、P₉は入り口ピットと思われる。(貯蔵穴)南壁際中央にP₅・長径72×短径54×深さ22cmが検出。(馬蹄形状施設)南壁中央付近P₅・P₆の北側にみられる。(遺物)総数1,419点の遺物が出土。このうち図示したのは、12個体である。175は南関東系の壹で胴下半部に赤色塗彩が施される。ほかに、紡錘車が1点出土。土器の割合は赤井戸式・樽式系・S字状口縁台付壺の破片がそれぞれ3%程度の比率で構成される。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H-63号住居址 (Fig. 30・60・70、P.L. 11・27・31)

(位置)フ・ヘー35~37G(重複)T-2を切る。(形状)正方形(規模)長軸5.43×短軸5.37m。確認面からの壁高43cm。(面積)27.9m²(方位)N-42°-E(覆土)As-C、炭化物、ローム土等の混入率の違いによって3層に大別できる。(床面)ほぼ平坦な床で中央部に堅緻面が存在。(炉址)中央北壁寄りに位置し、長径71×短径43×深さ8cmで炉縁石を使用。(柱穴)4個の主柱穴を検出する。規模は、P₁・長径59×短径50×深さ73cm、P₂・長径47×短径40×深さ66cm、P₃・長径39×短径35×深さ67cm、P₄・長径38×短径35×深さ50cmである。なお、P₁・P₂・P₄の底部に柱受け用の粘土が検出された。(貯蔵穴)P₅・長径60×短径53×深さ30cmが南隅で検出された。(類ベッド状遺構)北西壁側と南東壁側とには長軸を線対象とする位置にみられる。(遺物)総数518点の遺物が出土。このうち図示した土器は2個体である。このうち320はH-83の遺物と接合する。ほかに砥石が1点出土。土器の割合は赤井戸式・樽式系・S字状口縁台付壺が極めて少ない。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期はIV期に位置付けられる。

H-64号住居址 (Fig. 31・60・61・68・71、P.L. 11・27・28・31)

(位置) ハーフー36~38G (重複) H-84・85・89を切る。(形状) 正方形 (規模) 長軸7.20×短軸6.47m。確認面からの壁高66m (面積) 43.1m² (方位) N-68°-W (覆土) As-B、As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって4層に大別できる。1層はAs-Bを50%程度含む。

(床面) 床面は堅緻面の分布が少ないため、検出が困難であった。また、東西方向に4条の地割れが走り、床面を壊している。(炉址) 北東壁寄り中央に位置し、長径99×短径66×深さ10cmの壺の上半部を炉体土器として使用。(柱穴) 柱受け用の粘土が貼ってある主柱穴を4個検出。規模は、P₁・長径44×短径38×深さ77cm、P₂・長径49×短径43×深さ89cm、P₃・長径45×短径36×深さ91cm、P₄・長径49×短径43×深さ77cmである。(貯蔵穴) P₅・長径66×短径61×深さ47cmが南壁際に検出。(周溝) 北・西・南の3壁に沿ってみられた。(遺物) 総数518点の遺物が出土。このうち図示したのは12個体である。187は大形の壺である。土器破片の割合はS字状口縁台付壺が高比率を占める。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はIV期に位置付けられる。

H-65号住居址 (Fig. 29・61・62・68、P.L. 11・28・29・31)

(位置) ハ・ヒ-35・36G (重複) H-82を切る。(形状) 長方形 (規模) 長軸4.02×短軸3.21m。確認面からの壁高34cm (面積) 12.3m² (方位) N-74°-E (覆土) As-C、Hr-FP、ローム土等の混入率の違いによって2層に大別できる。(床面) 構築面が浅かったため床の検出は困難であった。

(炉址) 2個検出。F₁は北壁寄り中央に位置し、長径45×短径31cmの地床炉。F₂は住居中央やや東壁寄りに位置し、長径22×短径21cmの地床炉。(遺物) 総数241点の遺物が出土。このうち図示したのは12個体である。ほかに小形の砥石が出土。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はIV期に位置付けられる。

H-66号住居址 (Fig. 32・63・68・70・71、P.L. 12・29・32)

(位置) ネ・ノ-35~37G (重複) H-85・86を切る。(形状) 正方形 (規模) 長軸5.62×短軸5.45m。確認面からの壁高68cm (面積) 28.2m² (方位) N-64°-E (覆土) As-B、Hr-FP、As-C、ロームブロック等の混入率の違いによって4層に大別できる。1層はAs-Bを40%含む。また、炭化材の出土もみられたことから焼失住居址といえる。(床面) ほぼ平坦な床で、堅緻面が主柱穴を囲んだ部分に存在。(炉址) P₁とP₄を結んだ線上に位置し、長径46×短径38cmの地床炉。(柱穴) 4個の主柱穴が存在。規模は、P₁・長径38×短径34×深さ59cm、P₂・長径42×短径32×深さ50cm、P₃・長径46×短径36×深さ56cm、P₄・長径47×短径46×深さ54cmである。なお、P₁・P₃・P₄の底に柱受け用の粘土を検出する。(貯蔵穴) ほぼ円形を呈するP₅が東南隅に存在する。長径60×短径49×深さ50cm。(周溝) 東壁を除く3壁に巡らされている。(馬蹄形状施設) P₅を取り囲む形で東隅にT字状で検出された。高さ11cmと他の馬蹄形状施設に比べ際立って高い。(遺物) 総数584点の遺物が出土。このうち図化したものは、3個体である。ほかに鉄器・敲石が1点ずつ出土して

いる。土器の割合は、S字台壇が6.4%を占めている。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はIV期に位置付けられる。

- H-67号住居址 確認調査を実施。ト～ニ-31～33Gに存在。
- H-68号住居址 確認調査を実施。ナ・ニ-34～36Gに存在。
- H-69号住居址 確認調査を実施。ヌ・ネ-39・40Gに存在。H-87号住居址に切られる。
- H-70号住居址 確認調査を実施。ナ-40Gに住居西隅を確認する。
- H-71号住居址 確認調査を実施。ツ・テ-38・39Gに存在。
- H-72号住居址 確認調査を実施。チ・ツ-38・39Gに存在。
- H-73号住居址 確認調査を実施。ソ-チ-37～39Gに存在。
- H-74号住居址 確認調査を実施。ス-ソ-37～40Gに存在。
- H-75号住居址 確認調査を実施。シ-セ-36～38Gに存在。
- H-76号住居址 確認調査を実施。ケ・コ-39・40Gに存在。
- H-77号住居址 確認調査を実施。コ・サ-36・37Gに存在。
- H-78号住居址 確認調査を実施。ク・ケ-34・35Gに存在。東壁に竈を持つ。
- H-79号住居址 確認調査を実施。コ・サ-33・34Gに存在。
- H-80号住居址 確認調査を実施。コ・サ-31・32Gに存在。
- H-81号住居址 確認調査を実施。ス・セ-30～32Gに存在。

H-82号住居址 (Fig. 33・63・64・67～69、PL. 12・29～32)

(位置) ハ・ヒ-34・35G (重複) H-65に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸5.04×短軸4.25m。確認面からの壁高80cm (面積) 20.4m² (方位) N-61'-E (覆土) As-B、As-C、ローム土の混入率の違いによって5層に大別できる。特に、5層にはよごれたAs-Cが鍵層として存在する。(床面) 全体にわたって堅緻面が広がっていた。東西方向に地震による地割れが4条走り、床面に段差が生じている。(炉址) 住居の中軸線のやや東寄りに、長径61cm×短径42cmで2個の炉縁石を用いた深さ6cmの炉。(柱穴) 西壁と東壁の中央にそれぞれ1個ずつ斜めに掘られた柱穴を検出する。柱穴の規模は、P₁・長径32×短径28×深さ63cm、P₂・長径32×短径26×深さ67cmである。ほかに、入り口ピットと思われるP₃・長径41×短径24×深さ19cmが南隅近くに存在。(貯蔵穴) 2個検出。P₄は横穴形貯蔵穴である。東隅に位置し、長径98×短径79×深さ31cmである。P₅は南西コーナーに位置し、長径68×短径40×深さ36cm。(周溝) 全周。(馬蹄形状施設) P₆に沿って存在する。(遺物) 総数1,204点の遺物が出土。このうち図化したものは20個体である。このほかに鉄器・敲石・手捏土器・勾玉が出土している。土器の割合は赤井戸式3.6%・樽式系3.4%・赤色塗彩3.7%・S字台壇3.1%と多岐にわたっている。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H-83号住居址 (Fig. 34・65・69・70、P L. 12・30・31)

(位置) ミ・ム-37G (重複) H-61を切る。(形状) 正方形 (規模) 長軸2.96×短軸2.80m。確認面からの壁高30cm (面積) 推定8.2m² (方位) N-16°-W (覆土) As-B・As-C・Hr-FP等の混入率の違いによって、3層に大別できる。(床面) 構築面が浅かったため、床面は軟質であり確認が困難であった。(炉址) 住居中央の北寄りで、長径42×短径32cmの地床炉。(貯蔵穴) P₁が東壁際に検出された。規模は長径42×短径31×深さ53cmである。(遺物) 総数166点の遺物が出土。H-61と重複関係をもつたため遺物の流入がみられた。図示した遺物は231の高杯1個体である。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H-84号住居址 (Fig. 35・65・67・69、P L. 12・30・31)

(位置) ハーフ-37~39G (重複) H-64・89に切られ、H-91を切る。(形状) 正方形 (規模) 長軸6.29×短軸5.81m。確認面からの壁高81cm (面積) 33.7m² (方位) N-61°-E (覆土) As-C、ロームブロック、黒色土等の混入率の違いによって6層に分かれる。特に、5層はAs-Cが鍵層としている。(床面) ほぼ東西方向に多数の地割れが存在するため、床面に亀裂と段差が生じている。しかし、床面はほぼ水平に造られ炉址を中心に堅緻面が存在した。(炉址) 2個検出。F₁は北壁寄りの中央に位置し、長径73×短径44×深さ7cmで炉縁石を使用。F₂は住居の東寄りに位置し、長径31×短径22cmの地床炉。(柱穴) 4個の主柱穴を検出する。規模は、P₁・長径62×短径57×深さ80cm、P₂・長径74×短径65×深さ79cm、P₃・長径49×短径43×深さ83cm、P₄・長径60×短径43×深さ80cmである。(貯蔵穴) 2個検出。P₅・長径92×短径66×深さ70cmを南東隅にあり、P₆は隣接して、長径74×短径58×深さ37cmの規模を有する。ほかに、P₇が長径30×短径27×深さ51cmの規模で北側の主柱穴に存在する。(周溝) 全周 (遺物) 総数659点の遺物が出土。このうち図示したものは8個体である。ほかに土玉・磁石2点を図示。土器の割合は赤井戸式2.9%・櫛式系3.6%・S字台窓2.1%で構成される。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H-85号住居址 (Fig. 36・65~67・72、P L. 12・30・31)

(位置) ネ-ハ-35~27G (重複) H-64・66に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸7.10×短軸6.26m。確認面からの壁高42cm (面積) 推定42.0m² (方位) N-67°-E (覆土) As-C、Hr-FP、ロームブロック、黒色土等の混入率の違いによって5層に大別できる。3層によごれたAs-Cが入る。(床面) 全面的に堅緻面が広がっていた。(柱穴) 底に柱受け用の粘土が貼ってある主柱穴を4個検出する。規模は、P₁・長径67×短径52×深さ75cm、P₂・長径93×短径82×深さ61cm、P₃・長径64×短径61×深さ61cm、P₄・長径120×短径100×深さ63cmである。ほかに、P₅・長径90×短径48×深さ58cm、P₆・長径89×短径63×深さ51cm、P₇・長径52×短径46×深さ21cm。なお、P₈は入り口ピットと思われる。(貯蔵穴) 馬蹄形状施設に囲まれたP₈は、長径60×短径50×深さ58cmの規模を有し、南壁際に存在する。(周溝) 重複関係で不詳な部分も多いが、全周するものと考えら

れる。(馬蹄形状施設) 南東壁際でP₅の周りにみられる。(遺物) 総数324点の遺物が出土。このうち図示したものは10個体である。このほかに、手捏土器が1個体出土。赤井戸式や樽式系をはじめS字台壇が同比率で構成される。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はIII期に位置付けられる。

H-86号住居址 (Fig. 37・66, P L, 13・30)

(位置) ニ・ネ-35・37G (重複) H-66・85に切られる。(形状) 2段の掘り込みを持つ正方形(規模) 長軸7.67×短軸6.62m。確認面からの壁高73cm (面積) 推定49.5m² (方位) N-74°-E (覆土) As-C混入の黒色土主体の土層とロームブロックが多く含む土層とが交互に混じり合っている。(床面) 炉址は検出されず、また床面に凹凸もみられ、構築途中で廃棄された住居と思われる。(柱穴) 4個の大形の掘り方を持つ主柱穴を検出する。規模は、P₁・長径107×短径95×深さ87cm、P₂・長径63×短径57×深さ83cm、P₃・長径73×短径61×深さ89cm、P₄・長径85×短径73×深さ95cmである。(遺物) 総数270点の遺物が出土。このうち図示したものは3個体である。土器片の構成は、赤井戸式6.1%・樽式系4.5%と比率が高い。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H-87号住居址 確認調査。ニ～ネ-38・39Gに存在。H-69を切り、W-8に切られる。

H-88号住居址 確認調査。メ～ヤ-39～41Gに存在。H-60を切る。北東壁に轍。

H-89号住居址 (Fig. 34, P L, 13)

(位置) ハ・ヒ-37・38G (重複) H-64に切られ、H-84を切る。(形状) 長方形 (規模) 長軸推定4.01m×短軸3.13m。確認面からの壁高54cm (面積) 現存12.4m² (方位) N-77°-E (覆土) As-C、Hr-FP、黒色土等の混入率の違いで、2層に大別できる。(床面) H-64・84の重複によって、南東部半分の床面のみしか検出できなかったが、黒色土による貼床が施されていた。(遺物) 総数19点の遺物が出土。固化できるものはなかった。(備考) 古墳時代前期の所産。

H-90号住居址 (Fig. 38・66・68, P L, 13・30・32)

(位置) ホ・マ-35～37G (形状) 長方形 (規模) 長軸5.77×短軸4.47m。確認面からの壁高26cm (面積) 18.6m² (方位) N-75°-E (覆土) As-C、ローム土等の混入率の違いで、3層に分けられる。(床面) 平坦な床である。南側に堅緻面が存在。(炉址) 3個検出。F₁はほぼ中央に位置し、長径109×短径104×深さ12cmの地床炉。F₂はやや西寄りに位置し、長径75×短径52×深さ3cmの地床炉。F₃はF₂の北に位置し、長径43×短径40cmの地床炉。(柱穴) 3個検出。規模は、P₁は南壁ほぼ中央に位置し、長径39×短径35×深さ52cm、P₂はP₁の東に位置し、長径45×短径35×深さ51cm、P₃は東壁際にあり、長径35×短径31×深さ22cmを測る。P₁・P₂は入り口ピットか。(貯蔵穴)

P₃は北東隅に位置し、長径54×短径39×深さ19cmである。(馬蹄形状施設) 南壁近くのP₁・P₂の北側に2カ所に分かれて存在。(遺物) 総数139点の遺物が出土。このうち図化したものは赤井戸式の壺1点である。ほかに鉄鎌が1点出土。土器片は赤井戸式が12%・樽式系が15%と高比率を占める。(備考) 出土遺物からⅠ期の所産と考えられる。

H-91号住居址 (Fig. 38, P L. 13)

(位置) ハ・ヒ-38・39G (重複) H-84・W-8に切られる。(形状) 方形 (規模) 長軸現存2.52×短軸現存1.75m。確認面からの壁高18cm (面積) 現存7.5m² (方位) N-32°-E (覆土) As-CやHr-FPが混じった層で構成される。(床面) H-84-W-8に切られており、東隅付近のみしか検出できず。(炉址) 東隅付近で長径45×短径20cmの規模の地床炉。(遺物) 総数69点の遺物が出土。図化できるものはなかった。(備考) 古墳時代前期の所産と考えられるが、遺構・遺物について情報がすくないため詳細は不明。

2 穴状遺構

J T-1号穴状遺構 (Fig. 38・71, P L. 14・32)

(位置) A区、チ・ツ-16G (重複) H-35に切られる。(形状) 不整円形。(規模) 長軸2.78×短軸2.72m。確認面からの壁高142cm (方位) N-45°-E (覆土) 大きく2層に分けられ、ローム土層が主体を占める。(底面) ほぼ水平である。(遺物) 繩文土器5片・石器1点が出土。これらは、中期・加曾利E4式土器、後期・称名寺1式土器である。(備考) 出土遺物から、遺構の所産時期は後期称名寺期と考えられる。

T-1号穴状遺構 (Fig. 40・68, P L. 13・31)

(位置) E区、ノ-38G (重複) W-8に切られる。(形状) 正方形ないし長方形を呈すると考えられる。(規模) 南北長2.87×東西現存長2.24m。確認面からの壁高29cm (方位) N-25°-W (覆土) 大きく2層に分けられ、1a層が「C混じり黒土層」である。(底面) 中央部が径2×1.5mの範囲でくぼんでいる。床面の施工はない。(遺物) 土師器が87点出土。(備考) 出土遺物から、古墳時代前期の所産である。

T-2号穴状遺構 (Fig. 40, P L. 13)

(位置) E区、ヒ・フ-35・36G (重複) H-63に切られる。(形状) 正方形ないし長方形を呈すると考えられる。(規模) 南北現存長2.19×東西長2.46m。確認面からの壁高10cm (方位) N-59°-E (覆土) 大きく2層に分けられ、ローム混じりの土層である。(底面) ほぼ水平で、床面の施工はない。(遺物) 土師器が12点出土。(備考) 出土遺物から古墳時代前期の所産。

T-3号穴状遺構 (Fig. 40・68, P L. 13・30)

(位置) D区、ヒ-32・33G (形状) 正方形を呈する。(規模) 長軸2.35×短軸2.13m。確認面からの壁高28cm (方位) N-41°-W (覆土) 大きく2層に分けられ、1層が「C混じり黒土層」で

ある。(底面) ほぼ水平である。床面の施工はない。(施設) 東隅に不整形のピットが存在。長軸68×短軸60×深さ20cmの規模を有する。(遺物) 土師器46点と鉄器1点が出土。このうち鉄器を図示した。(備考) 出土遺物から、遺構の所産時期は古墳時代前期である。

3 遺物集中区

Z-1号遺物集中区 (Fig. 39・66・68, P L. 14)

(位置) C区、ス・セ-24・25G (形状) 施設は認められないため不明。(規模) 遺物分布範囲は南北軸3.0×東西軸2.0m。(覆土) 1層から遺物の多くが出土した。1層は「C混じり黒土層」である。(遺物) 土師器144点が出土。このうち2個体の土器を図示。(備考) 出土遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。旧名称、H-41号住居址。

4 井 戸

I-1号井戸 (Fig. 39, P L. 14)

(位置) C区、カ・キ-24・25G (重複) H-39を切る。(形状) 長径1.66×短径1.50×深さ2.09mで円形。(覆土) 大きく3層に分けられ、1層・As-Bを80%以上含む粗砂層である。(遺物) 土器総数47点と礫が多数出土した。図示できなかったが、土師器碗・杯、須恵器破片である。(備考) 出土遺物から、本遺構の所産時期は、V期に位置付けられる。

5 土 坑

D-1号土坑 (Fig. 40・66, P L. 14)

(位置) C区、キ・ク-21・22G (形状) 長径2.35×短径2.33×深さ0.37mで円形を呈する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層が「C混じり黒土層」である。(遺物) 総数569点の遺物が出土。土師器の多くは、未焼成もしくは焼成しと思われる状態で検出された。出土状態は西半分にまとまって分布がみられ、帯び重なった堆積状態で出土。このうち1個体を図示。(備考) 出土遺物から本遺構の所産時期は古墳時代前期である。

D-2号土坑 (Fig. 40・67, P L. 14・30)

(位置) A区、テ・ト-17G (形状) 長径0.83×短径0.74×深さ0.16mで円形を呈する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層が「C混じり黒土層」である。(遺物) 総数15点の遺物が出土。このうち2個体を図示。(備考) 出土遺物から本遺構の所産時期は古墳時代前期である。

D-3号土坑 (Fig. 40, P L. 14)

(位置) C区、セ-20G (形状) 長径1.27×短径1.08×深さ0.18mでほぼ円に近い形を呈する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層が「C混じり黒土層」である。(備考) 覆土から本遺構の所産時期は古墳時代前期と考えられる。

D-4号土坑 (Fig. 40・66, P L. 14)

(位置) C区、ケ-23G (形状) 長径1.43×短径1.36×深さ0.20mで円形を呈する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層が「C混じり黒土層」である。(遺物) 総数76点の遺物が出土したが、ほとんど同一個体に帰属する。この個体を図示。(備考) 出土遺物から本遺構の所産時期は古墳時代前期である。

D-5号土坑 (Fig. 41, P L. 15)

(位置) C区、エ-22G (重複) W-2に切られる。(形状) 長径2.14×短径1.72×深さ1.27mで梢円形を呈する。(覆土) 大きく5層に分けられ、1層が「C混じり黒土層」である。(備考) 繩文時代のいわゆる「陥し穴」に形態から類似するが、覆土から本遺構の所産時期は古墳時代前期と推定される。

D-6号土坑 (Fig. 41, P L. 15)

(位置) C区、オ-28G (形状) 長径現存1.15×短径1.13×深さ0.13mで、北側が調査区域外で未確認のため梢円形を呈すると考えられる。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層が「C混じり黒土層」である。(備考) 覆土から本遺構の所産時期は古墳時代前期と考えられる。

D-7号土坑 (Fig. 41)

(位置) E区、ミ・ム-39G (重複) W-4を切る。(形状) 長径1.51×短径1.50×深さ0.40mで梢円を切った形を呈する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層がAs-B混じりの粗砂層である。(遺物) 総数2点の遺物が出土。(備考) 出土遺物と覆土から本遺構の所産時期は中世以降と考えられる。

D-8号土坑 確認調査のみ実施。E区、ク-32・33Gに存在。

D-9号土坑 確認調査のみ実施。E区、コ-39Gに存在。

D-10号土坑 (Fig. 41, P L. 15)

(位置) E区、モ-39G (形状) 長径1.88×短径1.72×深さ0.30mで梢円を切った形を呈する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層がAs-B混じりの土層である。(遺物) 総数12点の遺物が出土しているが混入品。(備考) 覆土から本遺構の所産時期は中世以降と考えられる。

D-11号土坑 (Fig. 41・72, P L. 15)

(位置) E区、ム・メ-38G (形状) 長径1.96×短径1.76×深さ0.45mでほぼ円に近い形を呈する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層がAs-B混じりの土層である。

(遺物) 総数21点出土しているが混入品。常滑焼はW-4の混入品。(備考) 覆土から中世以降の所産と考えられる。

D-12号土坑 (Fig. 41, P L. 15)

(位置) D区、ホ・マ-31G (形状) 長径1.17×短径1.12×深さ0.20mで円形を呈する。(覆土) As-B30%程度含む。(遺物) 1点出土しているが混入品。(備考) 覆土から中世以降の所産。

D-13号土坑 (Fig. 41、P L. 15)

(位置) D区、マ-31G (形状) 長径0.93×短径0.89×深さ0.18mで円形を呈する。(覆土) As-Bを30%程度含む。(遺物) 3点出土しているが混入品。(備考) 覆土から中世以降の所産。

D-14号土坑 (Fig. 41、P L. 15)

(位置) D区、ミ-31・32G (形状) 長径0.86×短径0.80×深さ0.09m (床面) 中心部に長径29×短径22×深さ24cmのピット状の落ち込みあり。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層にAs-Bを30%程度含む。(遺物) 1点出土しているが混入品。(備考) 覆土から中世以降の所産。

D-15号土坑 (Fig. 41、P L. 15)

(位置) D区、ミ-32G (形状) 長径1.04×短径0.92×深さ0.15mでほぼ円に近い形を呈する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層がAs-Bを30%程度含む土層である。(備考) 覆土から中世以降の所産と考えられる。

D-16号土坑 (Fig. 41、P L. 16)

(位置) D区、モ-34G (形状) 長径0.97×短径0.92×覆土0.20mで円形を呈する。(覆土) As-Bを30%程度含む。(遺物) 2点出土しているが混入品。(備考) 覆土から中世以降の所産。

D-17号土坑 (Fig. 41、P L. 16)

(位置) E区、モ-34・35G (形状) 長径1.16×短径1.06×深さ0.33mで円形を呈する。(覆土) As-B70%を含む粗砂層である。(備考) 覆土から中世以降の所産。

D-18号土坑 確認調査のみ実施。E区、ソ・タ-35・36Gに存在。

6 溝

W-1号溝 (Fig. 6・44、P L. 16)

(位置) A・B区、オ-セ-9~18G (形状) 平成元年度調査のW-1号溝の続きで、A区北東隅からB区の北西方向に位置し、断面は、梢円を半分に切った形をしている。幅80~90cm、深さ15cm程度で、長さ52mを発掘調査する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層が「C混じりの黒土層」である。(遺物) 数点の土師器が出土。(備考) 出土遺物と覆土から平安時代以降の所産と考えられる。

W-2号溝 (Fig. 6・44、P L. 16)

(位置) C区、エ-セ-18~22G (形状) C区南西隅からD-5まで北東方向に位置し、断面は、すり鉢状の形を呈する。幅80~90cm、深さ25~35cm程度で、長さ42mを発掘調査する。(覆土) 大きく2層に分けられ、1層が「C混じりの黒土層」である。(遺物) 土師器3点が出土したが他の時期の混入品。(重複) D-5を切る。(備考) 出土遺物から平安時代以降の所産。

W-3号溝 (Fig. 6・44、P L. 17)

(位置) C区、コ-セ-20~28G (形状) C区南東隅からW-2付近までに位置し、断面は、緩やかなU字形を呈する。幅80cm、深さ10cm程度で、長さ34mを発掘調査する。(覆土) 大きく2層

に分けられ、1層が「C混じりの黒土層」である。(遺物)1点出土したが他の時期の混入品。(重複)X-3を切る。(備考)X-3を切ることから818年以後であり平安時代以降の所産。

W-4号溝 (Fig. 7・44・67, P.L. 17)

(位置)D・E区、フ～モ-29～40G (形状)昭和63年度調査のW-15号溝の続きで、D区南西隅からE区H-62北側までに位置し、断面は、すり鉢状の形を呈す。幅90cm、深さ30～50cm程度で、長さ74mを発掘調査する。(覆土)3層に大別でき、1層はAs-B混じりである。(遺物)大ボリ1袋の遺物が出土したが、常滑窯8片以外は他の時代の混入品。(重複)W-10と合流し、H-46・44・59・61・62、W-8を切り、D-11・7、W-9に切られる。(備考)出土遺物から14世紀代の溝と考えられる。

W-5号溝 確認調査のみ実施。E区、チ～ト-39・40Gに存在。

W-6号溝 確認調査のみ実施。E区、キ～コ-36～40Gに存在。

W-7号溝 確認調査のみ実施。E区、キ～ス-32～34Gに存在。

W-8号溝 (Fig. 7・44・67, P.L. 17)

(位置)C・E区、カ～ホ-29～40G。ネライン以北、30ライン以東は確認調査のみ。(形状)H-62号住居址からC区北東隅まで北西方に位置し、断面は、すり鉢状で底に平坦なくぼみがある。幅110～120cm、深さ80～110cm程度で、長さ31mを発掘調査する。(覆土)大きく2層に分けられ、1層が「C混じりの黒土層」である。(遺物)殆どは住居から流入したものであるが、僅かに古墳時代後期の土器が認められた。(重複)H-62・91、T-1を切り、W-4・9に切られる。

(備考)出土遺物からV期の所産と考えられる。

W-9号溝 (Fig. 7・44・67・68・72, P.L. 16・31)

(位置)E区、フ～モ-38～40G (形状)E区南東隅からH-62号住居址の北側までに位置し、断面は、底部がU字形を呈し、壁はV字状に広がる。幅210cm、深さ80cm程度で、長さ34mを発掘調査する。(覆土)3層に大別でき、1層はAs-B混じりである。(遺物)大ボリ3袋の土器が出土したが、6片の常滑焼以外は他の時代の混入品。(重複)H-61・62、W-4を切り、D-7・10・11号土坑に切られる。(備考)W-9号溝は特徴的な断面形を有する。直角方向しか調査できなかつたが、おそらく50m四方の区画になると試掘結果から想定できる。出土した常滑焼きの大窯片はW-4と共にし、堀の形態から14世紀代の所産と考えられる。市内では昭和57・58年に調査した端気遺跡群の溝と形態や堀の周辺に施設を持たない点から共通点が認められ、自立農民層の館跡と推定できる。また、館址として著名な高崎市矢島館址や寺の内館址などは、付属施設の在り方から15世紀に位置付けられており、本遺構に後続するものといえる。

W-10号溝 (Fig. 7・44, P.L. 17)

(位置)D区、モ・ヤ-28G (形状)D区南東隅に位置し、断面は、U字形を呈す。幅90cm、深さ20cm程度で、長さ1mを発掘調査する。(覆土)W-4に類似。(重複)W-4号溝に接続する。(備考)W-4と接続をみせることから14世紀代の所産と考えられる。

7 地 割 れ

X-1号地割れ (Fig. 42・43、P L.17)

(位置) D・E区 (形状) 昭和63年度調査のX-1の続きで、D区の西側からE区の東側までほぼ等高線の方向に沿うように位置し、D区西部に深掘りトレンチ1(ノヘヘ-27~29G、幅60~70cm)とE区東部に深掘りトレンチ2(ハヘフ-39・40G、幅60~70cm)を入れた。その結果、幅5~8m、深さ1~1.5m、長さ60mの規模で、断面がV字形の無数の地割れが検出できた。V・VII層から亀裂がはじまっており、軽石や火山灰が衝撃吸収層になっていることと考えられる。また、VII層が噴砂状に盛り上がっていることも観察できた。(重複) H-54・56・53・82・65・85・64・89・84・91、W-8を破壊している。(備考) 昭和63年度調査のX-1に接続することから、弘仁9(818)年の大地震によって形成された地割れと考えられる。

X-2号地割れ (Fig. 6・43、P L.18)

(位置) C区、クヘシ-27~30G (形状) C区の東側、等高線132.50mに沿うように位置し、幅1.1~1.2m、深さ1.1~1.2m、長さ13mを発掘調査する。また、E区東に2カ所、深掘りトレンチ3(ケヘシ-28~30G、幅60cm)と深掘りトレンチ4(ケ・コ-28・29G、幅150~170cm)を入れた。その結果、断面は、V字形を呈し、幅2.0m、深さ1.5m程度でVII層(AT層)まで達しているものや幅1.1m、深さ2.2mのところでVII層(暗色帶)を切り、X層まで続くものと推定される。(備考) 弘仁9(818)年の大地震に際に形成された地割れと考えられる。

X-3号地割れ (Fig. 6・43・71、P L.18)

(位置) C区、オヘサ-19~28G (形状) C区北西からH-43までほぼ等高線132.50mに沿うように位置し、幅0.6~0.7m、深さ0.8m、長さ46mを発掘調査する。また、深掘りトレンチ3(ケヘシ-28~30G、幅60cm)から、断面は不整のU字形を呈し、深さ1.5mでVII層(暗色帶)まで達していることがわかった。(重複) H-43とW-2を切る。(備考) 弘仁9(818)年の大地震に際に形成された地割れと考えられる。

X-4号地割れ (Fig. 6・43、P L.18)

(位置) B・C区、オヘカ-16~19G (形状) B・C区の北側境付近、等高線133.00mに沿うように位置し、長さ14mを発掘調査する。また、B区北東に深掘りトレンチ5(ウヘカ-17・18G、幅110~150cm)を入れた。その結果、断面はU字形を呈し、幅2.5m、深さ3.2mでX層(Hr-HP)まで達しており、0.2mの段差を有していることがわかった。(備考) 弘仁9(818)年の大地震に際に形成された地割れと考えられる。

X-5号地割れ (Fig. 6・43、P L.18)

(位置) C区、サ・シ-29~30G (形状) C区東側、X-3号地割れの延長上に位置し、幅1.0m、深さ0.9~1.0m、長さ5mを発掘調査する。また、深掘りトレンチ3(ケヘシ-28~30G、幅60cm)から、断面はV字形を呈し、深さ1.3mでVI層まで達していることがわかった。(備考) 弘仁9(818)

年の大地震に際に形成された地割れと考えられる。

以上、地割れは南にX-1、北にX-2～5の2つのまとまりで検出された。平面的には、X-1は住居址の床面を破壊する状態で4～5条、X-2～5は幅をもった地割れとして検出された。しかし、平面確認では不十分であったため、深掘りトレンチを遺構を避けて5条設定し断面観察を行った。その結果、それぞれ無数の地割れが存在していることが判明した。また、地割れはHr-HP、暗色帯、As-BP等を衝撃吸収層としてその上部に発達していることも観察できた。さらに地割れが形成される場所は、地形の傾斜変換点の等高線に沿っており、地盤や周囲の地質・地形によって形成される規模が左右されるものと考えられた。深掘りトレンチ1では、地割れの下部に、液状化現象に伴う噴砂状の持ち上がりも観察できた。

8 グリッド出土の遺物

古墳時代の遺構について現地保存が決定されたため、縄文時代以前の遺構・遺物については、積極的な調査を実施しなかった。そのため全貌は明らかではないが、H-35号住居址と重複してJT-1号竪穴状遺構を検出できた。このほかに、各調査区から早期末葉の条文系土器群、前期後半の竹管文系土器群、中期初頭の五領ヶ台式・中期後半の加曾利E式土器、後期初頭の称名寺式土器、後期後半の加曾利B式土器など各時期の土器や石器が出土した。

さらに、本年度の西大室町横儀遺跡群の発掘調査で流れ山の頂上部からAT前後の旧石器時代石器群が検出されたことから、本遺跡でも旧石器時代文化層の存在が考えられよう。

また、ヘ-39Gから瓦塔1片が出土した。昭和57年度実施の西大室遺跡群IVには多数の瓦塔が報告されていることから、それらとの関連も考えられる。

VI 成果と問題点

1 古墳時代の土器について

土器破片を赤井戸式・樽式系・赤色塗彩・S字状口縁台付甕とそのほかの5種類に分けた割合をFig. 9に示した。このグラフは、各住居址毎に採り上げた土器片数に対して識別が容易な有文部（縄文・櫛描文）や特徴ある破片（S字状口縁台付甕・赤色塗彩）を摘出して比率を求めたため、土器の個体数とは幾分異なっている。また、住居址出土遺物が、その住居の時期を反映しているものとし、仮に他の住居から廃棄行為があったとしても近時間的な行為とした上での操作であることを断っておきたい。

グラフから縄文と櫛描文を構成要素とするまとまりをIグループ、縄文と櫛描文を保有しながらS字状口縁台付甕を含むまとまりをIIグループ、S字状口縁台付甕に縄文と櫛描文が払拭されるまとまりをIIIグループとして、3グループに分けることができた。これらは前者から後者にい

くに従い時間的な推移を表出しているものとして把握できる。これらの外に和泉型高杯や壺を有するH-63・65・66・83号住居址をIVグループとし、壺を備えたH-43号住居址をVグループとした。As-Cの入り方や土器型式の観点からみて、それぞれI期～V期と時間的な変遷として置き換えることが可能と考えた。この時期区分を基本にして作成した土器集成変遷図がFig. 10である。

I期は、壺や甕の大形器種が赤井戸式や樽式系によって構成される。樽式系の器種は壺・甕・台付甕・高杯で構成され、赤井戸式は壺・甕・瓶で構成される。両者とも類似器形に、施文具を替えて文様を付けることが頻繁になされている。この時期に対応する小形土器は、東海系の高杯や器台で補填される。また、東関東系と考えられる付加縄を施文した甕の出土もみられた。台付甕は在来の赤井戸式や樽式系が主体を占めるが、H-50号住居址では口縁部での確認はできないがS字状口縁台付甕と考えられる胴部片が出土しているため、S字状口縁台付甕が器種構成に加わりつつある状況といえる。

II期になると壺や甕は樽式系や赤井戸式のものが減少し、磨きや刷毛で調整された折り返し口縁や單口縁の壺・甕が台頭してくる。さらに、S字状口縁台付甕や單口縁台付甕の使用が一般化される。小形器種はI期の継続性が認められるが、器台の器受部に無孔のものが消滅し、器受部外面に稜線が認められるようになる。また、南関東系の赤色塗彩の壺の共伴がみられた。

さらに、H-56号住居址は破片数が少ないため、不詳な部分を残すが、樽式系や赤井戸式の破片が認められなかつたことや古段階のS字状口縁台付甕や欠山式の脚部に類似した器台をもつことから本時期に組み入れた。

III期の特徴は、在来系である樽式系は消滅し、僅かに赤井戸式の甕が認められる。その甕も施文施文はまばらになり、輪積み痕は偏平化してくる。それに替わって有段口縁の壺やS字状口縁台付甕・單口縁台付甕が隆盛する時期である。小形器種はI期からの系譜でとらえられるが、器台の器受部には明白な外稜が認められる。また、H-49号住居址では特殊器台が3個体出土している。

また、高崎市将軍塚古墳出土に類似した壺がH-49号住居址から出土している。この壺の出自は伊勢湾周辺が考えられている。

以上、3期に分けられたが、時間的な関係をみたい。I期はAs-Cとの関係がみられる時期である。As-Cの堆積に関しては2次堆積の問題が提出されているため慎重を要するが、H-44・57号住居址では粒径の均質なAs-C純層が堆積していた。しかし、H-45・46・47・50・59・61・82・84号住居址のAs-Cは、その堆積も一様ではなく、土層に混じった状態であるため2次堆積と考えられる。すなわち、2軒の住居以外はAs-C降下以後に廃絶され、2次的なAs-Cが流入した結果といえる。しかし、本地域においてAs-Cの降下がすぐさま土器型式や社会構造に大きな変化をもたらせたかというと、2種類のAs-Cが入る住居のあり方から、降下前後において土器組成に大きな

影響がないことと考えられる。

また、H-44号住居址にみるように、As-C降下以前に東海系といわれる器台や高杯の採用は認められる。

I期はAs-C降下前後の時間軸が与えられ、II期はAs-C降下以後でI期に近接した時間である。III期は、S字状口縁台付壺が刷毛目調整されるものから消滅する段階までの時間幅が認められる。

続くIV期はS字状口縁台付壺が消滅し、やや肩部の張る壺や高杯・壺で器種構成される。年代的には、5世紀初頭に位置付けられるよう。V期は壺・杯と須恵器杯蓋等の器種構成が認められる。須恵器杯蓋がMT-15に比定できるため6世紀前半に位置付けられ、前二子古墳との近接した時期といえる。

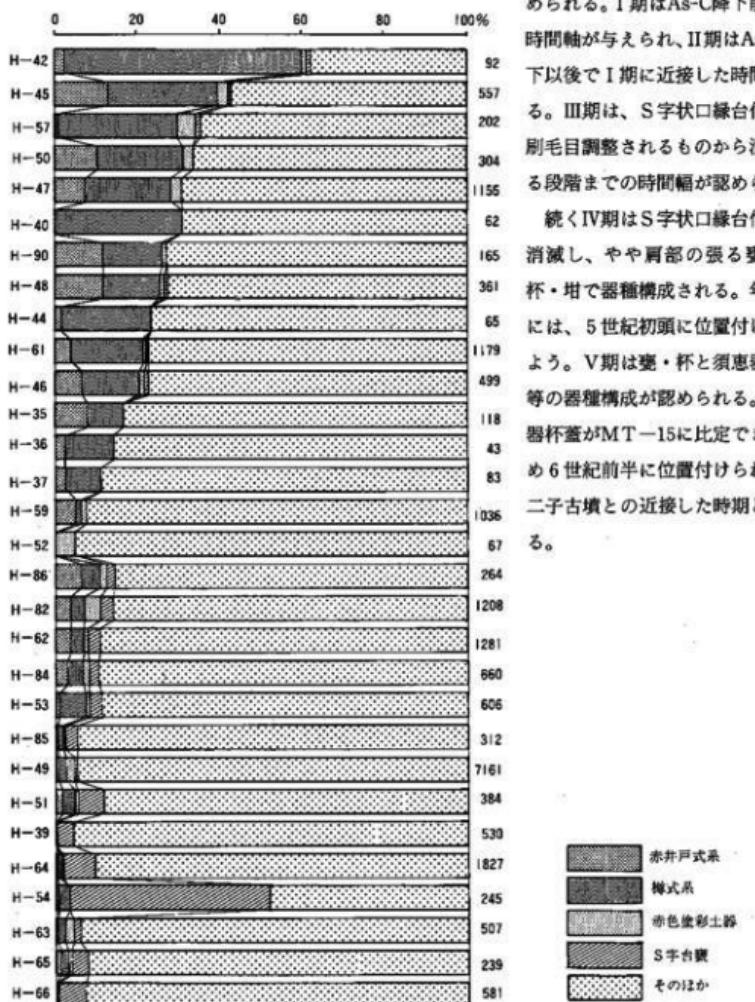


Fig.9 土器片種類の割合

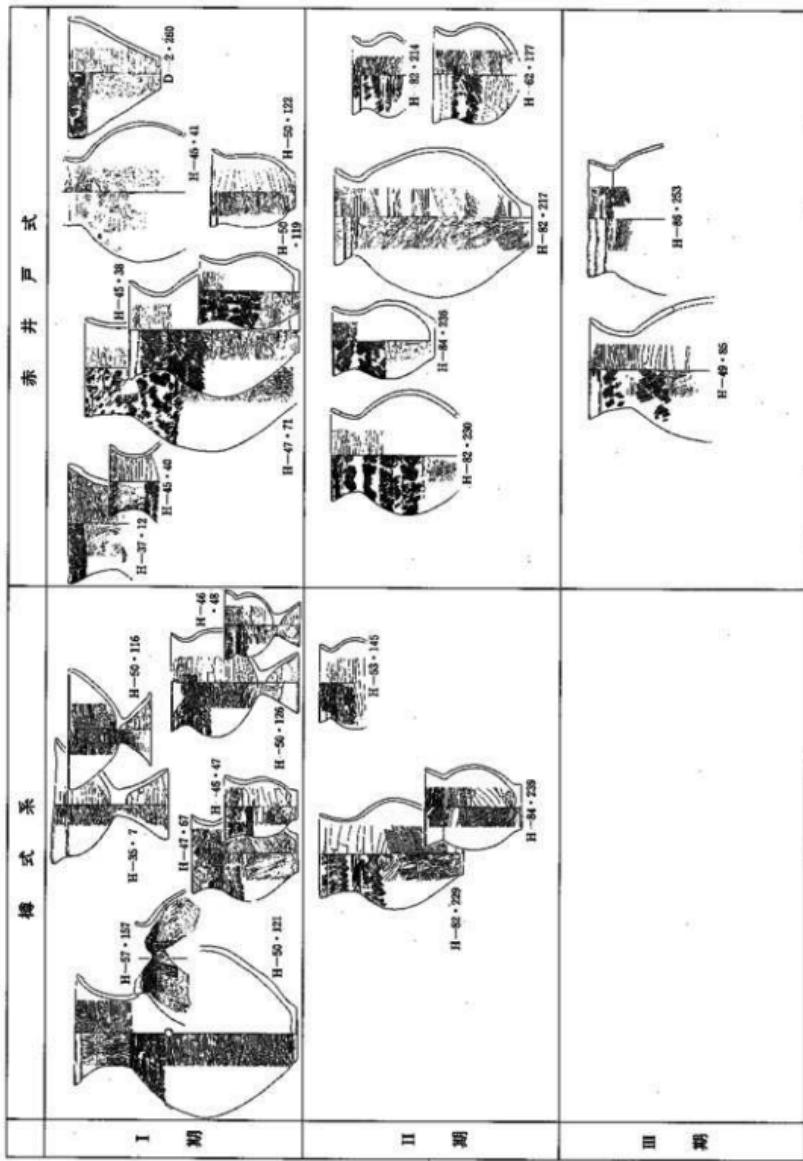


Fig. 10 土器集成変遷図

		外 来 系											
		セ の ほ か (土 蒔 器)											
I	M	H-30・118			H-30・9			H-47・66			H-35・6		
		H-35・5	H-39・59	H-49・100	H-47・59	H-47・58	H-47・55	H-47・54	H-47・53	H-47・52	H-47・51	H-47・50	H-47・45
II	期	H-35・115	H-35・118	H-35・118	H-35・113	H-35・112	H-35・111	H-35・110	H-35・109	H-35・108	H-35・107	H-35・106	H-35・105
		H-63・180	H-62・211	H-62・211	H-62・219	H-62・219	H-62・218	H-62・218	H-62・217	H-62・217	H-62・216	H-62・215	H-62・214
		H-63・180	H-63・185	H-63・185	H-63・184	H-63・184	H-63・183	H-63・182	H-63・181	H-63・180	H-63・179	H-63・178	H-63・177
		H-63・175	H-63・174	H-63・174	H-62・174	H-62・174	H-62・173	H-62・173	H-62・172	H-62・172	H-62・171	H-62・170	H-62・169
		H-63・173	H-63・172	H-63・172	H-63・171	H-63・171	H-63・170	H-63・170	H-63・169	H-63・168	H-63・167	H-63・166	H-63・165
		H-63・165	H-63・164	H-63・164	H-63・163	H-63・163	H-63・162	H-63・162	H-63・161	H-63・160	H-63・159	H-63・158	H-63・157
		H-63・156	H-63・155	H-63・155	H-63・154	H-63・154	H-63・153	H-63・153	H-63・152	H-63・151	H-63・150	H-63・149	H-63・148
		H-63・147	H-63・146	H-63・146	H-63・145	H-63・145	H-63・144	H-63・144	H-63・143	H-63・142	H-63・141	H-63・140	H-63・139
		H-63・138	H-63・137	H-63・137	H-63・136	H-63・136	H-63・135	H-63・135	H-63・134	H-63・133	H-63・132	H-63・131	H-63・130
		H-63・129	H-63・128	H-63・128	H-63・127	H-63・127	H-63・126	H-63・126	H-63・125	H-63・124	H-63・123	H-63・122	H-63・121
		H-63・120	H-63・119	H-63・119	H-63・118	H-63・118	H-63・117	H-63・117	H-63・116	H-63・115	H-63・114	H-63・113	H-63・112
III	期	H-64・187	H-64・186	H-64・186	H-64・185	H-64・185	H-64・184	H-64・184	H-64・183	H-64・182	H-64・181	H-64・180	H-64・179
		H-64・180	H-64・179	H-64・179	H-64・178	H-64・178	H-64・177	H-64・177	H-64・176	H-64・175	H-64・174	H-64・173	H-64・172
		H-64・171	H-64・170	H-64・170	H-64・169	H-64・169	H-64・168	H-64・168	H-64・167	H-64・166	H-64・165	H-64・164	H-64・163
		H-64・162	H-64・161	H-64・161	H-64・160	H-64・160	H-64・159	H-64・159	H-64・158	H-64・157	H-64・156	H-64・155	H-64・154
		H-64・153	H-64・152	H-64・152	H-64・151	H-64・151	H-64・150	H-64・150	H-64・149	H-64・148	H-64・147	H-64・146	H-64・145
		H-64・144	H-64・143	H-64・143	H-64・142	H-64・142	H-64・141	H-64・141	H-64・140	H-64・139	H-64・138	H-64・137	H-64・136

Tab. 1 住居址時期別一覧表

名称	簡略平面形	柱穴	規 模				主軸	炉		附 屬 施 設			備 考
			南北	東西	深さ	面積		數	材 料	馬蹄形・貯藏穴	その他の		
H-42	I 正	-	3.5	3.4	0.5	11.1	46E	1					円盤
H-45	I 正	-	5.9	5.3	0.3	28.9	37E	2					勾玉・円盤・紡錘車・As-C
H-57	I 正	-	6.0	5.7	0.3	36.7	56E	3					手捏・As-C純層
H-50	I 正	-	3.8	3.4	0.6	11.7	82W	1					鉄器・As-C・焼失・+H-49
H-47	I 異	2斜	4.9	3.8	0.7	17.4	31E	3	炉縛石	南東			鐵器・As-C
H-40	I 異	-	5.1	3.1	0.2	13.8	34E	1					
H-90	I 異	-	5.8	4.5	0.3	18.6	75E	3		南東			
H-48	I 正	-	3.4	3.4	0.1	10.3	2W	1					手捏
H-44	I 正	-	4.3	3.9	0.3	15.2	23W	2					As-C純層
H-61	I 正	-	6.8	[5.9]	0.4	[40.9]	16W	5		南			鉄器・紡錘車・磁石・As-C・+H-62
H-46	I 正	4	4.5	4.3	0.8	17.6	48E	2	炉縛石	南東	横		管玉・勾玉・磁石・As-C
H-35	I 正	4	5.3	4.6	0.8	20.8	35E	1	炉縛石	東	類似	ベッド	紡錘車・磁石・+H-36
H-36	I 正	2直	4.9	4.0	0.6	18.0	38E	1	炉縛石・土器片				+H-35
H-37	I 正	4	5.4	4.6	0.8	22.8	29E	1	土器片	東	横		
H-59	I 異	4	6.8	5.2	0.9	32.1	50E	3	土器片	南	横	ベッド	鐵器・手捏2・紡錘車・As-C
H-52	I 正	-	4.2	3.8	0.1	14.9	71E	3					
H-38	I 正	2斜	3.8	3.1	0.7	9.9	81W	2	炉縛石	南東	横		As-C
H-56	II 正	-	5.2	[4.9]	0.1	[24.5]	56E	1					
H-86	II 正	4	7.7	6.6	0.7	[49.5]	74E	-					
H-82	II 正	2斜	5.0	4.3	0.8	20.4	61E	1	炉縛石				鉄器・手捏・勾玉・磁石・As-C・地割れ・+H-49
H-62	II 正	4	[6.7]	5.8	0.3	[37.7]	75E	5		南			紡錘車・焼失・+H-61
H-84	II 正	4	6.3	5.8	0.8	33.7	61E	2	炉縛石				土玉・磁石2・As-C・地割れ
H-53	II 正	4	6.0	5.3	0.7	28.9	66E	1					鉄器・手捏3
H-85	III 正	4	7.1	6.3	0.4	[42.0]	67E	-		柱穴粘土			手捏
H-49	III 正	4	9.5	8.3	1.2	69.6	34W	2		柱穴粘土	南東		鉄器3・手捏3・算盤玉・土器・円盤・凹石・磨石
										阶段状施設			
H-51	III 正	4	6.3	6.1	0.2	36.7	68W	3					焼失・+H-39・50・82
H-39	III 正	4	8.1	7.8	0.4	58.3	57E	1	炉体土器	類東			焼失か・+H-49
H-64	III 正	4	7.2	6.5	0.7	43.1	68W	1	炉体土器	柱穴粘土			地割れ
H-54	III 正	-	4.3	3.6	0.3	14.1	30W	1					
H-63	IV 正	4	5.4	5.4	0.4	27.9	42E	1	炉縛石		柱穴粘土		磁石・+H-83・類似
H-65	IV 異	-	4.0	3.2	0.3	12.3	74E	2					磁石(ミニ)
H-66	IV 正	4	5.6	5.5	0.7	28.2	64E	1			柱穴粘土		鉄器・磁石・焼失
H-63	IV 正	-	3.0	2.8	0.3	[8.2]	16W	1					磁石2・+H-63
H-43	V 正	-	3.8	3.7	0.6	13.1	25W	電					地割れ
H-58	- 正	-	2.9	2.6	0.1	6.8	83E	1					
H-89	- 異	-	[4.0]	[3.1]	0.5	[12.4]	77E	-					
H-91	-	-	(2.5)	(1.8)	0.2	(7.5)	32E	1					

註1. 正は正方形、長は長方形の略である。

2. 規模の()は現存値、[]は推定値を表す。

3. 主軸のEおよびWは北からの角度である。

4. 馬蹄形・貯藏穴の類は近似するものを示す。

5. 備考の+は接合関係を示す。また、「As-C」と表記したものは、純層で無く、よごれたAs-Cの層である。

2 古墳時代の住居址について

次に、各時期別に一表にしたものを作成した。昭和63・平成元年の調査住居を含めて住居址規模相関図と分類図をFig. 11・12に示した。重複によって形状が不明なものは削除してある。62軒の住居を規模相関図でみると、最小が2.5m四方で最大が9m四方である。相関図のまつりから小形・4m以下、中形・4m~6m、大形・6m~8m、特大形・8m以上と大きく4つに分類できよう。平面形については短軸：長軸の比が4:5を超えるものを長方形とし、それ以下を正方形として扱った。正方形が50軒と圧倒的に多く、長方形のものは12軒と少ない。さらに、正方形の住居を細かくみると無柱穴正方形が25軒、次いで4本柱正方形20軒と2種類が大多数を占め、2本斜柱穴正方形が2軒、2本直柱穴正方形が1軒、4本柱+壁柱穴正方形が2軒存在している。

一方、長方形は無柱穴長方形が9軒、4本柱長方形が2軒、2本斜柱穴長方形が1軒に分けられる。形態的には、各時期にわたって正方形が主流をしめるものの、I期に長方形の住居形態が多いことが指摘できる。II期からは正方形を基調とする住居形態が主体を占める。面積ではI期の最大が36.7m²で最小が10.3m²であり、平均が20m²である。II期では、平均が30.8m²でIII期は41.4m²である。ちなみにIV期の平均は19.0m²である。I期の住居面積はまとまりがみられ、II期はややこぶりになり、III期には面積差が大きくなる傾向を示している。炉址は、I期に複数もつ住居址が単数のものより多く、最大5基を有し、平均2基である。II期は単数炉が一般化するが、H-62号住居址には5基認められることは古い要素であろうか。III期は、H-49号住居址に2基・

H-51号住居址に3基つくものの、基本的には1基である。

炉の構築材としてI期には炉縁石や土器片が用いられ、II期には炉縁石、III期には炉体土器が用いられる。また、2本柱穴はI・II期に用いられ、横穴形貯蔵穴やベッド状遺構もI期に限定される。さらに、出土遺物でみると鐵鏃や土製紡錘車は、I期に限定されて出土していることが指摘できる。

また、柱穴の底部の粘土貼りはIII・IV期に限って施工された技法といえ他の時期には認められない。

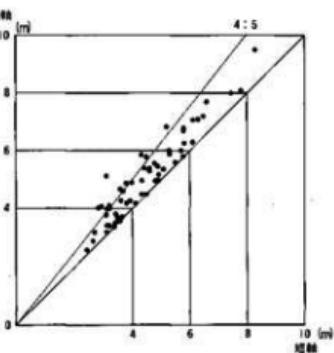


Fig.11 住居址規模相関図

3 階段状施設を持つ大形住居について

H-49号住居址は本集落最大規模の住居址であるとともに、北壁に地山のローム層を掘りこん

Fig.12 住居分類図

だ形で3段の階段状施設が付設されていた。用途面から昇降用階段、棚などが考えられるが、南壁中央に出入り口ピットがあるため一番奥まった場所であることや、北側は季節風を直接受ける点から昇降用階段は考えにくい。また、実用的な棚と考えればもう少し大きなものが必要とされる。住居内の遺物出土状態からみても、板などを置いた痕跡もないことから決定要素に欠けている。住居規模や付属施設、さらに匙形土製品、算盤玉形土製品・手捏土器などの特殊遺物の存在から実用的な用途は考えにくい。また、匙形土製品は共通したものが、北の低地を挟んだ対岸の柏川村西原遺跡2号住居址から出土している。管見する限りでは他に類例が無いため、何らかの形で西原遺跡と交流があったものと考えられる。

遺跡の中で住居構造からみて、昭和63年度調査のH-15号住居址と規模や形態の面で極似している。H-15号住居址と有機的な関連が考えられ、建て替えを想定すると、前の住居においてこの施設は認めなかったものであり、本住居址構築にあたって新たに設置されたものと理解される。

また、赤堀町多田山東遺跡41号住居址の東壁に同様な造作がみられるが、多田山遺跡例は東壁であり掘り込みの幅も狭いため、入り口施設としての用途が考えられよう。現段階では類例が乏しいため、今後の資料増加に待つ点が大きいが、現時点では祭祀的な要素が高いものとして理解しておきたい。

4 古墳時代前期の集落

古墳時代初頭前後の住居址は、昨年度までの調査で32軒が調査されている。今年度は32軒を調査できたので、合計64軒となる。この時期の集落は、市内において調査事例が極めて少ないため、集落変遷や土器組成の変容、地域性を解明する上で貴重な資料となった。また、住居址覆土にAs-C（浅間山C軽石：4世紀中葉降下）を堆積するものが多数検出されたため、年代決定の上でも指標になり得るものといえる。今回調査した集落は、内堀遺跡群下綱引II遺跡に所属し、集落は更に東に拡大をみせるため100軒前後の住居址が推定できる。

周辺遺跡では、本遺跡に隣接して北の沖積状低地に、下綱引I遺跡や五反田遺跡（柏川村）はじめ多くの集落遺跡が展開している。特に下綱引I遺跡は、今年度調査のH-39号住居址と連続する可能性が生じた。従来、生産基盤として想定されていた場所に数多くの集落が立地していることが判明しつつあるため、現時点での本遺跡の生産域は、現五料沼のある沖積地一帯を想定しておきたい。

さらに、円形周溝墓12基が調査されている上綱引遺跡とは、As-C降下前後の同時代であることや至近な距離であるため、有機的な関連を持つことと考えられ、本遺跡の居住者が埋葬された蓋然性が極めて高いものといえよう。

註) 平成元年度調査分内堀遺跡群III(1990)の住居址名称変更について

H-1→H-20 H-2→H-21 H-3→H-22 H-4→H-23 H-5→H-24
H-6→H-25 H-7→H-26 H-8→H-27 H-9→H-28 H-10→H-29
H-11→H-30 H-12→H-31 H-13→H-18 H-14→H-32 H-15→H-33
H-16→H-34

参考文献

- 桑原 昭・園部守央 1988 「内堀遺跡群I―確認調査報告書一」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
園部守央・加部二生 1989 「内堀遺跡群II」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
園部守央・鈴木雅治 1990 「内堀遺跡群III」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
飯塚 誠・杉浦つや子ほか 1981 「西大室遺跡群II」 前橋市教育委員会
井野誠一・入内島裕美 1981 「富田遺跡群II」 前橋市教育委員会
前原照子・松村親樹ほか 1982 「富田遺跡群III・西大室遺跡群III」 前橋市教育委員会
江部和彦・前原照子ほか 1983 「西大室遺跡群IV」 前橋市教育委員会
松村親樹ほか 1983 「縦坑遺跡群I」 前橋市教育委員会
木暮 誠・前原 貴 1984 「端気遺跡群II」 前橋市教育委員会
前原照子・濱田博一ほか 1985 「御久保遺跡群I」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
千田幸生ほか 1986 「施木遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前原 盛・関根吉晴 1988 「御久保遺跡群VII」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
駒倉秀一・都所敬尚 1990 「横狭遺跡群I」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
小島純一 1985 「深津地区遺跡群 昭和60年度」 群馬県柏川村教育委員会
小島純一 1986 「深津地区遺跡群 昭和61年度」 群馬県柏川村教育委員会
小島純一ほか 1987 「柏川村の遺跡」 群馬県柏川村教育委員会
小島純一 1988 「堤頭遺跡」 群馬県柏川村教育委員会
小島純一 1990 「西迎遺跡」 群馬県柏川村教育委員会
松村一昭 1982 「多田山東遺跡発掘調査報告」 赤堀町教育委員会
若狭 健 1988 「保渡田遺跡群IV」 群馬県群馬町教育委員会
田口一郎 1985 「元島名将軍塚古墳」 高崎市教育委員会
女屋和志雄ほか 1989 「下佐野遺跡II地区(1)」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
高橋一夫 1990 「古墳時代の集落」「古墳文化の研究」 雄山閣

付編 内堀遺跡群下縄引遺跡のテフラと地割れ

早田 勉 (古環境研究所)

- I. はじめに
- II. テフラ層序
- III. 地割れについて
- IV. まとめ

I. はじめに

下縄引遺跡は、赤城火山南麓に広がる栗木岩屑なだれの堆積面上に位置している。ここには、テフラ層を多く挟むいわゆるローム層（火山灰土）が厚く堆積している。遺跡の発掘調査では、多くの地割れが検出された。ここでは、土層断面を観察して示標テフラの層序を記載するとともに、地割れの特徴について述べる。

II. テフラ層序

代表的な下縄引遺跡のローム層の断面を、図1および図2に示す。断面を観察した結果、合わせて6層のテフラを検出することができた。ここでは、下位より

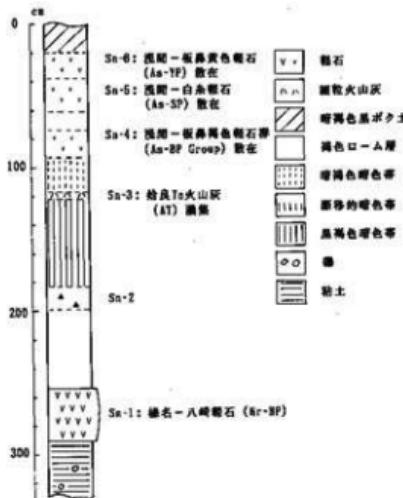


図1 下縄引遺跡第3地割れトレンチのテフラ層序

下縄引第1～6テフラ (Sn-1～6) と呼ぶことにする。

以下、各テフラの特徴を記載する。

Sn-1：亜円錐を含む粘土を整合に覆う、層厚39cmの黄色下緑石層である。含まれる軽石および石質岩片の最大径は、各々41mm、13mmである。本テフラは、その特徴から約4.0-4.4万年前に様名一八崎岩石 (Hr-HP, 新井, 1962, 鈴木, 1976, 大島, 1986) に対比される。

Sn-2：ローム層中に散在する赤褐色のスコリア粒子である。スコリアの最大径は、6mm。本テフラの起源については、いまのところ不明である。

Sn-3：暗色帶中に認められる淡色の土層である。本土層には、透明で平板状のいわゆるバブル型火山ガラスが大量に含まれている。このガラスは、その特徴から約2.1-2.2万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰 (AT, 町田・新井, 1976) に対比される。

Sn-4：暗色帶の直上に認められる、層厚4cmの橙色下緑石層である。軽石の最大径は、5mmである。このテフラは、層相から約1.6-2.1万年前に浅間火山か



図2 下縄引遺跡第1地割れトレンチのテフラ層序

ら噴出した浅間一板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 新井, 1962, 町田ほか, 1984) の一つに対比される。Sn-5: Sn-4とSn-6の間のローム層中に叢集する白色軽石である。白色軽石の最大径は、8 mmである。層位および軽石の特徴から、約1.5万年前に浅間火山から噴出した浅間一白糸軽石 (As-SP, 町田ほか, 1984) に由来したものと思われる。

Sn-6: ローム層最上部に層位ある黄色軽石層である。軽石層の層厚は、4 cmである。含まれる軽石の最大径は、8 mmである。層相から、このテフラは約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984) に対比される。

III. 地割れについて

第3地割れトレーナーでは、地割れで挟まれた比較的大規模な地溝状の落込みが認められた。落込みは、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井, 1979, 石川ほか, 1979) に富む土層を断って発達している。また地割れは黒ボク土で充填されており、As-YP降灰以後に形成されたものであることがわかる。この地割れはHr-HP以上で認められ、Hr-HPの下位に有る粘土層は変形を受けていない。すなわち地割れは、粘土層上面を滑り面としてHr-HP以上のローム層が移動したことにより形成されたものと考えられる。

第1地割れトレーナーでは、下位の土層で充填された地割れが認められた。この土層は、暗赤色土層のAT層準に相当する淡色の土層である。テフラ検出分析を行ったところ、実際に地割れを充填した土層から大量のATの火山ガラスが検出された。おそらく微妙な土層の粒径組成の違いが反映されて、地震動に伴ってAT層準の土層が噴砂状に上位に移動したのであろう。

下縄引遺跡で認められた地割れの形成年代については、第3地割れトレーナーの地割れがAs-Cを断っていることから、As-C降灰以後すなわち4世紀中葉以降と考えられる。また内堀遺跡群では、他にもAs-C降灰以後に形成された大規模な落込みが検出されており、天仁元(1108)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B, 新井, 1979) に覆われていることが明らかにされている(前橋市教育委員会, 1984)。このような地割れ

は、赤城山南麓一帯で数多く検出されており、それらは弘仁9(818)年の地震によって形成されたことが指摘されている(能登ほか, 1990)。このことから、下縄引遺跡の発掘調査で検出された地割れは、いずれも弘仁9(818)年の地震に伴って形成された可能性が大きいと考えられる。

IV.まとめ

下縄引遺跡のローム層には、6層のテフラが確認された。テフラは、下位より2番目のスコリアを除いて、Hr-HP, AT, As-BP Groupの一つ、As-SP, As-YPにそれぞれ対比される。第3地割れトレーナーで検出された地溝状の落込みは、Hr-HP以上のローム層が変形を受けて形成されたものである。また、第1地割れトレーナーで認められた噴砂状の土層の立ち上がりは、AT層準の土層が変形を受けて形成されたものと考えられる。いずれの地割れも、弘仁9(818)年の地震によって形成された可能性がある。

参考文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀層年、群馬大学紀要自然科学編、10, p.1-79.
新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル、No157, p.41-52.
石川正之助・井上雄輔・梅沢謙昭・松本浩一 (1979) 火山堆積物と遺跡I、考古学ジャーナル、No157, p.3-46.
前橋市埋蔵文化財発掘調査課 (1989) 「内堀遺跡群II」。
能登 健・内田憲治・平田 勉 (1990) 赤城山南麓の歴史地質—弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析—、信濃、42, 10, p.755-772.
大島 治 (1986) 雄名火山、日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」、p.222-224.
船木正男 (1976) Fission Track年代測定法の人類遺跡への二、三の応用例、日本第四紀学会講演要旨集、No.5, p.24.

Tab. 2 遺物観察表

番号	出土位置	器 形	大きさ 口径	①胎土 ②焼成 ③色調 ④既存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
1 H-35	鏡	14.2 (6.0)	①細粒②板良③浅黄褐④ぼか形	内外面とも荒磨き。	69		
2 H-35	器台	8.6 8.1	①細粒②板良③板④ぼか形	外面荒磨き、内面杯部荒磨き、脚部ナゲ。透孔3単位。	88外		
3 H-35	器台	8.2 9.9	①細粒②板良③板④ぼか形	外面荒磨き。内面杯部荒磨き、脚部ナゲ。透孔4単位。	72外	透孔なし	
4 H-35	盤	15.1 (7.8)	①細粒②板良③による模④縁部のみ	外面ナゲ、裏面荒磨き。内面荒磨き。	5外	+H-36 様式系	
5 H-35	蓋	— 13.8	①中粒②良好③浅黄褐④ぼか形	外面荒磨き。内面ナゲ。	71	脚部焼成前穿孔	
6 H-35	高杯	16.2 11.7	①細粒②板良③浅黄褐④ぼか形	外面杯部ナゲ、脚部荒磨き。内面荒磨き・横ナゲ。透孔1単位。	76外		
7 H-35	高杯	19.6 18.1	①細粒②板良③微④ぼか形	外面荒磨き。内面刷毛状工具によるナゲ。	73外	棒式系	
8 H-36	鏡	16.6 7.6	①中粒②良好③微④ぼか形	外面ナゲ後荒磨き。内面荒磨き。	17		
9 H-36	鏡	17.4 7.8	①中粒②良好③微④ぼか形	外面口縁部荒削り、脚部ナゲ後荒磨き。内面荒磨き。	43		
10 H-37	高杯	12.8 (5.0)	①中粒②良好③微④杯部のみ	内外面荒磨き。	62		
11 H-37	高杯	11.9 (7.4)	①細粒②板良③赤褐④片	外面荒磨き。内面杯部荒磨き、脚部ナゲ。透孔4単位。	66外	全面赤色施彩	
12 H-37	蓋	18.6 (9.5)	①中粒②良好③浅黄褐④口縁部のみ	外面口縁部・両面縦文R L、裏面荒磨き。内面荒磨き。	61	赤井戸式	
13 H-38	小壺	— (10.5)	①中粒②良好③浅黄褐④ぼか形	外面荒磨き。	1		
14 H-39	高杯	[15.2] (2.6)	①細粒②板良③微④口縁部破片	外面輪削痕を残す。	231	赤井戸式	
15 H-39	高杯	— (6.4)	①細粒②板良③にい種④脚部のみ	外面荒磨き。内面ナゲ、横模ナゲ。	162		
16 H-39	台付壺	— (6.3)	①細粒②良好③黄④台足のみ	外面底部ナゲ、台脚刷毛後ナゲ。内面ナゲ、横模ナゲ。	505		
17 H-39	器台	— (8.2)	①細粒②板良③による青帯④脚部のみ	外面荒磨き。内面接合部ナゲ、密擦毛後ナゲ。透孔3単位。	220		
18 H-39	小壺	10.6 8.2	①粗粒②良好③拭削④ぼか形	外面ナゲ、裏部荒削り。内面ナゲ。	360	S字状口縁	
19 H-39	小壺	11.7 12.1	①粗粒②良好③にい種④ぼか形	外面ナゲ、口縁部指オサエ・横ナゲ・輪模痕あり。内面ナゲ。	280		
20 H-39	蓋	17.2 (16.0)	①粗粒②良好③浅黄褐④横	外面口縁部ナゲ、茎部～両面刷毛後荒磨き。内面口縁部荒磨き、底部～両面刷毛後ナゲ。	400		
21 H-40	小鉢	7.9 7.3	①中粒②良好③微④ぼか形	外面口縁部荒磨き、底部荒削りの木彫工具箇ナゲ。内面口縁部刷毛目、脚部ナゲ。	22外		
22 H-40	盤	16.0 16.1	①粗粒②良好③微④片	外面口縁部・脚部波状文、脚部輪状文、脚部裏磨き。内面荒磨き。	25外	棒式系	
23 H-42	蓋	[14.3] (4.8)	①中粒②良好③による青帯④口縁部X	外面ナゲ。内面刷毛目・ナゲ。	26	内外面赤色施彩	
24 H-43	漆器蓋	14.4 5.4	①粗粒②板良③灰④片	外面輪縫ナゲ、圓軌削削り。内面輪縫ナゲ。	39外	漆器	
25 H-43	杯	14.0 4.1	①粗粒②板良③微④ぼか形	外面口縁部横ナゲ・底部荒削り。内面口縁部横ナゲ、底部荒磨き。	163外	鬼高式	
26 H-43	壺	[13.2] (4.8)	①粗粒②板良③明赤褐④破片	外面口縁部横ナゲ・底部荒削り。内面口縁部横ナゲ、底部ナゲ。	126	鬼高式	
27 H-43	大壺	[26.4] (9.5)	①中粒②板良③微④破片	外面荒削り。内面ナゲ。	161	鬼高式	
28 H-44	盤	— (5.5)	①中粒②板良③微④底部X	内外面とも荒磨き。	56		
29 H-44	器台	8.6 8.6	①中粒②板良③微④ぼか形	外面荒磨き。内面杯部荒磨き、脚部ナゲ。透孔3単位。	37外		
30 H-45	高杯	— (6.4)	①中粒②良好③による微④脚部のみ	外面荒磨き。内面ナゲ。透孔3単位。	105外		
31 H-45	高杯	— 6.9	①中粒②良好③による微④脚部のみ	外面荒磨き。内面ナゲ。透孔3単位。	340		
32 H-45	台付壺	[10.2] (8.5)	①粗粒②良好③による微④脚部X	外面輪縫波状文、両面波状文、脚部ナゲ。内面荒磨き。	1外	棒式系	

番号	出土位置	器 形	大きさ		作成・製作技術の特徴	登録番号	備考
			口径	底高			
33	H-45	盤	[11.1] (6.3)	①中粒②良好③によい黄褐色④破片	外西周文R L。内面口縁部～脚部ナデ、肩部黒墨。	188外	赤井戸式
34	H-45	高杯	[21.8] (6.4)	①中粒②良好③焼④脚部R	内外面とも黒墨。	21外	
35	H-45	盤	— (9.0)	①中粒②良好③によい褐色④R	内外面とも黒墨。	186外	
36	H-45	盤	— (13.8)	①粗粒②良好③によい焼④破片	外西周文R L。脚部黒墨R L、脚部黒墨。内面黒墨。	343外	赤井戸式
37	H-45	盤	[13.9] (6.1)	①中粒②良好③によい褐④口縁部R	外西周文R L。脚部黒墨状文、脚部黒墨。内面黒墨。	113外	柿式系
38	H-45	盤	13.3 26.2	①中粒②良好③明黄褐④ほぼ完形	外西周文R L。脚部刷毛後黒文R L、脚部刷毛後黒墨。内面黒墨。	26	赤井戸式
39	H-45	盤	— (9.7)	①中粒②良好③帶黃褐④破片	外西周文R L後T字文、脚部円形貼付文あり。内面ナデ。	285外	周文と帶接文
40	H-45	盤	11.2 (7.7)	①中粒②良好③によい褐④口縁部R	外西周文R L脚部刷文R L、脚部ナデ後黒墨。	229外	赤井戸式
41	H-45	盤	— (18.0)	①粗粒②良好③焼④R	外西周文R L。ナデ後無黒文R。内面黒墨。	404外	赤井戸式
42	H-46	高杯	16.5 (5.5)	①中粒②良好③焼④脚部R	内外面とも黒墨。	380外	
43	H-46	台付盤	— (6.0)	①中粒②良好③黄褐④合部のみ	外西周文R L。内面ナデ。	163	
44	H-46	高杯	— (7.5)	①中粒②良好③によい焼④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ。	232	
45	H-46	高杯	[14.3] 10.0	①中粒②良好③焼④R	外西周文R L。内面脚部黒墨。脚部ナデ。	28外	
46	H-46	盤	— (32.0)	①中粒②良好③焼④R	外西周文R L。脚部黒墨。脚部黒墨状文、脚部黒墨。内面黒墨。	93外	柿式系
47	H-46	小盤	9.8 11.2	①中粒②良好③焼黄褐④R	外西周文R L。脚部黒墨状文、脚部ナデ、脚部黒墨。内面口縁部黒墨。脚部ナデ。	257外	柿式系
48	H-46	台付盤	10.8 11.5	①粗粒②極良③赤褐④R	外西周文R L。脚部黒墨。脚部・台部黒墨。内面脚部ナデ。内面脚部黒墨。台部ナデ。	268外	柿式系
49	H-46	盤	12.9 (12.2)	①中粒②良好③によい赤褐④口縁部R	外西周文R L。内面ナデ。	436外	赤井戸式
50	H-47	高杯	13.1 8.1	①粗粒②極良③焼④R	内外面とも黒墨。	107外	
51	H-47	高杯	— (6.6)	①中粒②良好③によい黄褐④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ、黒墨。	399	
52	H-47	高杯	— (5.6)	①中粒②良好③焼④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ。	340	
53	H-47	高杯	— (6.7)	①粗粒②極良③焼④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ。	266	
54	H-47	器台	6.0 6.9	①中粒②極良③焼④ほぼ完形	外西周文R L。脚部黒墨。内面脚部黒墨。脚部ナデ。透孔3単位。	90外	
55	H-47	高杯	— (6.2)	①中粒②良好③焼④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ。透孔4単位。	310	
56	H-47	高杯	— (8.4)	①粗粒②極良③焼黄褐④R	内外面とも黒墨。	166	
57	H-47	器台	7.7 10.6	①中粒②極良③焼④完形	外西周文R L。内面脚部黒墨。脚部ナデ。透孔3単位。	500外	穿孔なし
58	H-47	高杯	— (8.3)	①中粒②良好③焼④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ。	105	
59	H-47	高杯	17.0 (5.5)	①粗粒②極良③焼④脚部のみ	内外面とも黒墨。	230	
60	H-47	高杯	— (7.5)	①中粒②良好③焼黄褐④R	外西周文R L。内面脚部黒墨。脚部ナデ。透孔3単位。	50	
61	H-47	高杯	— (9.7)	①粗粒②良好③焼黄褐④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ。透孔4単位。	650	
62	H-47	高杯	— (9.4)	①粗粒②極良③焼④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ。透孔4単位。	518	
63	H-47	高杯	— (3.3)	①中粒②良好③焼④脚部のみ	外西周文R L。内面ナデ。透孔4単位。	620	
64	H-47	小盤	6.4 8.1	①中粒②良好③によい黄褐④ほぼ完形	外西周文R L。内面ナデ。透孔4単位。	300	
65	H-47	楕	14.5 6.1	①中粒②良好③明黄褐④ほぼ完形	内外面とも黒墨。	110外	
66	H-47	楕	14.3 5.6	①粗粒②良好③焼黄褐④R	内外面とも黒墨。	187外	
67	H-47	盤	12.1 16.2	①中粒②極良③によい黄褐④完形	外西周文R L。脚部黒墨状文、脚部黒墨状文、脚部ナデ。透孔3単位。内面黒墨。	400	柿式系
68	H-47	盤	15.0 (8.2)	①中粒②良好③によい黄褐④口縁部のみ	外西周文R L。脚部黒墨状文、脚部黒墨状文。内面黒墨。	1085外	柿式系

番号	出土位置	器 形	大 小 S	①胎 土 ②焼成 ③色 調 ④残 存	器 形・製作 技 法 の 特 徴	器形番号	備 考
69	H-47	甕	13.7 (7.4)	①中粒②板良③によい地④口縁部有	外面被状文。内面荒削き、底部ナデ。	717外	織式系
70	H-47	甕	[13.8] (7.0)	①中粒②板良③地④口縁部有	外面被文R L、口縁部被状文。内面荒削き。	475	赤井戸式
71	H-47	甕	15.1 (32.4)	①粗粒②板良③浅黄褐④%	外面口縁部～肩部被文R <^>、脚部荒削き。内面 荒削き。	1100外	赤井戸式
72	H-47	大甕	— (15.1)	①粗粒②良好③地④%	内外面とも荒削き。	100外	
73	H-47	台付甕	— (6.8)	①粗粒②良好③地④台部有	内外面ナデ。	169外	
74	H-47	台付甕	— (7.8)	①粗粒②良好③明褐色谷部のみ	内外面ナデ。	469外	
75	H-47	甕	18.3 (10.2)	①粗粒②板良③によい黄色④口縁部有	外面口縁部荒削き、底部被状文。内面荒削き。	1670外	織式系
76	H-48	甕	14.1 (13.7)	①粗粒②良好③によい地④%	外面被文L R。内面荒削き。	90	赤井戸式
77	H-49	土師質甕	13.5 5.8	①粗粒②良好③地④壳形		318外	外外面赤色地影
78	H-49	甕	[7.6] 5.2	①中粒②良好③浅黄褐④%	外面刷毛目。ナデ。内面ナデ。	226外	
79	H-49	甕	[9.3] 5.2	①中粒②良好③地④%	外面ナデ。内面荒削き、脚部ナデ。	500	
80	H-49	小甕	10.6 8.1	①粗粒②良好③灰白④%	外面口縁部擦ナデ、肩部擦物感、脚部荒削り。 内面口縁部～肩部横カゲ、脚部ナデ。	328	鬼瓦式
81	H-49	甕	10.6 5.7	①中粒②良好③地④%	外面ナデ。内面口縁部擦ナデ。	65外	
82	H-49	小甕	9.6 8.2	①中粒②良好③地④壳形	外面口縁部擦ナデ、肩部ナデ、脚部擦り風ナデ。 内面ナデ、口縁部擦ナデ。	2844	
83	H-49	甕	[19.6] 10.6	①粗粒②良好③浅黄褐④%	内外面ともナデ。	3240	
84	H-49	甕	16.4 (8.8)	①中粒②良好③によい黄色④%	外面刷毛目。口縁部脂油サエ・ナデ・刷毛目。 内面擦ナデ。口縁部刷毛後荒削き。	544外	
85	H-49	甕	[15.7] (16.8)	①中粒②良好③によい黄色④%	外面口縁部、肩部被文R L、脚部荒削き。内面 口縁部荒削き、脚部ナデ。	3720外	赤井戸式
86	H-49	器台	6.8 (6.3)	①粗粒②板良③地④%	外面口縁部荒削き、脚部刷毛後荒削き。内面口縁 部荒削き、脚部刷毛目。透孔2段交互に3単位。	2508外	
87	H-49	器台	8.0 8.2	①中粒②良好③浅黄褐④%	外面荒削き。内面刷毛目。透孔3単位。	5693	
88	H-49	器台	7.9 8.4	①中粒②良好③地④%	外面荒削き。内面口縁部荒削き、脚部刷毛目。透 孔ナデ。透孔3単位。	5753	
89	H-49	器台	— (7.2)	①中粒②良好③地④脚部のみ	外面荒削き。内面荒削り。脚部荒削き。	2326外	
90	H-49	高杯	11.1 7.7	①中粒②良好③によい黄色④ほぼ壳形	外面口縁部、脚部荒削き。内面刷毛目。内面口縁 部荒削き、接合部ナデ、脚部刷毛目。	4309	
91	H-49	高杯	10.8 8.4	①中粒②板良③明赤褐④ほぼ壳形	外面荒削き。内面杯底荒削き、脚部ナデ。	6550外	赤色地影
92	H-49	高杯	7.6 (4.7)	①中粒②良好③地④杯部有	外面荒削き。脚部ナデ。内面荒削き。	3216	
93	H-49	高杯	— (6.2)	①粗粒②板良③によい黄色④脚部有	外面荒削き。内面刷毛目。透孔3単位。	401	
94	H-49	高杯	— (9.0)	①粗粒②板良③地④脚部有	外面荒削き。内面荒削り、脚部刷毛目。透孔2段 交互に3単位。	5803	
95	H-49	特殊器台	— (4.0)	①粗粒②板良③明赤褐④被片	内外面とも荒削き。透孔4単位か。	2515外	
96	H-49	特殊器台	— (4.1)	①粗粒②板良③地④被片	内外面とも荒削き。透孔4単位か。	6504	
97	H-49	特殊器台	16.4 (10.2)	①粗粒②板良③明黄褐④%	外面荒削き。内面口縁部荒削き、脚部刷毛・ナデ。 透孔杯部4単位、脚部3単位。	2697外	
98	H-49	甕	— (11.0)	①中粒②良好③灰白④%	外面被物凹線、刺突文、被状文、脚部荒削き。 内面刷毛接ナデ。	495外	+ H-30 外朱系
99	H-49	小鉢	8.0 5.1	①粗粒②板良③明赤褐④%	外面荒削き。底部ナデ。内面荒削き。	3511	
100	H-49	特殊器台	— (4.2)	①中粒②良好③地④杯部被片	外面ナデ。内面荒削き・ナデ。透孔2段で単位 か。	919外	外朱赤色地影 + H-82
101	H-49	高杯	[18.1] (7.3)	①粗粒②良好③地④杯部有	内面口とも荒削き。	550	
102	H-49	台付甕	— (6.6)	①中粒②良好③浅黄褐④脚部有	外面刷毛目。ナデ。内面刷毛目。	137外	
103	H-49	高杯	— (6.1)	①粗粒②良好③地④脚部有	外面荒削き。内面ナデ。	6234外	
104	H-49	台付甕	— (7.8)	①粗粒②良好③によい地④台部のみ	内外面とも刷毛後ナデ。	4290	
105	H-49	台付甕	— (7.8)	①中粒②良好③によい地④台部のみ	外面ナデ後刷毛目。内面底部ナデ後 刷毛目。	2171外	

番号	出土位置	器 形	大 き さ 口徑 器高	①胎 土 ②燒 成 ③色 質 ④残 留	器 形・製作 法 の 特 徴	登錄番号	備 考
106 H-49	台付壺	11.2 17.2	①粗粒②良好③焼黄褐色④%	内外面とも刷毛後ナガ。	3000外		
107 H-49	大甕	16.0 (15.0)	①中粒②良好③焼④%	外面ナダ。内面口縁部横ナダ、腹部瓦礫。	4270外		
108 H-49	甕	[13.9] (11.8)	①粗粒②良好③によい燒④口縁部破片	外面口縁部・肩部波状文、頸部波状文、腹部瓦 礫。内面横方向の瓦礫。	2856 槌式系		
109 H-49	甕	17.0 (6.0)	①中粒②極良③焼黄褐色④口縁部のみ	外面口縁部ナダ、腹部刷毛目、内面口縁部瓦 礫、頸部刷毛目、肩部ナダ。	2280		
110 H-50	大甕	24.7 19.0	①中粒②良好③焼褐④%	外面ナダ後瓦礫。内面ナダ。	79		
111 H-50	高杯	12.5 (4.9)	①中粒②極良③焼黄褐色④杯部のみ	内外面とも瓦礫。	190		
112 H-50	高杯	13.0 (5.7)	①中粒②極良③焼黄褐色④杯部のみ	内外面とも瓦礫。透孔4単位。	200		
113 H-50	高杯	12.4 9.4	①中粒②良好③焼④様は完形	外面ナダ。内面杯部ナダ・瓦礫。腹部ナダ。	81		
114 H-50	咎台	9.3 8.8	①中粒②良好③焼④%	外面瓦礫。内面杯部瓦礫。腹部ナダ。透孔 3単位。	68外		
115 H-50	小甕	7.0 10.5	①中粒②良好③焼④ほぼ完形	外面瓦礫。底部瓦礫。内面瓦礫。	112		
116 H-50	高杯	18.9 12.7	①粗粒②極良③赤④ほぼ完形	外面瓦礫。内面杯部瓦礫。腹部ナダ。赤色 施色(脚部内面は除く)	244外 赤色施色		
117 H-50	高杯	— (5.3)	①粗粒②極良③によい焼④脚部剥離	外面瓦礫。内面ナダ。透孔3単位。	255		
118 H-50	ECH99-2	11.6 (7.6)	①中粒②良好③焼④口縁部破片	外面も刷毛目。ナダ。	51		
119 H-50	甕	10.8 15.5	①中粒②極良③性質物④完形	外面口縁部・肩部瓦礫 L.R.、腹部～底部瓦 礫。内面瓦礫。	110 桂井戸式		
120 H-50	甕	13.2 (7.7)	①中粒②良好③焼黄褐色④口縁部のみ	外面口縁部織文R.後瓦礫。内面瓦礫。	107 桂井戸式		
121 H-50	甕	17.1 31.5	①中粒②良好③焼④完形	外面口縁部・脚部瓦礫。頸部波状文、腹部波 状文、脚部上面円形貼付文。内面瓦礫。	115外 槌式系		
122 H-50	甕	12.1 22.9	①粗粒②良好③焼黄褐色④完形	外面瓦礫。内面ナダ。	111 桂井戸式		
123 H-50	甕	— (19.7)	①粗粒②極良③焼④H	外面口縁部・肩部波状文、頸部波状文、腹部瓦 礫。内面瓦礫。	108外 槌式系		
124 H-50	甕	15.2 21.6	①中粒②良好③によい焼④ほぼ完形	外面付加系糸1種。内面ナダ。	148 +H-49 東関東系		
125 H-50	甕	13.9 (19.0)	①中粒②良好③焼黄褐色④%	外面口縁部・肩部波状文、頸部波状文、脚部瓦 礫。内面瓦礫。口縁部刷毛後瓦礫。	121外 槌式系		
126 H-50	台付甕	15.3 19.5	①中粒②良好③によい焼④%	外面口縁部・肩部波状文、頸部波状文、腹部～足 部。内面口縁部瓦礫。腹部ナダ。	237外 槌式系		
127 H-50	台付甕	— (19.5)	①中粒②良好③焼黄褐色④頸部～台部瓦 礫	外面刷毛目。内面ナダ。	78		
128 H-51	台付甕	8.5 (17.1)	①粗粒②良好③焼④ほぼ完形	外面瓦礫。内面口縁部瓦礫。	190		
129 H-51	甕	13.8 5.0	①粗粒②極良③焼④%	内外面とも瓦礫。	415		
130 H-51	甕	15.8 16.2	①中粒②良好③焼④%	外面刷毛後ナダ。腹部ナダ。内面瓦礫。刷毛 後ナダ、口縁部横ナダ。	1		
131 H-52	高杯	— (6.2)	①中粒②良好③焼④脚部のみ	外面瓦礫。内面ナダ。透孔4単位。	30		
132 H-52	高杯	— (6.2)	①粗粒②極良③によい焼④脚部のみ	外縁接合部刷毛目。腹部瓦礫。内面ナダ。透 孔4単位。	1		
133 H-52	甕	15.9 (8.2)	①粗粒②良好③焼④口縁部%	外面口縁部横ナダ。腹部刷毛目。ナダ。	16		
134 H-53	甕	15.4 25.6	①粗粒②極良③焼黄褐色④ほぼ完形	外面口縁部刷毛。ナダ後瓦礫 R.、腹部瓦 礫。内面ナダ・瓦礫。	300外		
135 H-53	甕	16.6 14.6	①中粒②極良③焼黄褐色④完形	外面刷毛後瓦礫。内面口縁部ナダ後瓦 礫。	85		
136 H-53	甕	— (7.3)	①中粒②極良③焼黄褐色④破片	外面刷毛後瓦礫 S.、棒状文。内面瓦礫 S.。口 縁部に削り目工具による刻込み。	20外		
137 H-53	甕	— (3.8)	①中粒②良好③焼黄褐色④破片	外面瓦礫。棒状文。内面瓦礫。	398		
138 H-53	甕	26.5 (12.7)	①粗粒②良好③によい焼④口縁部のみ	外面口縁部・棒状文。内面ナダ後刷毛目・ 脚部瓦礫。内面瓦礫。	474 内面脚部瓦 礫		
139 H-53	小形土器	— (2.8)	①中粒②良好③焼黄褐色④破片	外面刷毛後瓦礫 S.、内面ナダ後瓦礫 S.	555		

番号	出土位置	器 形	大きさ 口径 横高	①地土 ②焼成 ③色調 ④残存	器 形・製作技術の特徴	登録番号	備考
146	H-53	器台	8.4 (6.8)	①中粒②極良③灰白④%	外面軽部擦ナダ・ナダ、脚部黒磨き。内面口縁部黒磨き、脚部ナダ。透孔3枚交互に3単位。	586	
147	H-53	台付壺	— (4.9)	①中粒②良好③黄褐色④台部のみ	外面黒磨き。内面ナダ。	100外	
148	H-53	壺	9.5 6.0	①中粒②極良③椎④%	外面口縁部脚ナダ、脚部刷毛目・黒磨き、底部黒削り。内面黒磨き。	38外	
149	H-53	S付壺	7.5 8.5	①中粒②良好③によい黄褐色④充形	外面刷毛目、底部黒磨文。内面刷毛目・ナダ。	310	
150	H-53	壺	[11.0] (6.0)	①細粒②極良③によい黄褐色④口縁部破片	外面口縁部脚ナダ。黒磨き、底部刷毛目ナダ。内面口縁部黒磨き、脚部刷毛目・ナダ。	157外	
151	H-53	台付壺	12.1 (6.8)	①粗粒②良好③椎④破片	外面口縁部、脚部刷毛状、黒磨文、脚部ナダ。内面ナダ。	158外	棒式系
152	H-54	壺	5.8 6.8	①中粒②良好③椎④ほぼ充形	外面口縁部擦ナダ、脚部ナダ、脚部幅広の擦8状ナダ・黒削り。内面ナダ、口縁部擦ナダ。	10	
153	H-54	壺	15.8 (6.8)	①中粒②極良③によい椎④口縁部のみ	外面ナダ、黒磨き。内面口縁部刷毛後黒磨ナダ、脚部ナダ後黒磨き。	12外	
154	H-54	S付台壺	13.7 (3.2)	①細粒②極良③灰褐色④口縁部のみ	外面刷毛目・ナダ。内面指ナダ・ナダ・刷毛目、口縁部擦ナダ。	180外	
155	H-54	S付台壺	13.6 (20.8)	①中粒②良好③淡黄褐色④腰部のみ	外面刷毛・ナダ後刷毛目。内面ナダ、腰部指オサエ。	100外	
156	H-54	S付台壺	14.6 (28.7)	①中粒②極良③灰白④%	外面刷毛目。内面ナダ。	21外	
157	H-56	高杯	— (4.9)	①細粒②極良③明褐色④脚部のみ	外面黒磨き、脚ナダ。内面ナダ。透孔された3単位。	10	
158	H-56	壺	15.4 (6.3)	①中粒②極良③椎④口縁部のみ	外面口縁部脚部黒磨後黒磨き。脚部黒磨き。内面黒磨き。	—	棒式系
159	H-56	器台	8.2 9.5	①中粒②極良③によい黄褐色④%	外面黒磨き。内面杯部黒磨き、脚部ナダ。	23	丸山式に類似
160	H-56	S付台壺	14.4 (11.5)	①細粒②良好③によい椎④口縁部のみ	外面刷毛目。内面黒磨刷毛目、脚部ナダ。	1外	
161	H-57	小壺	[8.2] (6.9)	①中粒②良好③椎④口縁部・脚部	外面口縁部・脚部黒磨文R、脚部ナダ。内面黒磨き。	178	赤井戸式
162	H-57	高杯	18.7 (4.7)	①細粒②極良③椎④杯部	内面凹とも黒磨き。	92外	
163	H-57	壺	— (10.2)	①中粒②極良③によい椎④破片	外面腰部T字文、脚部ナダ後黒磨き。内面横方角の刷毛目、口縁部ナダ。	1	棒式系
164	H-59	壺	10.7 (3.4)	①中粒②極良③椎④口縁部	外面黒磨文R、脚部ナダ。内面ナダ。	770	赤井戸式
165	H-59	小鉢	6.0 4.6	①細粒②極良③椎④%	内外面とも黒磨き。	297外	
166	H-59	台付壺	— (5.7)	①中粒②良好③によい椎④台部のみ	外面黒磨き。内面ナダ。	767	
167	H-59	高杯	— (6.3)	①細粒②極良③椎④脚部のみ	外側黒磨き。内面ナダ。透孔された3単位。	300	
168	H-59	高杯	— (5.6)	①中粒②良好③によい椎④脚部のみ	外面黒磨き。内面ナダ・黒磨き。内面指ナダ。	1054	
169	H-59	高杯	— (6.4)	①細粒②極良③暗赤④脚部のみ	外面黒磨き。内面ナダ。脚部内面黒磨き赤色並列。	724外	赤色並列
170	H-59	高杯	— (6.3)	①細粒②極良③椎④脚部のみ	外面黒磨き。内面ナダ。内面脚部黒磨き。	197	赤井戸式
171	H-59	壺	12.3 (9.1)	①中粒②良好③椎④口縁部	外面口縁部・脚部板状文、脚部黒磨き。内面黒磨き。	490外	棒式系
172	H-59	大壺	15.7 (13.0)	①中粒②良好③によい椎④脚部のみ	外側口縁部・脚部皮状文、黒磨文状文。内面黒磨き。	510外	棒式系
173	H-61	壺	[12.6] (5.6)	①細粒②極良③によい椎④口縁部	外面黒磨文。内面黒磨き。	566外	棒式系
174	H-61	壺	[14.7] (5.0)	①中粒②極良③椎④口縁部破片	外面黒磨文R、脚部黒磨を残す。内面黒磨き。	197	赤井戸式
175	H-61	壺	17.2 (9.0)	①中粒②良好③椎④口縁部のみ	外面口縁部黒磨き、脚部黒磨状文、脚部黒磨文。内面口縁部黒磨き、脚部ナダ。	1059外	棒式系
176	H-62	小形土器	— (2.5)	①細粒②極良③によい黄褐色④部破片	外側内面外とも黒磨き。	734	
177	H-62	小形土器	— (3.3)	①細粒②極良③暗赤④底部のみ	外面黒磨き・ナダ。内面刷毛目。	632外	
178	H-62	小台付壺	6.7 6.8	①中粒②良好③椎④脚部	外面黒磨き。内面口縁部黒磨き、脚部ナダ。	1170外	
179	H-62	壺	[10.4] 6.8	①細粒②良好③椎④破片	外面黒磨刷毛目・内面ナダ。	546外	
180	H-62	高杯	— (7.6)	①細粒②極良③によい椎④脚部	外面黒磨き。内面脚部ナダ、脚接ナダ。	1153外	

番号	出土位置	跡 形	大きさ 口径 高さ	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	器 形・製作技法の特徴	登録番号	備 考
174 H-62	台付壺	—	(7.4)	①中粒②良好③灰白④台部外	内外面とも削毛目。	1271外	
175 H-62	壺	—	(9.8)	①細粒②極良③よい焼④破片	外面黄褐色文しR、脚部底面き・赤色地影。内面ナゲ、底部底毛目。	596外	南関東系 赤色並彩
176 H-62	壺	[11.0] (12.9)	①粗粒②良好③よい焼④外		外面ナゲ、底部底毛目。内面刷毛後ナゲ。	166外	
177 H-62	台付壺	15.0 (13.0)	①粗粒②良好③よい焼④外		外面刷毛後文しR、脚部ナゲ、口縁部刷毛後ナゲ。内面底面き。	1200	井戸式
178 H-62	S字台壺	[15.4] (5.2)	①中粒②良好③灰質被り④口縁部外		外面ナゲ・削毛目。内面横ナゲ・滑オサエ。	759外	
179 H-62	壺	[17.5] (14.6)	①中粒②良好③焼成④口縁部へ脚部外		外表面削毛目。内面ナゲ、口縁部削毛目。	—	
180 H-62	壺	16.8 (10.0)	①中粒②極良③灰質被り④外		外表面底面き・内面刷毛目。底面指オサエ。	221外	
181 H-63	高杯	22.7 16.6	①小粒②良好③明赤褐④ほぼ完形		外面口縁部横ナゲ・脚部・脚部紋、底部底面き・脚部底面目。内面杯底面き・脚部底面目・ナゲ・脚部ナゲ。	170	
182 H-63	壺	18.7 25.3	①粗粒②良好③焼成④ほぼ完形		外面ナゲ・口縁部横ナゲ・滑オサエ。内面ナゲ	130	
183 H-64	高杯	[15.8] (9.7)	①粗粒②良好③焼成④外		外面底面後削り・兼合部削毛目。内面削毛後削り・脚部削毛目。	541	
184 H-64	器台	7.0 8.7	①中粒②良好③明黄褐④外		外面脚部ナゲ・脚部底面き。内面ナゲ。透孔3単位。	1157外	
185 H-64	壺	— 3.9	①中粒②良好③黄褐④ツマミのみ		外表面削毛目。内面ナゲ。	—	
186 H-64	高杯	19.3 (4.4)	①粗粒②極良③赤④杯部のみ		内外面とも底面き。脚部内面を除き赤色並彩。透孔部位不明。	1292	赤色並彩
187 H-64	壺	21.2 (34.1)	①小粒②良好③焼成④外		外面底面き。内面ナゲ。	926外	
188 H-64	器台	8.9 (8.1)	①粗粒②極良③焼成④外		外面底面き。内面杯部底面き・脚部ナゲ。透孔3単位。	444	
189 H-64	台付壺	— (4.3)	①粗粒②良好③よい焼④台部のみ		外表面毛後ナゲ。内面杯部ナゲ・脚部削毛後ナゲ。	949	
190 H-64	台付壺	— (6.3)	①中粒②良好③よい焼④台部外		内外面とも削毛目。	541	
191 H-64	S字台壺	13.8 (6.0)	①中粒②良好③焼成④口縁部外		外面削毛目。内面口縁部横ナゲ底面指オサエ。	1514外	
192 H-64	S字台壺	[17.6] (8.0)	①粗粒②極良③焼成④口縁部へ脚部外		外表面削り。内面ナゲ。	230外	
193 H-64	壺	[23.4] (9.9)	①中粒②極良③焼成④破片		外面口縁部底面き・底面削毛目。内面削毛目。	487外	
194 H-64	壺	— (18.1)	①中粒②極良③よい焼④外		外表面底面き・口縁部削毛後ナゲ。内面ナゲ・底面き。	1654	伊体土器
195 H-65	壺	9.2 9.8	①中粒②極良③明赤褐④ほぼ完形		外面口縁部へ脚部横ナゲ後削毛目・脚部ナゲ・削毛目。内面口縁部横ナゲ・脚部ナゲ。	140	
196 H-65	壺	14.2 20.0	①中粒②極良③よい焼④ほぼ完形		内面とモロ表面底面紋・脚部ナゲ。	175	
197 H-65	壺	10.2 11.9	①中粒②良好③明赤褐④ほぼ完形		外表面脚部へ脚部底面ナゲ・ナゲ後底紋・脚部削毛目。内面口縁部底面き・脚部ナゲ。	197外	
198 H-65	壺	8.6 8.9	①中粒②極良③よい焼④ほぼ完形		外表面口縁部横ナゲ・脚部ナゲ・脚部削毛目。内面口縁部横ナゲ・脚部ナゲ。	190	
199 H-65	高杯	19.3 (7.5)	①中粒②極良③焼成④杯部のみ		外表面ナゲ・変形リ。内面ナゲ。	150外	
200 H-65	高杯	19.8 (7.3)	①中粒②極良③明赤褐④杯部のみ		外表面削毛後ナゲ。内面口縁部横ナゲ・脚部削毛目。	100外	
201 H-65	高杯	20.0 15.3	①中粒②良好③焼成④外		外表面底面きナゲ。内面ナゲ。	198外	
202 H-65	高杯	20.2 15.8	①粗粒②極良③よい焼④ほぼ完形		外表面底面・脚部底紋・横合部底面き。内面杯部底紋・脚部底紋リ。	199	
203 H-65	壺	12.5 7.5	①中粒②極良③焼成④ほぼ完形		外面口縁部横ナゲ・脚部ナゲ・底部底面目。内面底面横ナゲ・脚部ナゲ・底部底面ナゲ。	200外	
204 H-65	高杯	— (10.1)	①粗粒②極良③焼成④脚部外		外表面削毛目。内面底面目。	85	
205 H-65	壺	[13.7] (6.9)	①粗粒②極良③焼成④口縁部外		内外面ともナゲ。	—	
206 H-65	壺	15.7 21.5	①中粒②極良③明赤褐④外		内外面ともナゲ。	146外	
207 H-65	壺	15.1 26.8	①中粒②良好③焼成④外形		外表面毛後ナゲ。内面削毛目・ナゲ。	1	

番号	出土位置	器 形	大 小	①粘 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	器 形・製作技法の特徴	出 収 号	備 考
268	H-66	小壺	10.9 9.4	①粗粒②良好③によい黄④焼	外表面削り・ナデ。内面ナデ。	416外	
269	H-66	壺	— (10.6)	①中粒②極良③によい焼④焼	内外面ともナデ。	378	
270	H-66	壺	[10.3] 11.9	①中粒②良好③赤褐④焼	内外面ともナデ。	161	
271	H-82	壺	[15.2] (7.0)	①中粒②良好③浅黄④口縁部剥	外表面刷毛後ナデ、颈部～底部。外表面刷毛後ナデ。	598	
272	H-82	壺	[15.3] (2.3)	①中粒②良好③によい④口縁部剥	外表面削り。内面ナデ。	876外	
273	H-82	壺	16.4 (5.4)	①中粒②極良③明黄褐④口縁部のみ	外表面削り。内面削り、底部削り。	762外	
274	H-82	台付壺	[12.3] (7.7)	①中粒②極良③によい焼④焼	外表面削り～底部焼成R.I.、脚部瓦礫。内面瓦礫。	1108 畠井戸式	
275	H-82	壺	13.8 (10.6)	①中粒②極良③によい黄④焼	外表面削り～底部焼成R.I.。内面瓦礫。	492 畠井戸式	
276	H-82	S字台付	[18.5] (9.1)	①中粒②極良③浅黄④破片	外表面刷毛目。内面ナデ。	734	
277	H-82	壺	15.0 30.6	①粗粒②極良③浅黄④焼	外表面削り、口縁部輪削度、指オサエ。内面瓦礫。	70外 畠井戸式	
278	H-82	壺	7.4 (6.6)	①中粒②良好③焼④焼	外表面瓦礫。内面口縁部瓦礫。透孔4单位。	377外	
279	H-82	台付壺	— (6.4)	①粗粒②良好③焼④台壺のみ	外表面底部刷毛目、台部ナデ。内面底部瓦礫目、台部瓦礫。	215外	
280	H-82	高杯	— (8.4)	①粗粒②極良③浅黄褐④焼	外表面削り。内面杯部瓦礫。脚部ナデ。透孔3单位。	954外	
281	H-82	高杯	— (5.2)	①中粒②良好③浅黄褐④脚部のみ	外表面削り、底部ナデ。内面ナデ。	914	
282	H-82	小壺	9.6 (5.1)	①中粒②良好③によい焼④口縁部剥	内外面とも刷毛目。	130	
283	H-82	台付壺	9.7 9.5	①中粒②良好③によい黄④ほぼ完形	外表面削り。内面底部瓦礫。台部ナデ。	715外	
284	H-82	高杯	— (7.4)	①粗粒②極良③焼④脚部のみ	外表面削り。内面ナデ。	525	
285	H-82	高杯	— (7.9)	①粗粒②極良③黄褐④脚部のみ	外表面削り。内面ナデ。	721外	
286	H-82	台付壺	10.5 (12.1)	①粗粒②良好③によい焼④焼	内外面ともナデ。	890	
287	H-82	台付壺	— (13.1)	①中粒②極良③浅黄④脚部のみ	外表面底部削毛目、台部瓦礫。ナデ。内面底部瓦礫。台部ナデ。	768外	
288	H-82	小壺	— (12.9)	①中粒②良好③焼④焼	外表面ナデ。内面ナデ、肩部瓦オサエ。	965外	
289	H-82	壺	[13.9] 22.7	①中粒②良好③浅黄④ほぼ完形	外表面削り。肩部波状文、颈部輪状文、脚部瓦礫。内面口縁部～脚部ナデ、脚部瓦礫。	948外 極式系	
290	H-82	壺	14.5 (19.3)	①中粒②極良③焼④焼	外表面削り～脚部上半周波状文R.I.、脚部下半～瓦礫。内面口縁部瓦礫。脚部ナデ。	716外 畠井戸式	
291	H-83	高杯	18.4 13.6	①中粒②良好③焼④焼	外表面口縁部横ナデ、肩部ナデ、脚部刷毛後ナデ。脚部ナデ。内面焼成底・波状文。	21外	
292	H-84	台付壺	— (5.8)	①粗粒②良好③浅黄褐④台壺	外表面刷毛目。内面刷毛目。	391外	
293	H-84	壺	10.4 (4.4)	①中粒②極良③灰青褐④口縁部剥	外表面ナデ後瓦礫。内面瓦礫。	555外	
294	H-84	小壺	7.6 5.9	①中粒②極良③灰青褐④完形	外表面削り。脚部瓦礫。底部刷毛目、底部瓦剝。内面瓦礫。底部ナデ。	615	
295	H-84	高杯	18.4 (5.9)	①粗粒②極良③浅黄褐④杯部剥	内外面とも瓦礫。	508	
296	H-84	壺	10.2 15.8	①粗粒②極良③によい焼④完形	外表面口縁部～脚部焼成文R.I.、脚部～底部瓦剝。内面瓦剝。内面削り。	540 畠井戸式	
297	H-84	台付壺	— (5.8)	①粗粒②良好③によい黄褐④台壺	外表面底部削毛目、台部ナデ。内面刷毛目。	249	
298	H-84	壺	11.5 8.2	①粗粒②極良③焼④焼	外表面刷毛後瓦礫。底部瓦礫。ナデ。内面瓦礫。	652外	
299	H-84	壺	12.2 14.9	①中粒②極良③焼④ほぼ完形	外表面削り。内面瓦剝。内面瓦剝・波状文・ナデ。	500外 極式系	
300	H-84	壺	[20.1] (4.6)	①中粒②極良③浅黄褐④口縁部剥	外表面削毛後ナデ。内面ナデ・刷毛目。	303外	
301	H-85	台付壺	— (5.2)	①中粒②極良③浅黄褐④台壺	内外面とも刷毛目。	219外	
302	H-85	壺	6.4 (6.3)	①中粒②良好③によい黄褐④焼	外表面杯部瓦礫。脚部刷毛後瓦礫。内面刷毛目。透孔4单位。	293 畠井戸式	
303	H-85	台付壺	— (5.6)	①中粒②良好③明黄褐④台壺	外表面刷毛目。ナデ。内面刷毛目。	121	

番号	出土位置	器 形	大 き さ	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	器 形・製 作 技 法 の 特 徴	記録番号	備 考
			口径 高さ				
244	H-85	臺台	7.9 7.8	①細粒②極良③によい焼④少	外面磨削。内面軽部磨削、脚部ナデ・唇状の工具による強い擦。通孔3単位。	133外	
245	H-85	壺	12.4 (7.9)	①中粒②良好③明神焼④口縁部少	外面削毛後荒磨き。内面口縁部磨き、腹部ナデ	122外	
246	H-85	台付壺	— (5.7)	①粗粒②良好③によい焼④台脚少	外面削毛目・ナゲ。内面底部ナデ、台脚周目、ナゲ。	224外	
247	H-85	高杯	[11.0] (5.6)	①中粒②極良③淡黄④少	外面荒磨き。内面削毛後荒磨き。透孔2段交互に3単位。	145	
248	H-85	壺	[17.7] (6.0)	①中粒②良好③によい焼④口縁部破片	外面削毛目。内面ナデ、口縁部復元ナデ。	155	
249	H-85	壺	17.2 (5.2)	①細粒②板良③極良④口縁部少	外面削毛後ナデ。内面荒磨き。	395外	
250	H-85	壺	21.7 (6.6)	①中粒②板良③良黄④口縁部のみ	外面ナゲ・刷毛目。内面荒磨き。	87外	
251	H-86	台付壺	— (4.2)	①中粒②良好③灰白④台脚のみ	外面削毛部削毛目、脚部ナデ、内面ナデ。	225	
252	H-86	台付壺	— (5.8)	①中粒②良好③明神④台脚少	外面削毛目。内面削毛後ナデ。	71	
253	H-86	壺	18.2 (11.6)	①中粒②良好③によい焼④口縁部少	外面荒磨き。口縁部用オサエ・輪張底。内面荒磨き・ナゲ。	222外	赤井戸式
254	H-90	壺	12.9 (10.7)	①粗粒②良好③極良④少	外面白縁部・肩部鶏文L R、胸部荒磨き。内面荒磨き。	59	赤井戸式
255	Z-1	壺	[15.3] (7.8)	①細粒②板良③によい焼④口縁部破片	外面白縁部機ナデ・荒磨き。内面ナデ。	36	持式系か
256	Z-1	高杯	— (8.4)	①中粒②良好③によい焼④脚部少	外面荒磨き。内面ナデ。	145	
257	D-1	壺	— (5.0)	①中粒②不良③灰黄褐④底部破片	外面削毛目・ナデ、底部本底底あり。内面荒磨き・ナデ。	179外	
258	D-4	壺	23.9 (27.5)	①細粒②良好③によい焼④少	外外面と削毛後ナデ。	1	
259	D-2	高杯	19.2 (5.6)	①中粒②良好③黄褐④脚部少	外面白縁部機ナデ・脚部荒磨き・腰部ナデ。内面荒磨き。	4	
260	D-2	壺	19.0 14.0	①粗粒②良好③極良④少	外面白縁部鶏文L R、脚部荒磨き、底部荒取り。内面荒磨き・底部ナデ。	16外	赤井戸式
261	W-8	杯	[13.5] (3.7)	①中粒②板良③灰灰黄④口縁部破片	外面白縁部機ナデ・脚部荒磨り。内面横ナデ。	—	
262	H-84	土瓶	(底1.6・幅1.6・厚1.3・重3.0)	①粗粒②良好③極良④完形⑤ナデ。		130	
263	€-31G	幻玉	① 2.1 ② 1.3 ③ 0.7 ④ 2.0 ⑤ 先形芯磨石			—	H-46に所属か
264	H-46	青玉	① 1.6 ② 0.7 ③ 0.6 ④ 1.0 ⑤ 先形芯磨石			50	
265	H-82	幻玉	(底2.1・幅1.8・厚1.3・重4.0)	①粗粒②良好③極良④灰黄褐⑤ナデ。		865	
266	H-45	土製幻玉	(共 4.6・幅 2.2・厚 1.6・重 13.0)	①粗粒②良好③脚部④脚部⑤ナデ。		255	
267	H-57	手握土器	2.5 1.7	①粗粒②良好③脚部④完形	外表面オサエの後ナデ、内面ナデ。	200	
268	H-49	手握土器	3.0 2.8	①粗粒②良好③によい焼④脚部④完形	折り返し口縁。外表面オサエ、内面ナデ。	1682	
269	H-53	手握土器	3.4 2.5	①粗粒②良好③脚部④脚部④完形	折り返し口縁。外表面オサエ、内面ナデ。	477	
270	H-49	手握土器	— (1.0)	①粗粒②良好③によい焼④脚部完形	脚オサエの後ナデ。	3169	
271	H-49	手握土器	— (1.1)	①粗粒②良好③脚部④少	外表面オサエ、内面ナデ。	878	
272	H-57	手握土器	2.9 1.8	①粗粒②良好③脚部④脚部④完形	外表面オサエ、内面ナデ。	900	
273	H-59	手握土器	[3.6] (1.3)	①粗粒②良好③脚部④脚部	折り返し口縁。外表面オサエ。	F,77±	
274	H-48	手握土器	[3.8] 1.8	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部	口縁外縁に削み。外表面オサエ、内面ナデ。	111	
275	H-82	手握土器	4.2 1.7	①粗粒②良好③脚部④脚部	折り返し口縁。外表面オサエ、内面ナデ。	867	
276	H-53	手握土器	— (1.4)	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部	外表面オサエ、内面ナデ。	484	
277	H-53	手握土器	4.3 2.9	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部	内外面ともナデ。内面は丁寧なナデ。	584	
278	H-85	手握土器	4.0 1.6	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部	ナデ。	P,4	製作仕様記入
279	H-49	土製品	(底 2.9・幅 2.7・厚 1.0・重 7.0)	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部		3821	土製便器の一部か
280	H-59	土製品	(底 5.2・幅 1.1・厚 0.8・重 6.0)	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部		323	—
281	€-35G	土製品	(底 3.7・幅 1.1・厚 0.7・重 4.0)	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部		—	H-58の所属か
282	H-61	筋鉢	(底 4.0・厚 2.0・重 26.0)・孔径 0.71	①粗粒②板良③脚部④脚部④脚部		—	
283	H-33	筋鉢	(底 5.5・厚 1.7・重 37.0)・孔径 0.61	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部		37	
284	H-59	筋鉢	(底 4.5・厚 1.2・重 34.0)・孔径 0.61	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部		786	
285	H-45	筋鉢	(底 4.5・厚 1.3・重 33.0)・孔径 0.71	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部		53	
286	A-39G	筋鉢	(底 4.5・厚 1.3・重 32.0)・孔径 0.71	①粗粒②良好③脚部④脚部④脚部		—	H-51の所属か
287	H-65	碗	(1) 4.9 ② 1.4 ③ 1.7 ④ 17.0 ⑤ 先形⑥虎紋模(4面使用)			237	
288	T-1	土製品	(底 3.7)・幅 1.1・厚 0.7・重 10.0)	①中粒②良好③脚部④脚部④脚部		39	
289	H-64	土製品	(底 6.1)・幅 1.7・厚 0.8・重 76.0)	①粗粒②板良③脚部④脚部④脚部		1273	
290	H-49	陶器皿	(底 3.6・厚 3.4・重 25.0・孔径 0.3)	①粗粒②板良③脚部④脚部④脚部		3960	
291	H-49	高麗土器	(底 10.7・幅 5.7)・厚 2.3・底部長 8.5・底部深 1.0・孔径 0.3	①粗粒②板良③脚部④脚部④脚部		3164	周縁に摩擦痕

番号	出土位置	器形	大きさ 口径 厘米	①胎 土 ②燒成 ③色調 ④残存	器 形・製作技法の特徴	登録番号	備 考
292	～39G	瓦器		《長(6.2)・幅(4.3)・厚2.7・重(78.0)》①細粒②板瓦③灰白④破片⑤ナデ		—	
293	H-42	土蔵円盤		《径4.4・厚1.4・重(22.0)》①細粒②良好③④完形空窓部分的に研磨。		86	
294	H-43	土蔵円盤		《径3.9・厚0.9・重(9.0)》①細粒②良好③表面④完形⑤ほぼ全周研磨。		222	
295	H-45	土蔵円盤		《径4.4・厚0.5・重(9.0)》①細粒②良好③焼④完形⑤全周研磨。		7142	偏振波状文
296	H-49	鉢器		①(3.3)②1.1 ③0.8 ④(3.0)破片		—	
297	H-66	鉢器		①(5.2)②(1.1)③(10.3)④(5.0)破片		—	
298	H-61	鉢器		①(2.6)②(0.8)③(0.2)④(1.0)破片		1029	
299	H-50	鉢器		①(2.3)②(0.8)③(0.2)④(2.0)破片		—	
300	東側	鉢器		①(2.6)②(2.2)③(0.8)④(7.0)破片		—	
301	H-49	鉢器		①(3.1)②(1.8)③(0.1)④(3.0)破片		3770	
302	H-53	鉢器		①(2.7)②(0.2)③(0.2)④(0.5)破片		513	
303	H-82	鉢器		①(1.8)②(4.1)③(0.2)④(0.5)破片		240	
304	H-49	鉢器		①(2.6)②(2.6)③(0.4)④(9.0)破片		769	
305	T-3	鉢器		①(2.4)②(1.4)③(0.1)④(2.0)破片		3	
306	H-59	鉢器		①(3.8)②(2.3)③(0.9)④(4.0)破片		859	
307	H-90	鉢器		①(3.3)②(2.2)③(0.1)④(3.0)破片		129	
308	H-47	鉢器		①(2.9)②(3.4)③(0.1)④(4.0)破片		569	
309	H-46	砾石		①9.4 ②2.5 ③1.6 ④36.6 ⑤完形 ⑥母母石英片		25	
310	H-49	砾石		①11.0 ②7.5 ③4.4 ④238.0 ⑤破片 ⑥粗粒安山岩(1面使用)		3060	
311	H-84	砾石		①12.5 ②6.5 ③3.4 ④310.0 ⑤砾片 ⑥粗粒岩(3面使用)		494	
312	H-84	砾石		①15.4 ②9.9 ③5.8 ④1000.0 ⑤完形 ⑥粗粒安山岩(4面使用)		519	
313	H-83	砾石		①13.9 ②5.7 ③3.9 ④500.0 ⑤完形 ⑥粗粒安山岩(先端使用)		5	
314	H-82	砾石		①11.2 ②7.6 ③5.8 ④575.0 ⑤完形 ⑥粗粒安山岩(2面使用)		—	
315	H-49	砾石		①9.7 ②7.2 ③6.0 ④456.0 ⑤完形 ⑥粗粒安山岩(3面使用)		6404	
316	H-35	砾石		①15.6 ②11.8 ③7.8 ④1400.0 ⑤完形 ⑥粗粒安山岩(4面使用)		40	
317	H-66	砾石		①11.0 ②8.6 ③6.4 ④815.0 ⑤完形 ⑥粗粒安山岩(先端使用)		197	
318	▼-38E	砾石		①5.5 ②4.3 ③3.1 ④160.0 ⑤完形 ⑥砾石	《4面使用》	—	
319	H-61	砾石		①4.1 ②4.0 ③1.9 ④29.0 ⑤完形 ⑥粗粒安山岩(2面使用)		353	
320	H-63	砾石		①22.8 ②21.1 ③4.5 ④2200.0 ⑤完形 ⑥粗粒岩(4面使用)		352 + H-83	
321	J-T-1	鏡文深鉢		①織紋②板良③良好④口縁部に織紋⑤口縁部無文・鏡文LR		1 加賀利 E 4	
322	J-T-1	鏡文深鉢		①中粒②板良③良好④網部⑤純文LR		5 加賀利 E 4	
323	J-T-1	鏡文深鉢		①中粒②板良③良好④網部⑤鏡文部		3 有名寺	
324	J-T-1	鏡文深鉢		①中粒②板良③良好④網部⑤鏡文LR		4 加賀利 E 4	
325	J-T-1	鏡文深鉢		①中粒②板良③良好④把手⑤円形文・沈縫		6 有名寺	
326	H-54	鏡文深鉢		①織紋②良好③網部④内外とも貝殻条痕文		931	早期綱文
327	H-66	鏡文深鉢		①織紋②良好③網部④網部⑤内外とも貝殻条痕文		496	早期綱文
328	オ-24G	鏡文深鉢		①織紋②良好③網部④網部⑤内外とも貝殻条痕文		—	早期綱文
329	オ-24G	鏡文深鉢		①織紋②良好③にむし黄緑④網部⑤外縁に織文、内面は貝殻条痕文。		—	早期綱文～前中期綱文
330	オ-24G	鏡文深鉢		①織紋②良好③にむし黄緑④網部⑤外縁に織文、内面は貝殻条痕文。鏡文LR。		—	早期綱文～前中期綱文
331	ケ-25G	鏡文深鉢		①織紋②良好③にむし黄緑④口縁部に集合沈縫		—	鏡縫 a
332	ト-37G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤鏡縫		—	鏡縫 a
333	メ-28G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤網縫		—	鏡縫 a
334	▼-29G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤鏡縫		—	鏡縫 a
335	ホ-34G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④網部⑤鏡縫		—	鏡縫 a
336	ホ-34G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④網部⑤鏡縫		—	鏡縫 a
337	ヘ-34G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④口縁部⑤口縁部に鏡縫		—	鏡縫 a
338	ヘ-40G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④口縁部⑤口縁部に斜縫		—	五個ケ台
339	コ-22G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④網部⑤鏡縫		—	五個ケ台
340	テ-33G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	五個ケ台
341	キ-39G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	五個ケ台
342	日-H-64	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④網部⑤沈縫		834外	五個ケ台
343	ケ-32G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	五個ケ台
344	フ-39G	鏡文深鉢		①細粒②板良③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	五個ケ台
345	メ-31G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	有名寺 1
346	ト-34G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	有名寺
347	ハ-34G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤鏡縫		—	有名寺
348	ヘ-24G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	湖之内 2
349	ヘ-29G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	加賀利 E 2
350	セ-19G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	湖之内
351	キ-24G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	湖之内
352	ハ-34G	鏡文深鉢		①中粒②良好③にむし黄緑④網部⑤沈縫		—	湖之内
353	ケ-21G	石器	① 2.0 ② 1.5 ③ 0.3 ④ 0.5	⑤光形⑥凸凹石		—	凸基無基式
354	H-63	石器	① 12.2 ② 1.1 ③ 0.4 ④ 0.5 ⑤先端・基部欠損⑥無突起		322	鋸齒狀	
355	ヘ-38G	石器	① 12.6 ② 1.5 ③ 0.3 ④ 1.0 ⑤光形・基部欠損⑥チャーフ		—	鋸齒狀	

番号	出土位置	器 形	大 S S				鋲 土 ②焼成 ③色調 ④残存	器 形・製作方法の特徴	登録番号	備 考
			口径	底高	①	⑤				
356	ム—30G	石瓶	① 2.8	② 1.5	③ 0.5	④ 1.0	⑤欠損黒色頁岩	—	同行微酸気味	
357	H—50	石鏡	① 4.0	② 1.5	③ 0.6	④ 3.0	⑤欠損黒色頁岩	120	附蓋無基式	
358	H—49	石匙	① 3.4	② 2.4	③ 0.7	④ 3.0	⑤完形空筒ナット	1734	柄部石造	
359	ヌ—9 G	打製石斧	① 15.6	② 8.5	③ 2.8	④ 65.0	⑤完形空筒黒色頁岩	—	片刃形	
360	サ—39 G	打製石斧	① 9.3	② 5.9	③ 1.6	④ 79.0	⑤完形空筒黒色頁岩	—	分離形	
361	I—5 G	アカ78G	① 16.8	② 10.0	③ 4.9	④ 735.0	⑤完形空筒ホルンフェルス	—	—	
362	D—11	素面鏡	①細粒②無良③暗褐色④無縫隙	—	—	—	⑤内外面に叩き、押印。	—	—	
363	W—9	素面鏡	①細粒②無良③により赤褐色④弱縫隙	—	—	—	⑤内外面に叩き。	—	—	
364	W—9	素面鏡	①細粒②無良③により赤褐色④弱縫隙	—	—	—	⑤内外面に叩き。	—	—	

注) 1. 純文土器、常滑窯の観察項目は、①鋲土②焼成③の調査残存④文様・整形方法の順で記載した。

2. 玉・土製品・石器・石製品の観察項目は、①最大長②最大幅③最大厚④重さ⑤残存⑥石材の順で記載した。

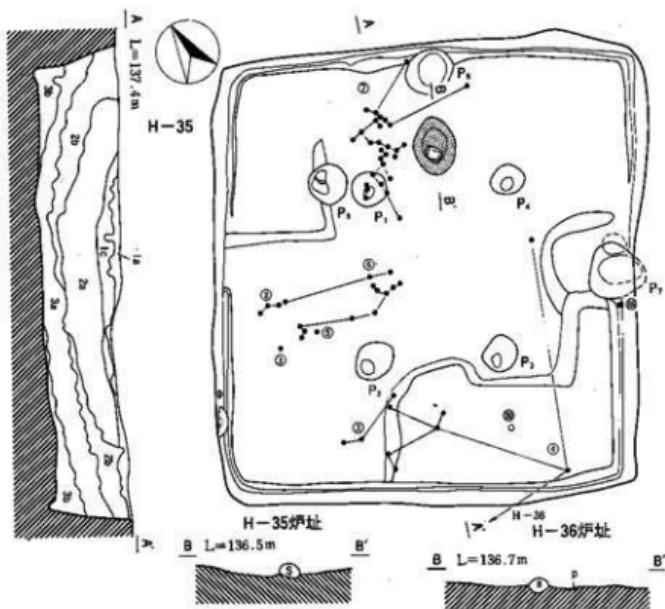
3. ① 鋲土は細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0mm~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な物質が入る場合に該物名を記載。

② 焼成は焼良、良好、不良の3段階評価。

③ 色調は土器外表面を観察し、色名は新規標準土色給(小山・竹原1976)によった。

④ 大きさの単位はcm、gであり、残存度を()、復元度〔 〕で示した。その他の小片については所轄部位を記載した。

H-35~37号
住居址層序説明
1 a層 に bei 黄褐色粗砂層。
1 b層 オリーブ褐色粗砂層。
1 c層 黒褐色粗砂層。
2 a層 黑色細砂層。「C混じり黑土層」。
2 b層 褐色細砂層。
2 c層 褐色細砂層。
3 a層 黄褐色細砂層。
3 b層 明黄褐色細砂層。
3 c層 に bei 黄褐色細砂層。



H-38号
住居址層序説明
1 層 暗褐色粗砂層。
2 a層 黑褐色細砂層。「C混じり黑土層」。
2 b層 黑褐色細砂層。
3 層 オリーブ褐色細砂層。
4 層 黑褐色細砂層。
4 a層 オリーブ褐色細砂層。
5 a層 黄褐色細砂層。
5 b層 明黄褐色細砂層。
5 c層 明黄褐色細砂層。

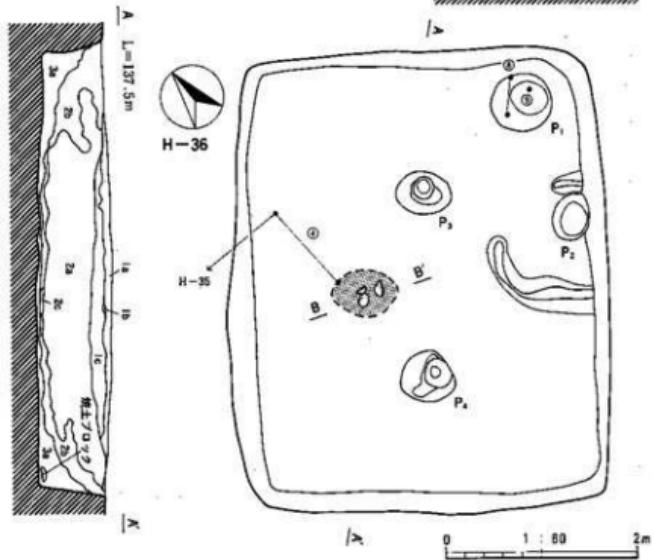


Fig.13 H-35・36号住居址

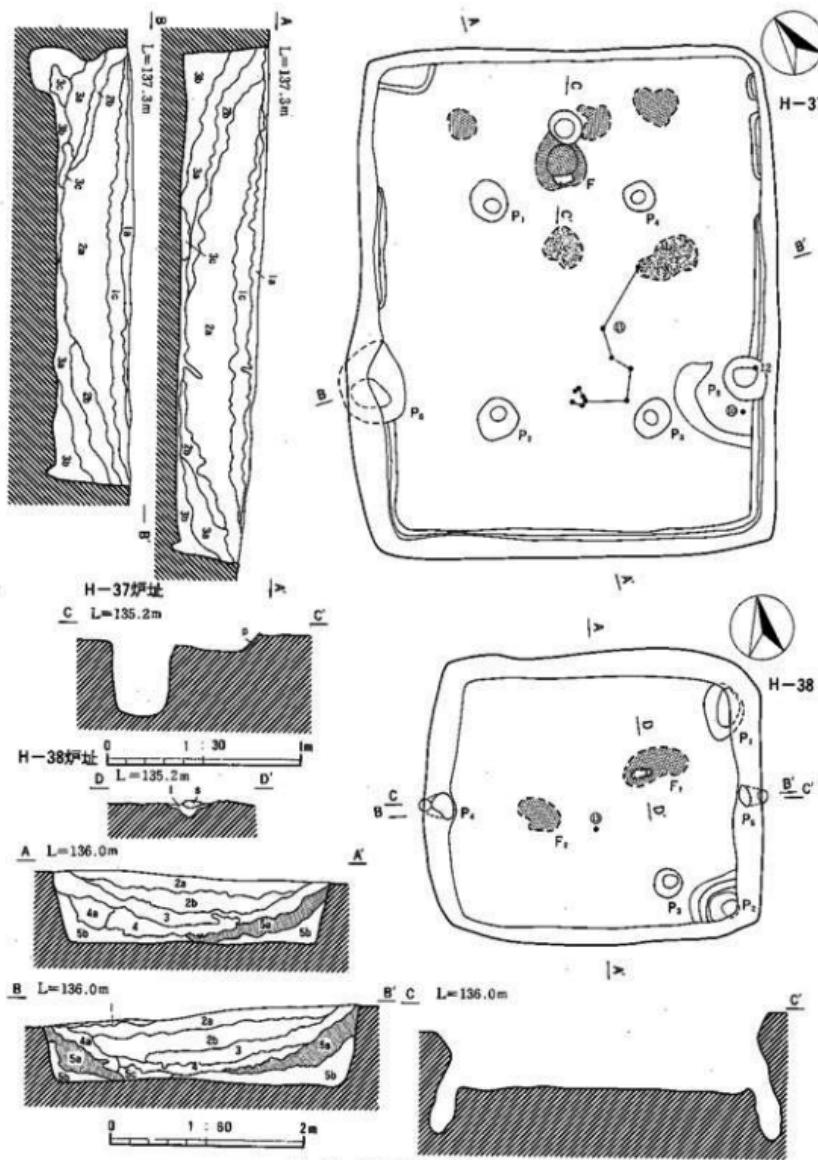


Fig.14 H-37·38号住居址

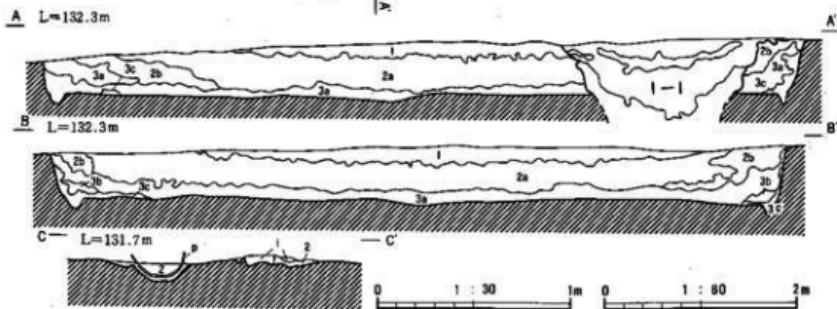
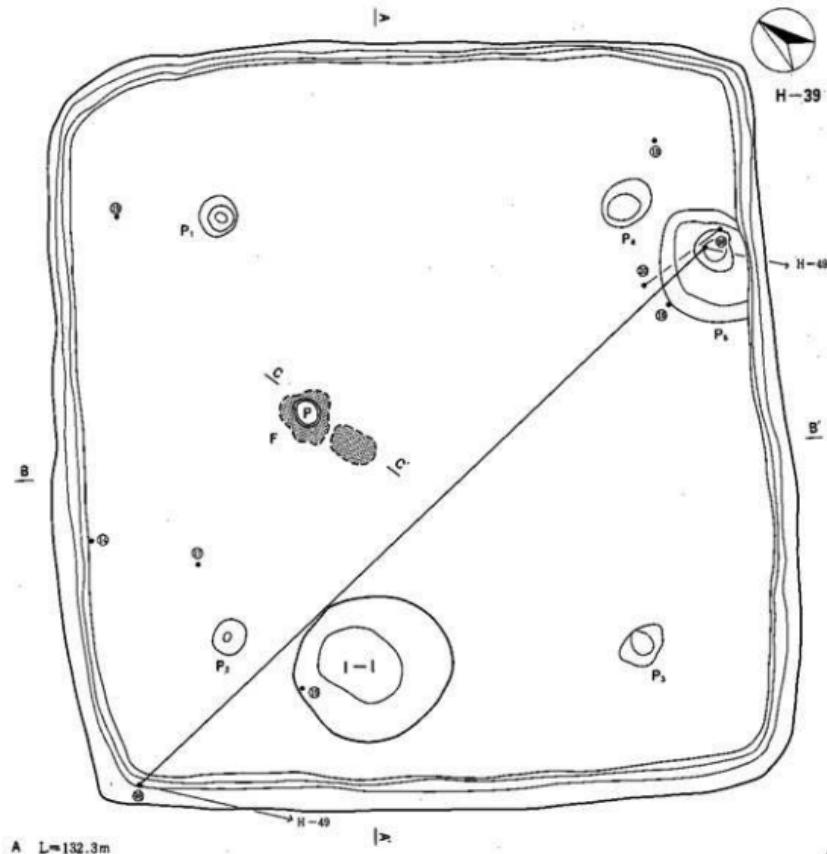
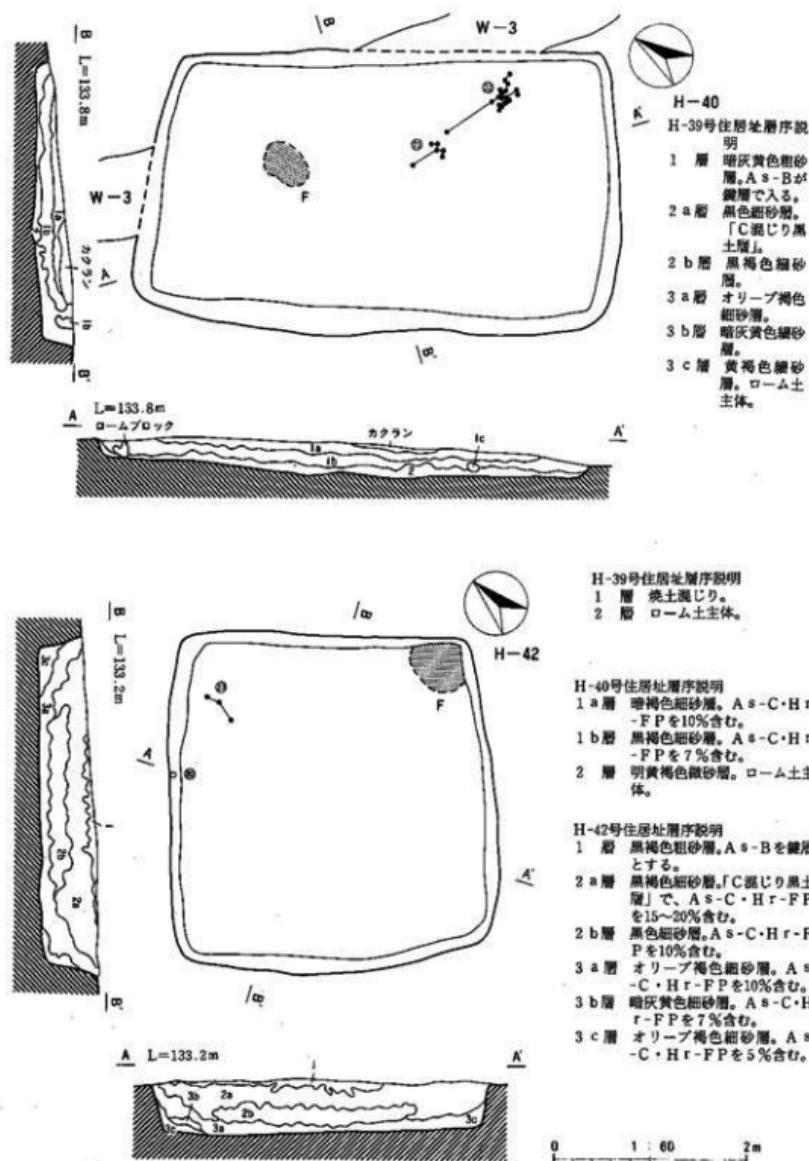
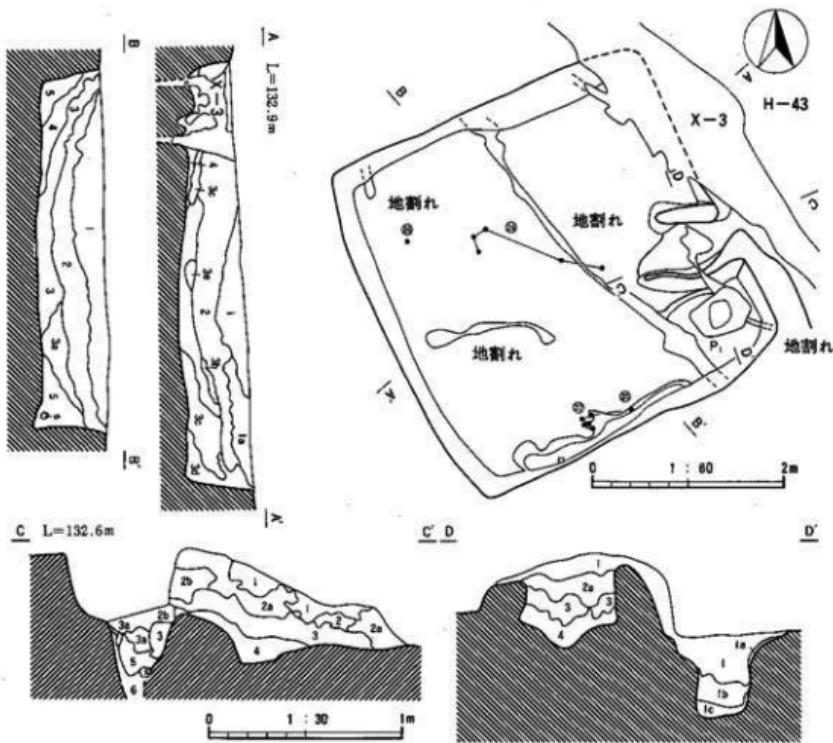


Fig.15 H-39号住居址





H-43号住居址層序説明

- 1 層 黒褐色細砂層。A s-C・H r-F Pが15%入る。
- 1 a 層 にぶい黄褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを15%とロームブロックを含む。
- 2 層 オリーブ褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを10%とロームブロックを含む。
- 3 層 オリーブ褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを10%とロームブロックを含む。
- 3 a 層 梅色細砂層。A s-C・H r-F Pを7%、ロームブロックを含む。
- 3 b 層 暗灰黄色細砂層。A s-C・H r-F Pを10%含む。
- 3 c 層 オリーブ褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを10%含む。
- 3 d 層 オリーブ褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを5%とロームブロックを含む。
- 3 e 層 オリーブ褐色細砂層。3層に焼土粒子が10%混入。
- 4 層 オリーブ褐色微砂層。A s-C・H r-F Pを3%とロームブロックを含む。
- 5 層 オリーブ褐色微砂層。A s-C・H r-F P・ロームブロックを含む。

H-43号住居址層序説明

- 1 層 黄褐色細砂層。ロームブロックを含む。
- 1 a 層 黄褐色細砂層。ローム土を含む。
- 1 b 層 明黄褐色細砂層。ローム土を含む。
- 1 c 層 黄褐色細砂層。ローム土を含む。
- 2 a 層 橙色細砂層。ロームブロック、焼土を含む。
- 2 b 層 赤褐色細砂層。焼土20%とロームブロック混入。
- 3 層 赤色細砂層。焼土30~40%とロームブロック混入。
- 3 a 層 3層に粘土が40~50%入ったもの。
- 4 層 黄褐色細砂層。ロームブロックを含む。
- 5 層 ハードローム層。A c-Y P、SPブロック混入。
- 6 層 黄褐色細砂層。地割れに落ち込んだ層。ロームブロックも入る。

Fig.17 H-43号住居址

H-44号住居址層序説明

- 1 層 オリーブ褐色輕石層。A s-Cの純層。
- 1 a 層 オリーブ褐色粗砂層。A s-Cが混在し、A s-Cとクロボクの混合。
- 2 a 層 暗灰黃色微砂層。A s-Cを10%含む。
- 2 b 層 にぶい黃褐色微砂層。
- 3 層 オリーブ褐色微砂層。
- 3 a 層 明褐色微砂層。炉址部分の上面。

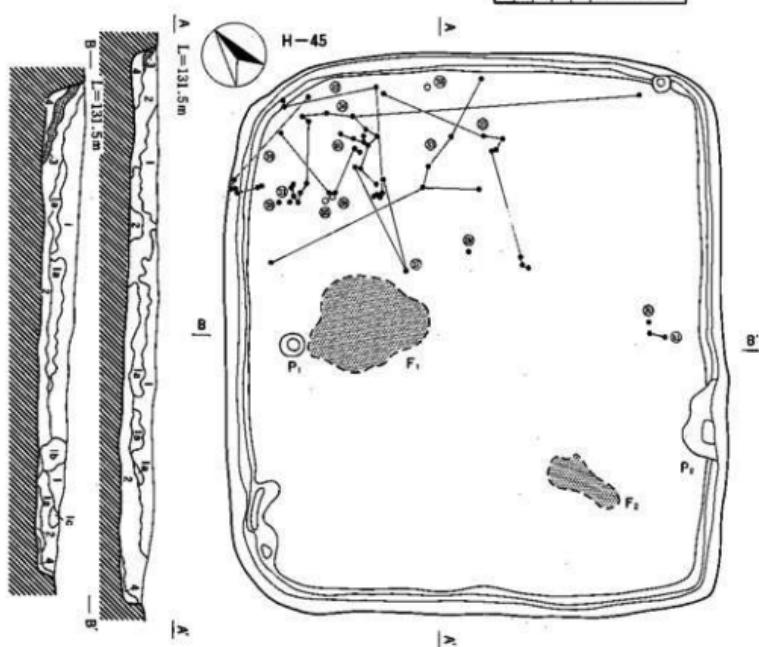
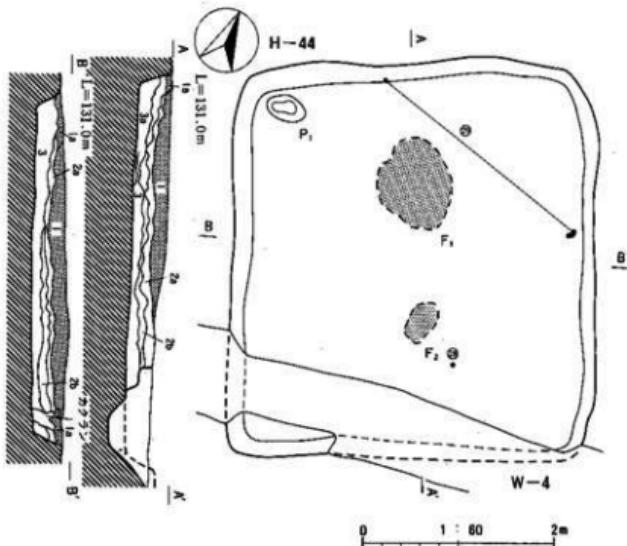
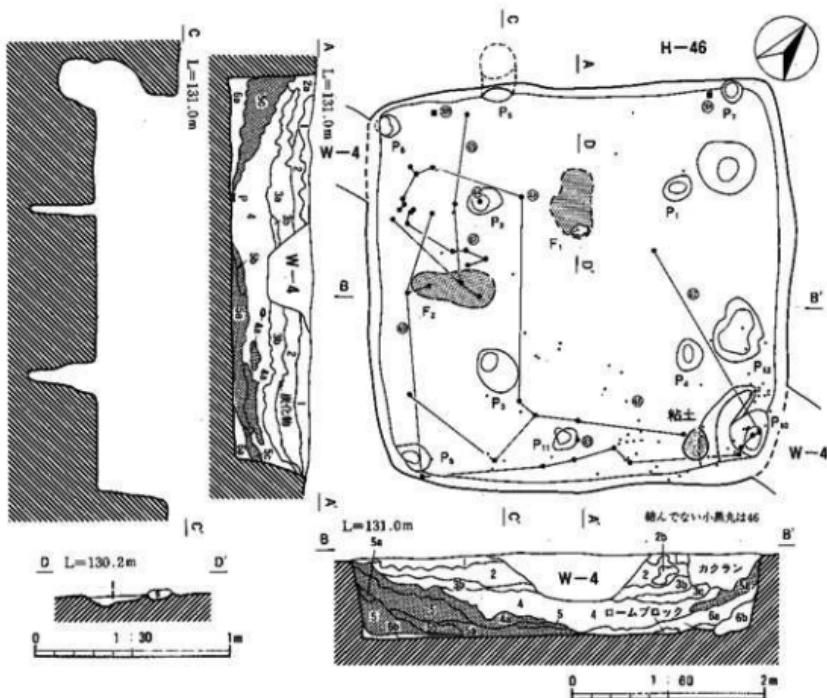


Fig.18 H-44・45号住居址



H-45号住居址層序説明

- 1 層 にぶい黄褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを10%、ローム土を20-30%含む。
- 1 a層 黄褐色細砂層。ローム土50%以上含む。
- 1 b層 にぶい黄褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを7-10%含む。
- 1 c層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを30%含む。
- 2 層 黒褐色微砂層。A s-Cを5-7%含む。
- 3 層 にぶい黄褐色絆石層。よごれたA s-Cが80%以上入る。
- 4 層 オリーブ褐色微砂層。ローム土主体。

H-46号住居址層序説明

- 1 層 黒色土主体。少量焼土が混じる。

H-46号住居址層序説明

- 1 層 黄褐色細砂層。A s-B主体。
- 2 層 明黄褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを3-5%、ロームブロックを10-15%含む。
- 2 a層 明褐色微砂層。黒色土主体。A s-C・H r-F Pを7-10%含む。
- 2 b層 黄褐色細砂層。ロームブロック主体。
- 2 a層 明黄褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを5-7%、ロームブロックを10-15%含む。
- 3 b層 明黄褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを20%、ロームブロックを5-7%含む。
- 3 c層 明黄褐色細砂層。A s-C・H r-F Pを5-7%、ロームブロックを30-40%含む。
- 4 層 暗オリーブ褐色細砂層。黒色土主体。A s-Cとローム土が30%混じる。
- 4 a層 黄褐色細砂層。よごれたA s-Cが鍛層としてブロックでみられる。4層よりA s-Cとローム土の混入が多くなる。
- 5 層 オリーブ褐色粗砂層。よごれたA s-Cの鍛層。
- 5 a層 黄褐色粗砂層。よごれたA s-Cが鍛層で入り、ローム土主体。
- 5 b層 暗灰黄色粗砂層。よごれたA s-Cが鍛層で、黒色土主体。
- 5 c層 黄褐色粗砂層。よごれたA s-Cが鍛層で、ローム土主体。
- 6 a層 黄褐色微砂層。黒色土主体。
- 6 b層 黄褐色微砂層。ローム土主体。

Fig.19 H-46号住居址

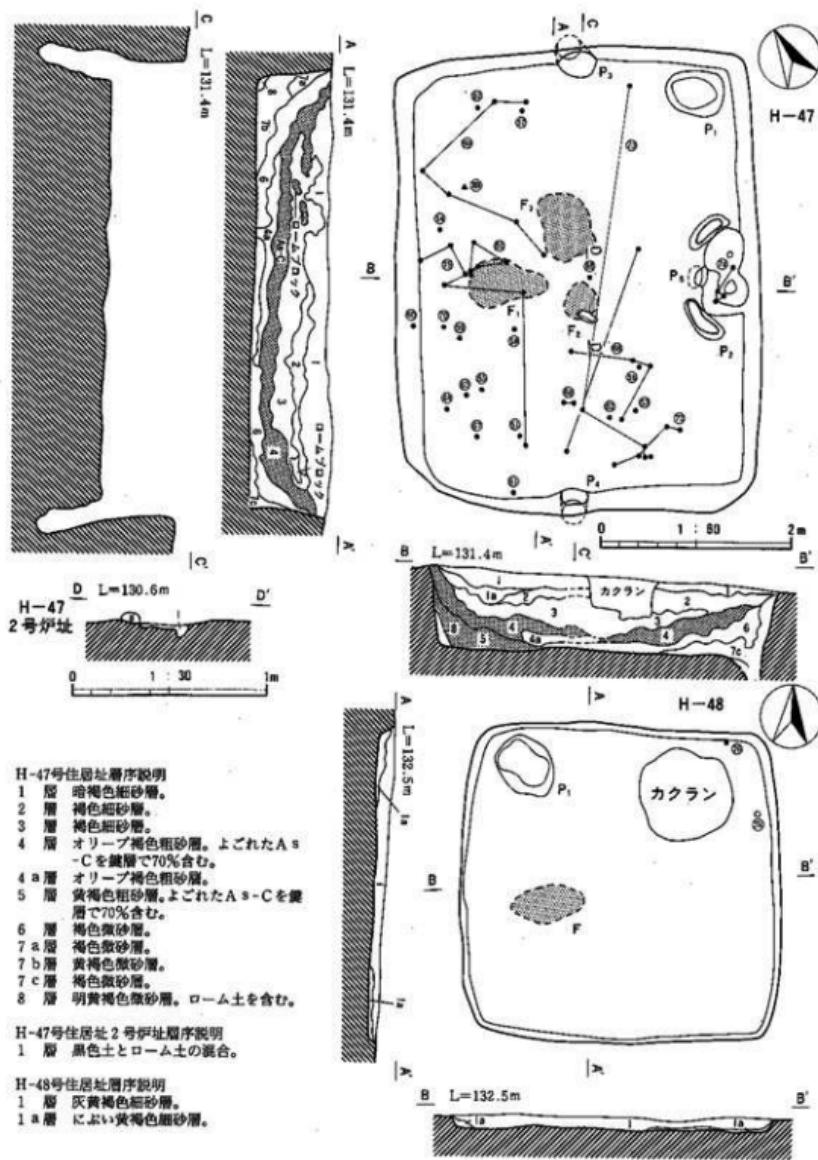


Fig.20 H-47・48号住居址

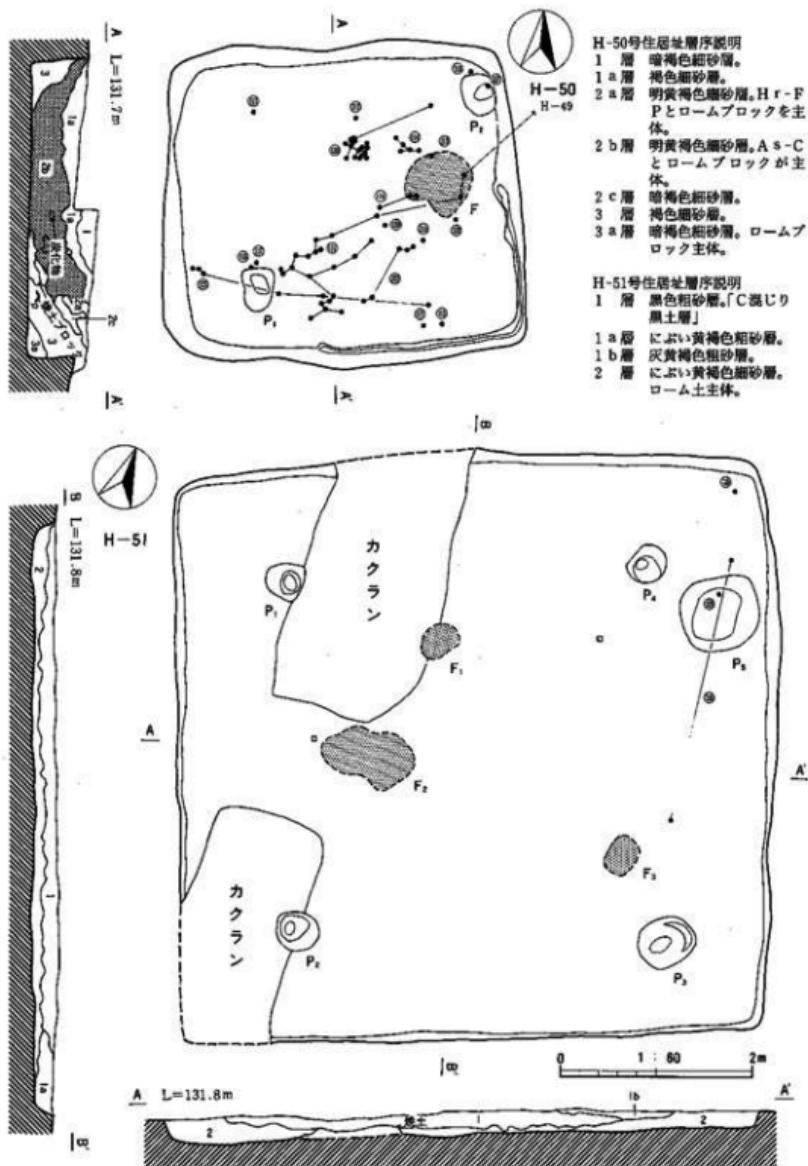
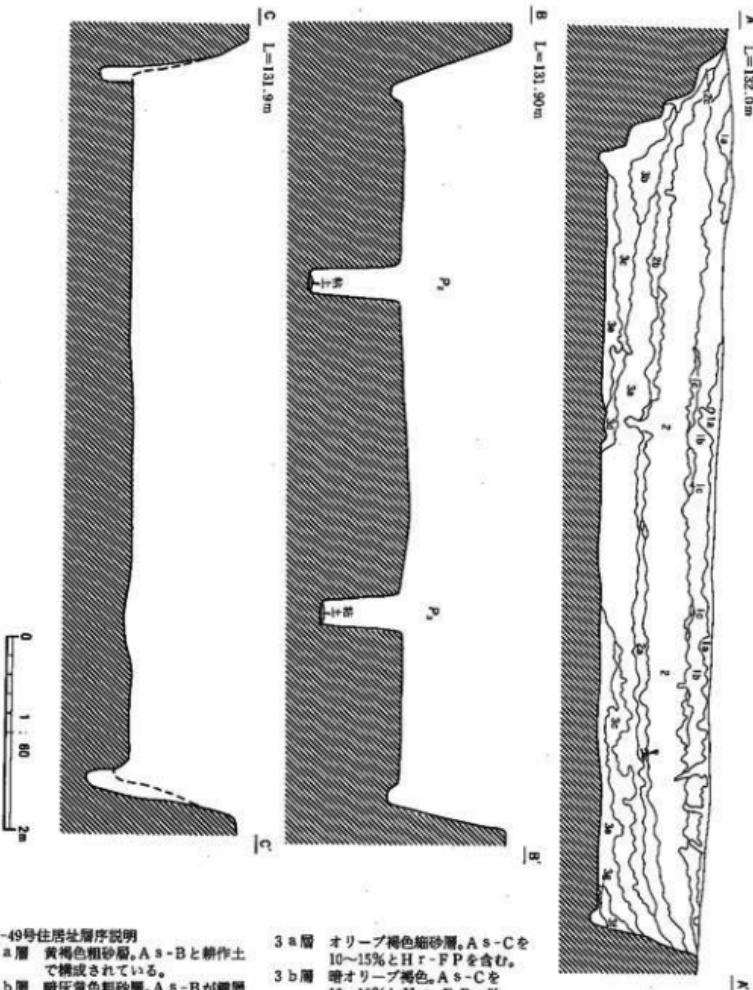


Fig.21 H-50・51号住居址 (1)



H-49号住居址層序説明

- 1 a層 黄褐色粗砂層。A s-Bと耕作土で構成されている。
- 1 b層 暗灰黄色粗砂層。A s-Bが鍵層で、主体を占める。
- 1 c層 黒褐色粗砂層。A s-B純層を含む。
- 2 層 黑褐色細砂層。「C混じり黒土層」
- 2 a層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを10~15%とH r-F Pを含む。
- 2 b層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを7~10%とH r-F Pを含む。

- 3 a層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを10~15%とH r-F Pを含む。
- 3 b層 暗オリーブ褐色。A s-Cを10~15%とH r-F P・粘土・ロームブロックを含む。
- 3 c層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを10~15%とH r-F P・粘土・脱炭物・ロームブロックを含む。
- 3 d層 オリーブ褐色細砂層。3 c層に比べ、ロームブロックが多い。
- 3 e層 オリーブ褐色細砂層。ローム

土主体。A s-Cを7~10%と
炭化物・焼土を含む。
3 f層 黄褐色細砂層。黒色土主体。
ロームブロックが30%に入る。
3 g層 明黄褐色細砂層。ローム土主
体。

Fig.22 H-49号住居址 (1)

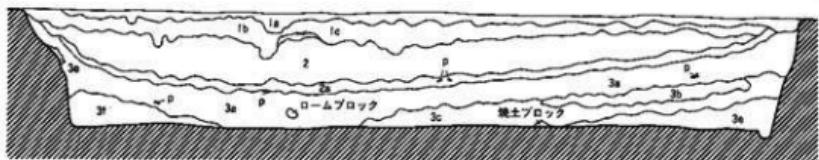
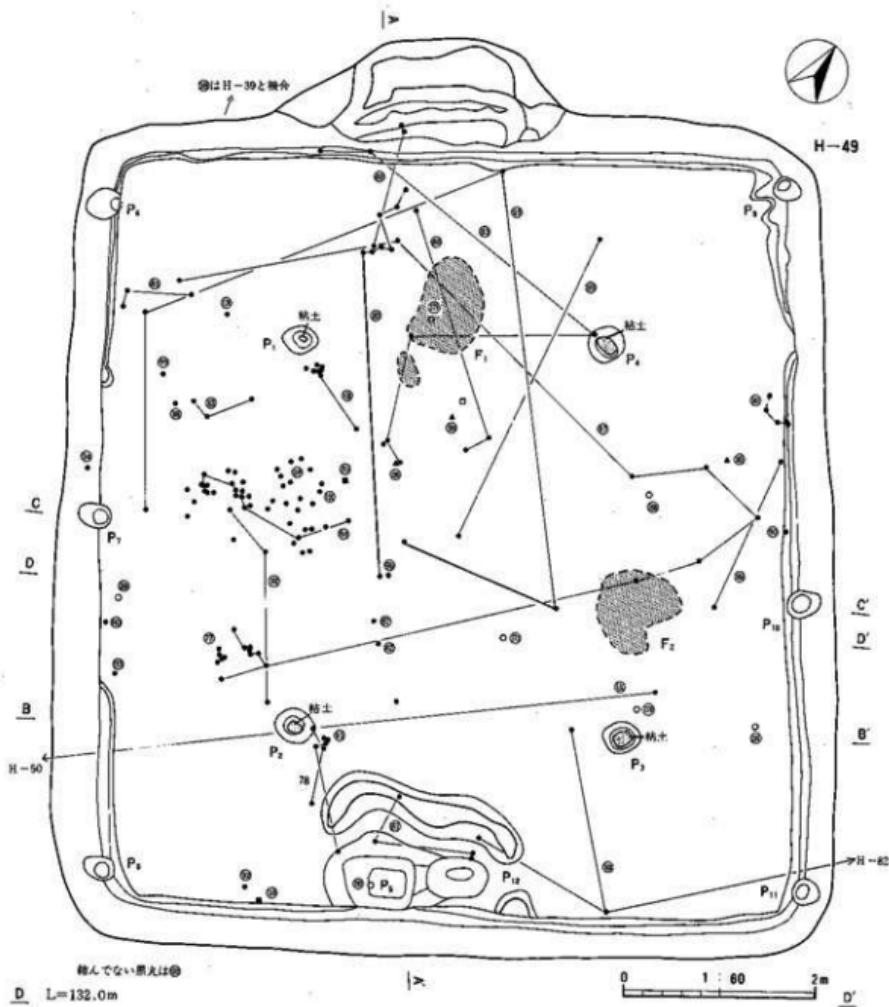
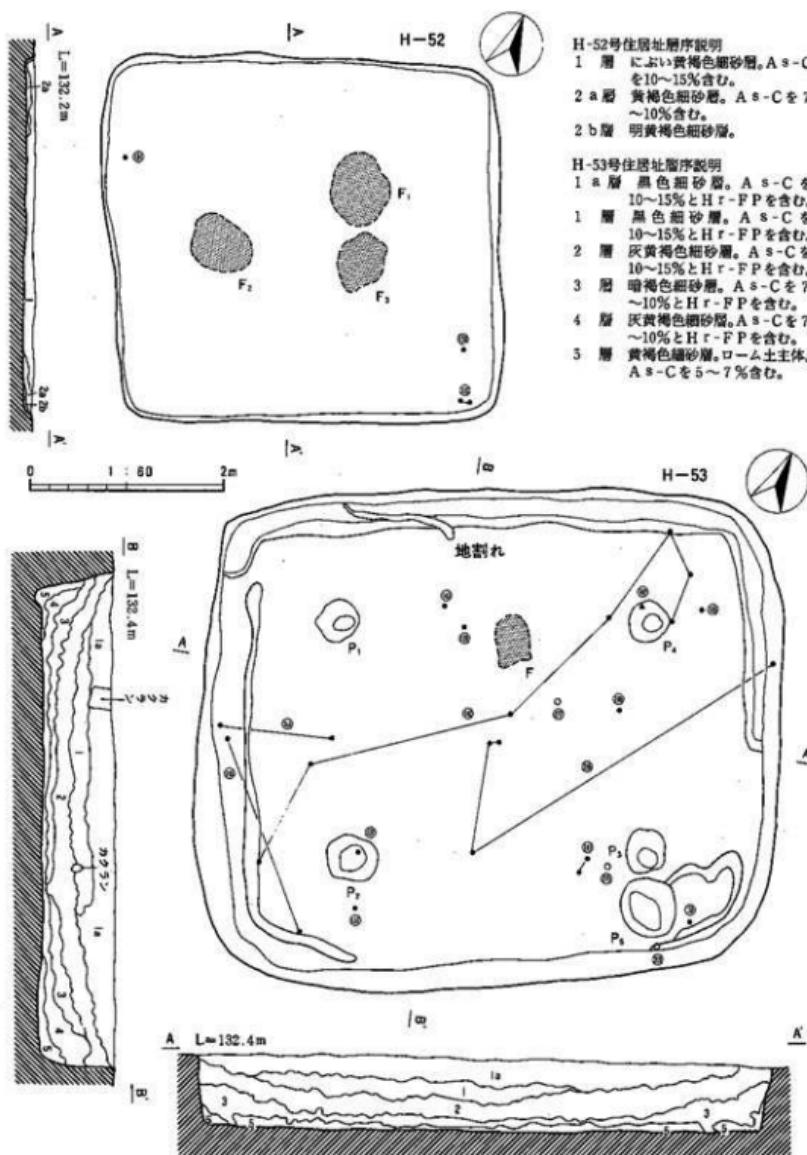
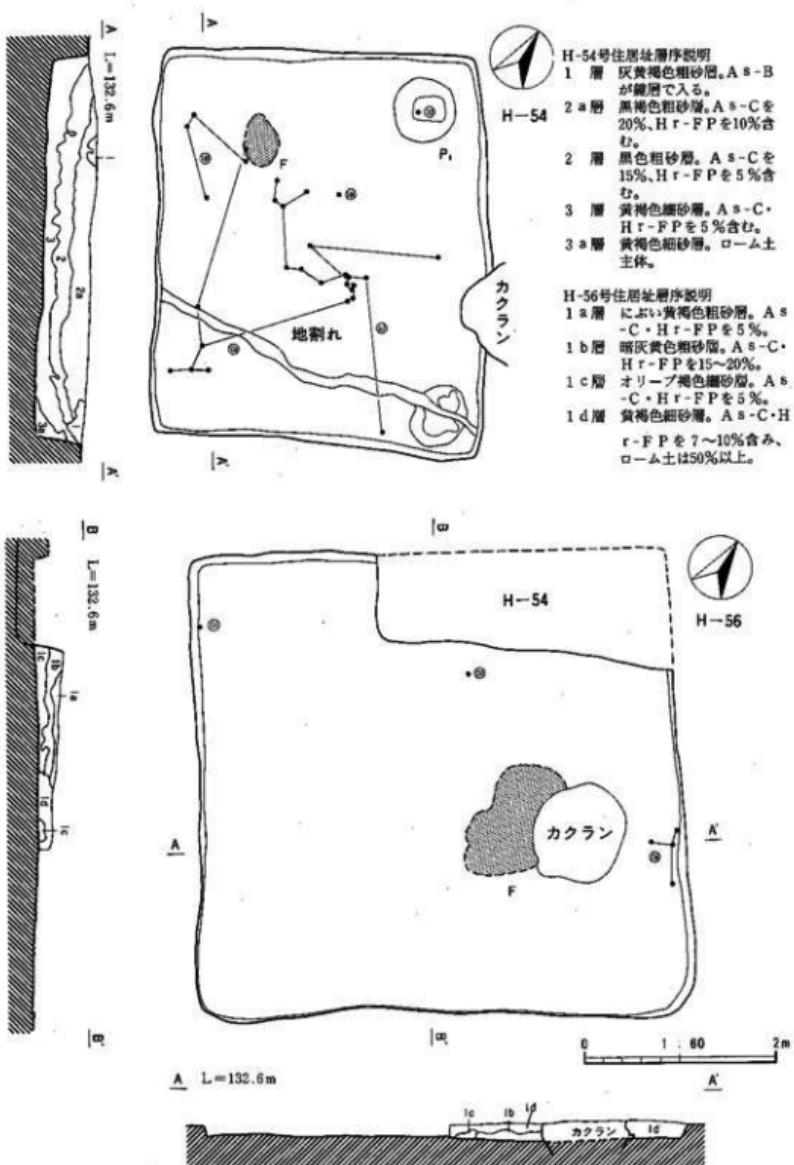


Fig.23 H-49号住居跡 (2)





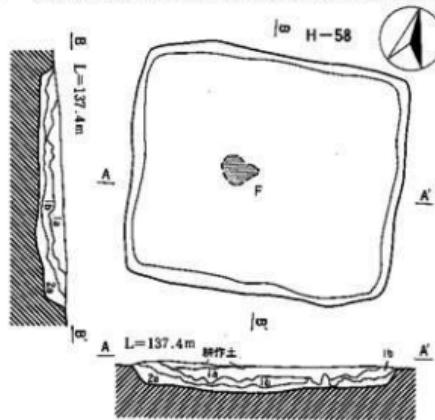
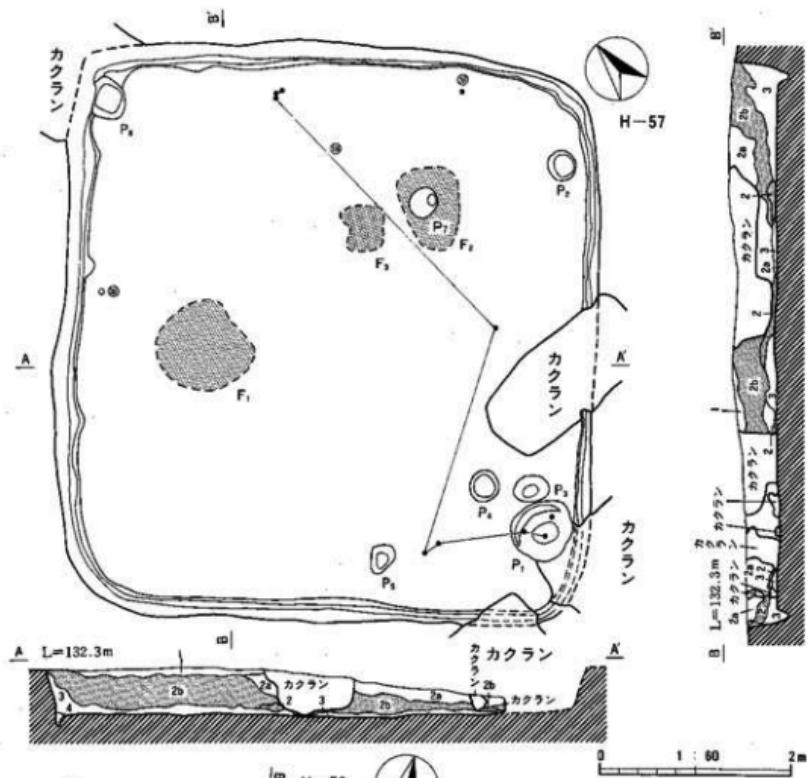


Fig.26 H-57・58号住居址

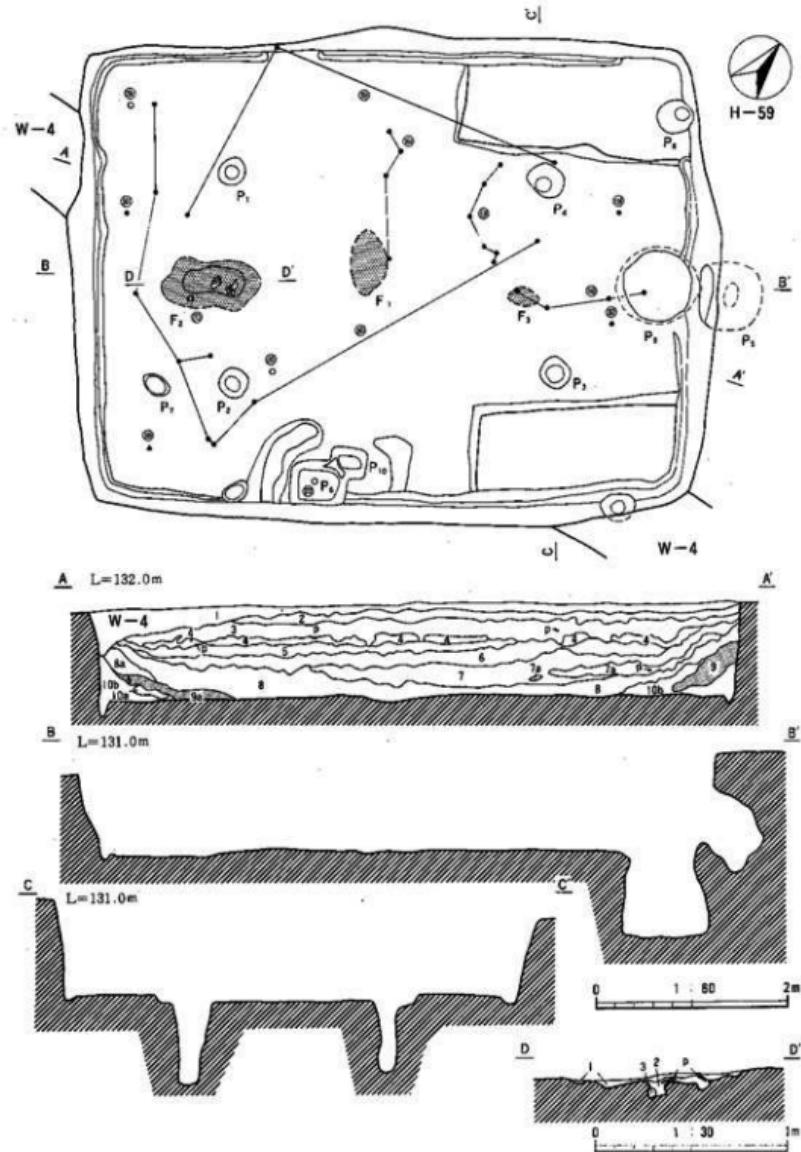
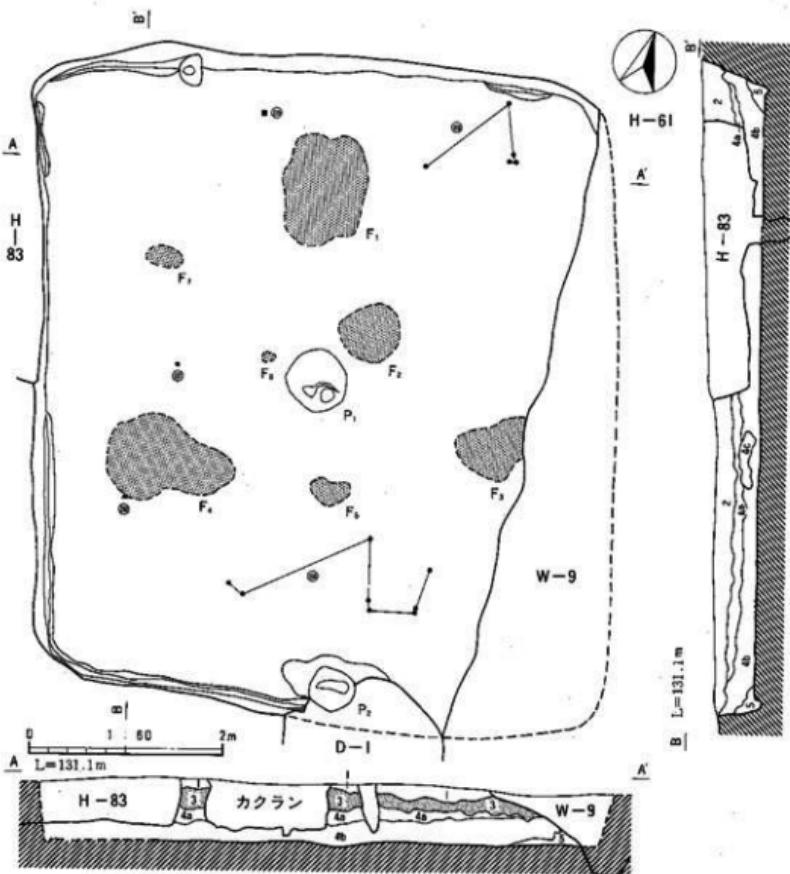


Fig.27 H-59号住居址

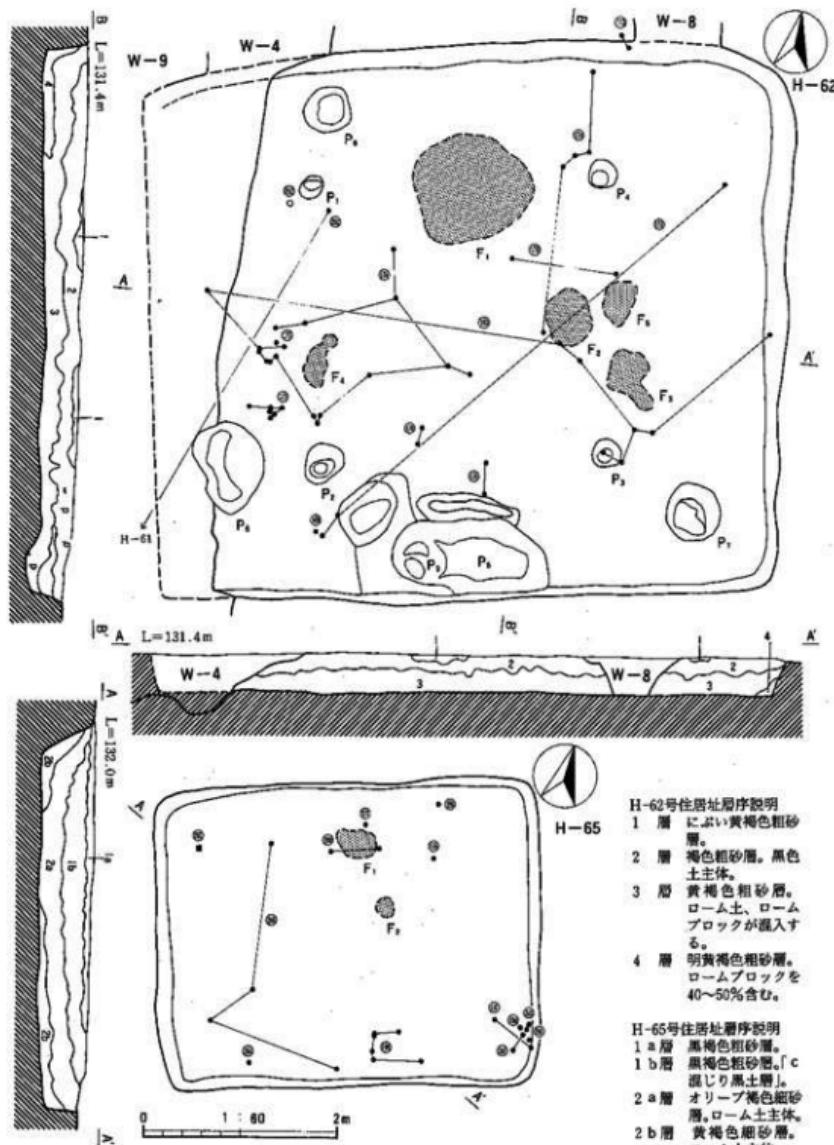


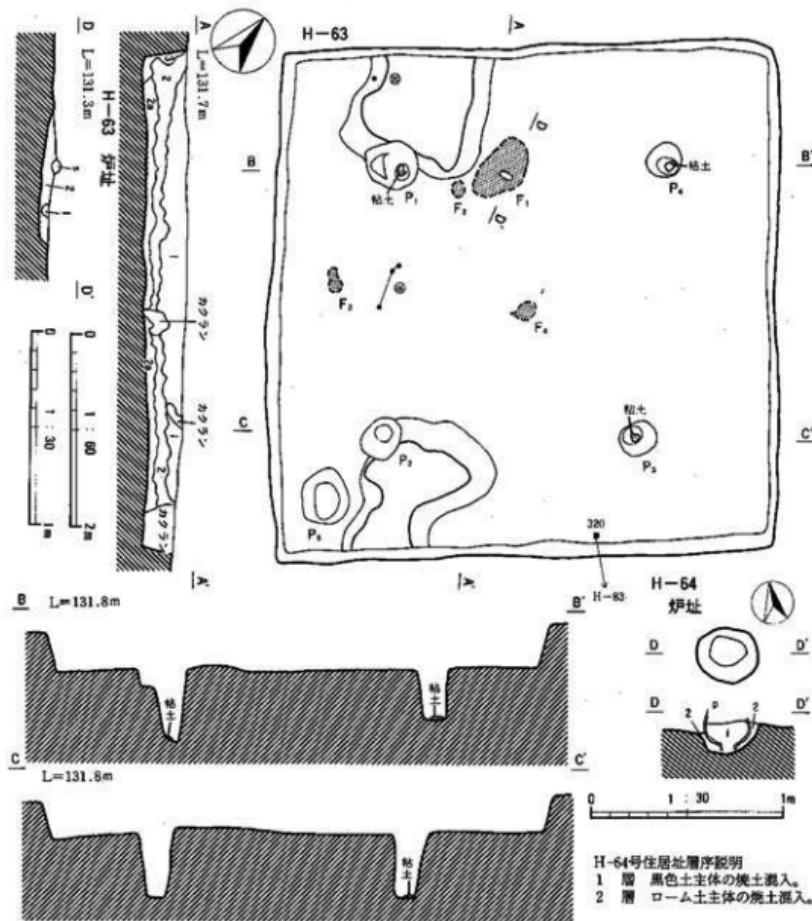
H-59号住居址層序説明
 1 層 黒褐色細砂層。黒色土主体。
 2 層 黒褐色細砂層。黒色土主体。
 3 層 暗オリーブ褐色細砂層。
 4 層 黃褐色細砂層。
 5 層 黑褐色細砂層。
 6 層 オリーブ褐色細砂層。
 7 層 黑褐色細砂層。
 7 a 層 黒褐色細砂層。A s-C の純層
 ブロックがみられる。
 8 層 オリーブ褐色細砂層。
 8 a 層 暗オリーブ褐色細砂層。

9 層 オリーブ褐色粗砂層。A s-C
 が鍵層。
 9 a 層 黄褐色粗砂層。A s-C 純層が
 鍵層。
 10 a 層 黑褐色細砂層。黒色土主体。
 10 b 層 オリーブ褐色細砂層。
 H-59号住居址 2号炉址層序説明
 1 層 黒ボクとローム土との混合。
 焼土粒子を若干含む。
 2 層 ローム土主体。
 3 層 黒ボク土主体。

H-61号住居址層序説明
 1 層 黒褐色細砂層。A s-B を
 20~30%含む。
 2 層 黒褐色細砂層。A s-C を 7
 ~10%含む。
 3 層 にぶい黄褐色細砂層。A s-C
 が鍵層で30~40%含む。
 4 a 層 灰黄褐色細砂層。
 4 b 層 黑褐色細砂層。均一。
 4 c 層 にぶい黄褐色微砂層。
 5 層 褐色微砂層。ローム土主体。

Fig.28 H-61号住居址





H-63号住居址層序説明

- 1 層 黒褐色細砂層。A s-C を10~15%含む。
- 2 層 褐色微砂層。A s-C を15~20%、ローム土を15~20%含む。
- 2 a 層 において黄褐色微砂層。ローム土を10%含む。
- 3 層 黄褐色微砂層。ローム土30%以上含む。

H-63号住居址炉址層序説明

- 1 層 焼けたロームブロック。
- 2 層 ローム土と黒色土との混合。

H-64号住居址層序説明

- 1 層 オリーブ褐色粗砂層。A s-B を鏡層で50%含む。
- 2 a 層 黒褐色細砂層。
- 2 b 層 暗オリーブ褐色細砂層。
- 2 c 層 黒褐色細砂層。H r-F P を5%、A s-C を10%含む。
- 3 層 オリーブ褐色細砂層。A s-C を7%含み、ローム土に黒色土が混入する。
- 3 a 層 黑褐色細砂層。A s-C を少し含む。
- 3 b 層 褐色細砂層。ローム土と黒色土の混合。
- 4 層 明黄褐色細砂層。ソフトローム土主体。

Fig.30 H-63号住居址

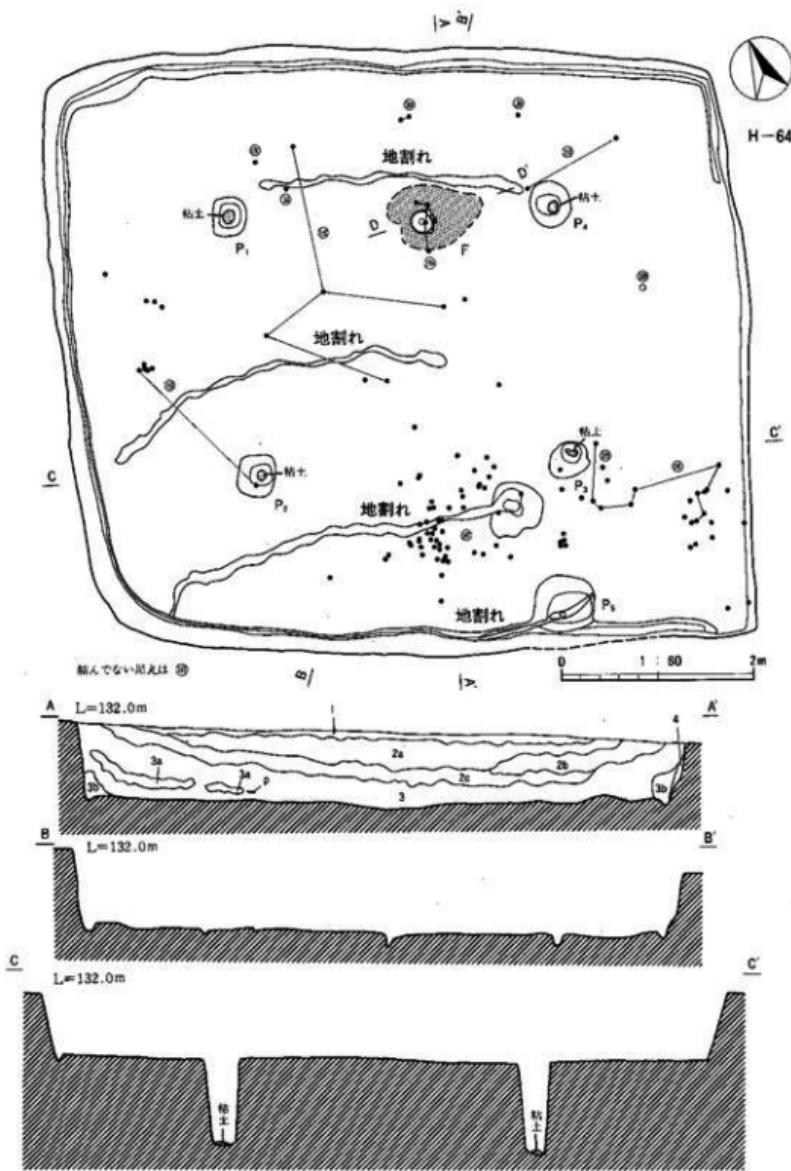


Fig.31 H-64号住居址

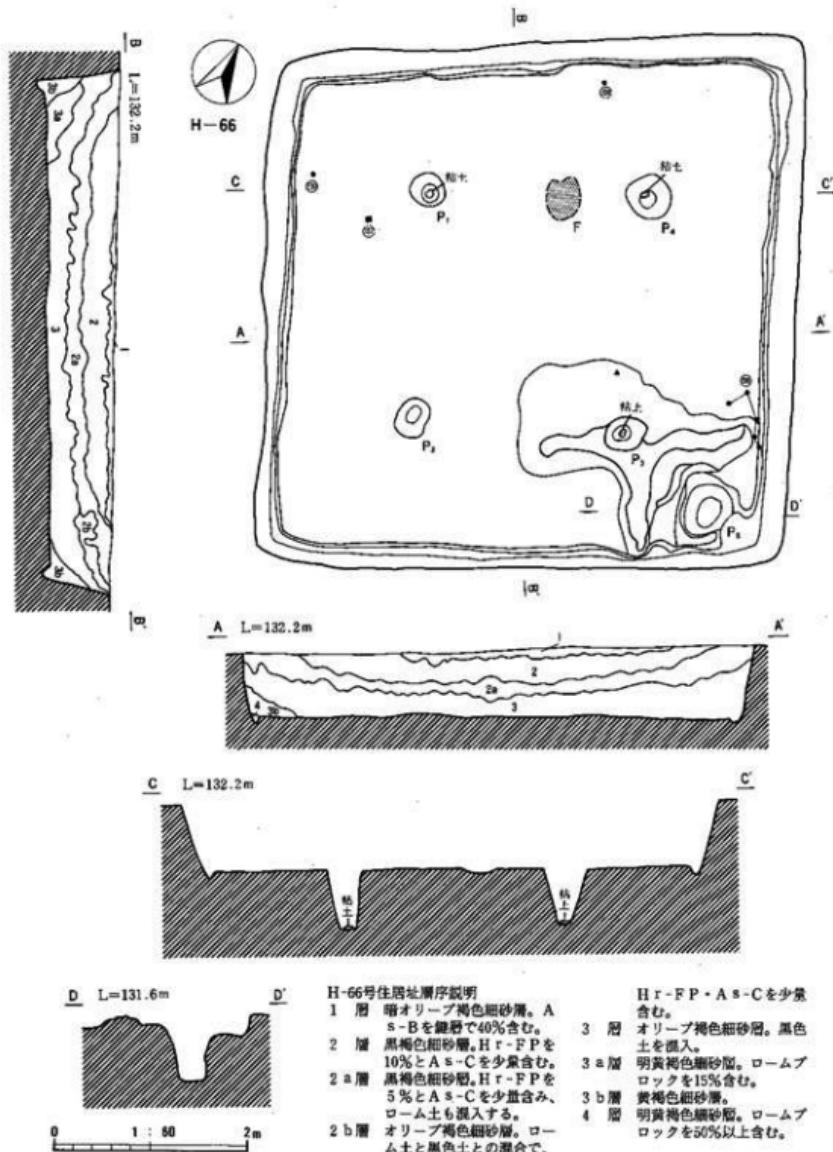
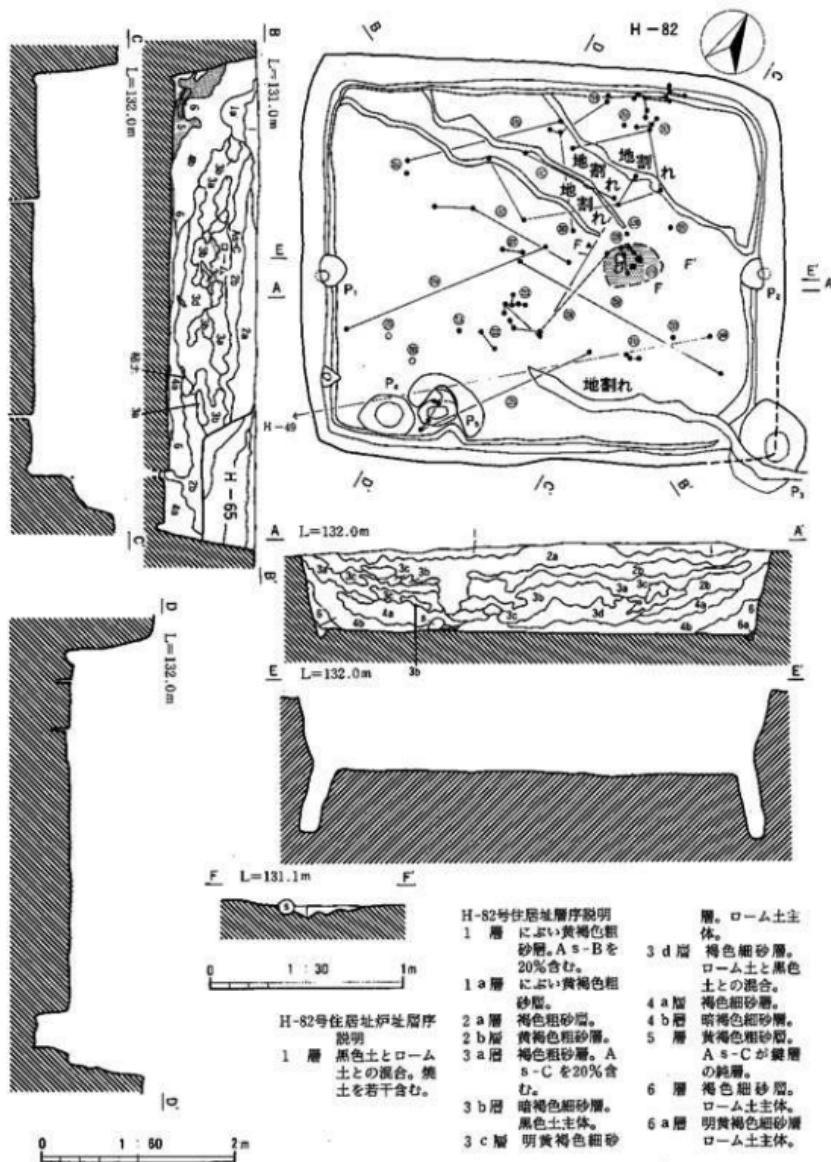


Fig.32 H-66号住居址



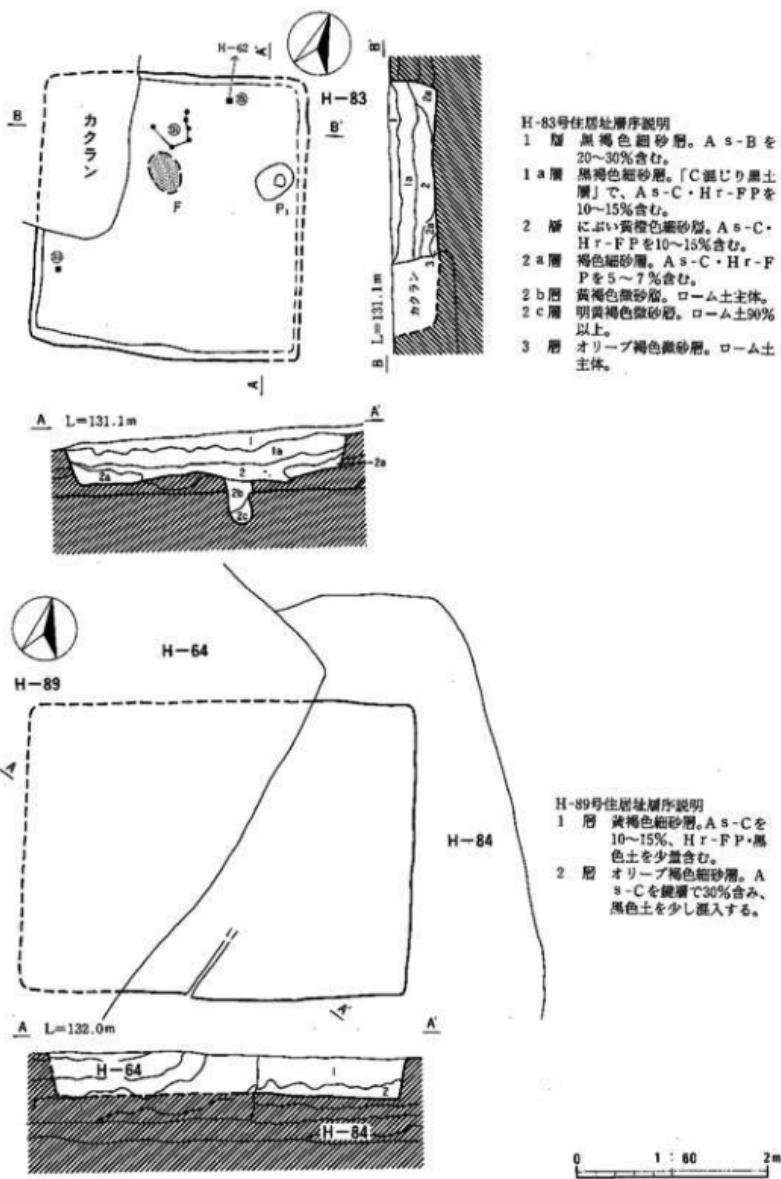
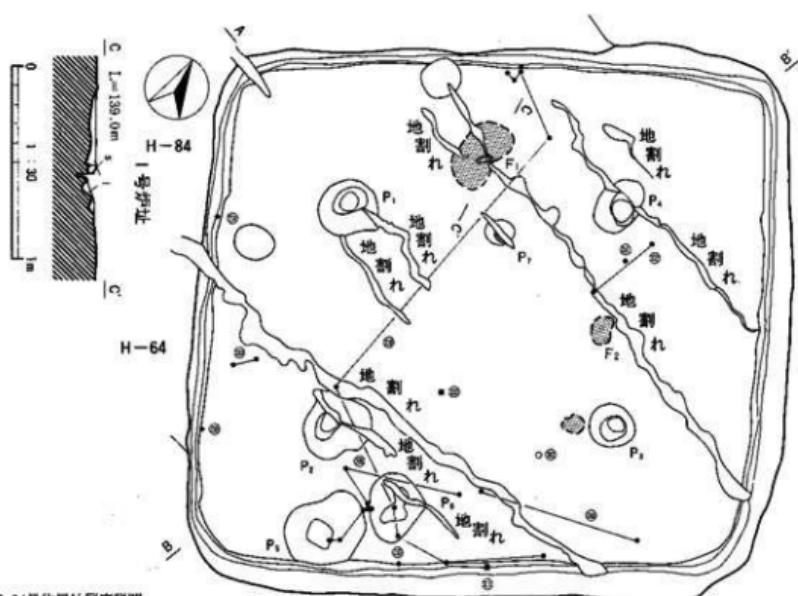


Fig.34 H-83・89号住居址

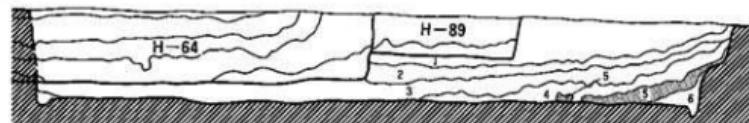


H-84号住居址層序説明

- 1 層 黒色土主体。焼土粒子を含む。

A L=132.0m

0 1 : 60 2m



B L=131.9m



H-84号住居址層序説明

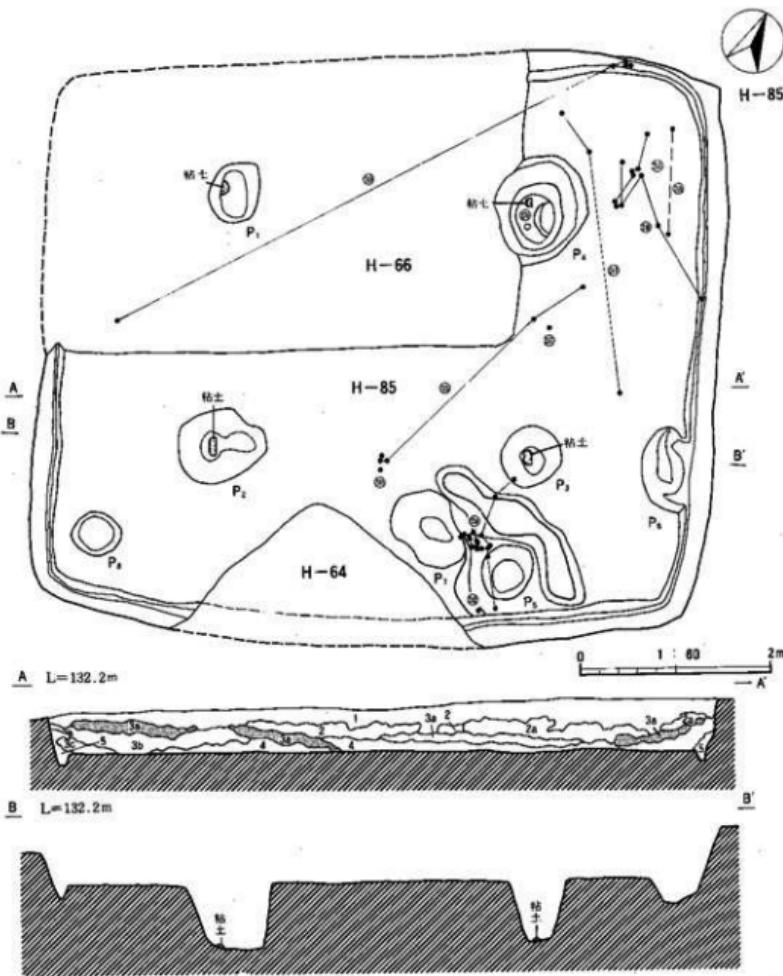
- 1 層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを10%含み、ロームブロックが少し混じる。
- 2 層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを7%含み、ロームブロックが7%混じる。
- 3 層 褐色微砂層。A s-Cが10%、黒色土が10%、ロームブロックが10%混入する。

4 層 黄褐色微砂層。ローム土主体。A s-Cを少量含み、ロームブロックが15%、黒色土も少し混じる。

5 層 暗褐色粗砂層。A s-Cが鍵層で20~30%含む。

6 層 にい黄褐色微砂層。ローム土主体。ロームブロック・黒色土も少し混じる。

Fig.35 H-84号住居址

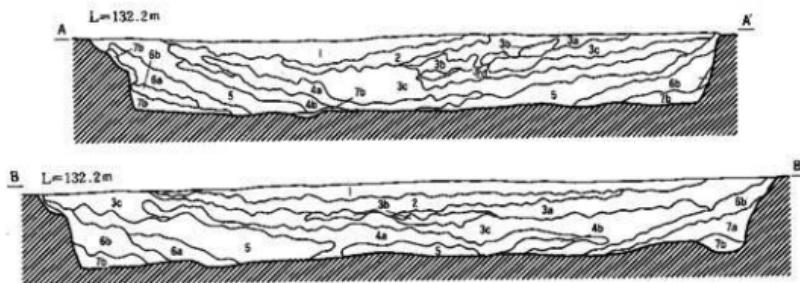
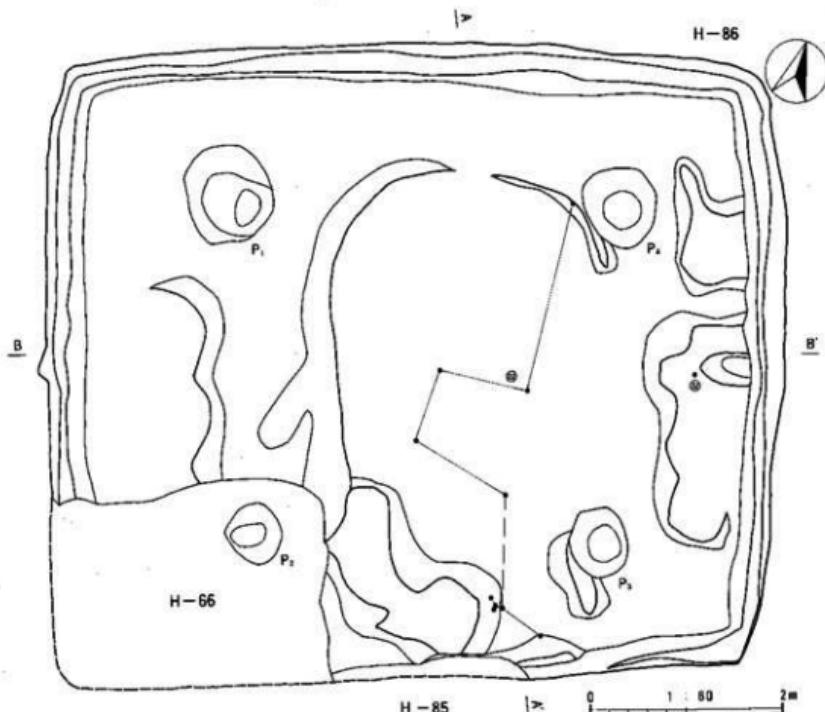


H-85号住居址層序説明

- 1 層 にぶい黄褐色細砂層。A s-Cを15%、H r-F P+ 黒色土も少量含む。
- 2 層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを7~10%、ロームブロックも少し含む。
- 2a 層 オリーブ褐色細砂層。A s-Cを10%、ロームブロックを7%含む。

- 3a 層 黒褐色細砂層。A s-Cが総層で30%含む。
- 3b 層 にぶい黄褐色細砂層。A s-Cを15%含む。
- 3c 層 黒褐色細砂層。A s-Cを10%含む。
- 4 層 オリーブ褐色。黒色土とローム土の混合。A s-Cを5~7%、ロームブロックも少し含む。
- 5 層 黄褐色細砂層。ソフトローム土主体。ロームブロックが少し混じる。

Fig.36 H-85号住居址



H-86号住居址層序説明

- 1 層 黄褐色細砂層。
- 2 層 明黄褐色細砂層。ロームブロックが30%混入する。
- 3 a 層 オリーブ褐色細砂層。
- 3 b 層 暗オリーブ褐色細砂層。黑色土。

3 c 層 黄褐色細砂層。ロームブロックを40~50%含む。

- 3 d 層 オリーブ褐色細砂層。黑色土。
- 4 a 層 暗オリーブ褐色細砂層。黑色土。
- 4 b 層 オリーブ褐色細砂層。
- 5 層 明黄褐色細砂層。ロームブ

ロックを40%含む。

- 6 a 層 オリーブ褐色細砂層。
- 6 b 層 黒褐色細砂層。黑色土。
- 7 a 層 黄褐色細砂層。
- 7 b 層 明黄褐色細砂層。ロームブロックを60%以上含む。

Fig.37 H-86号住居址

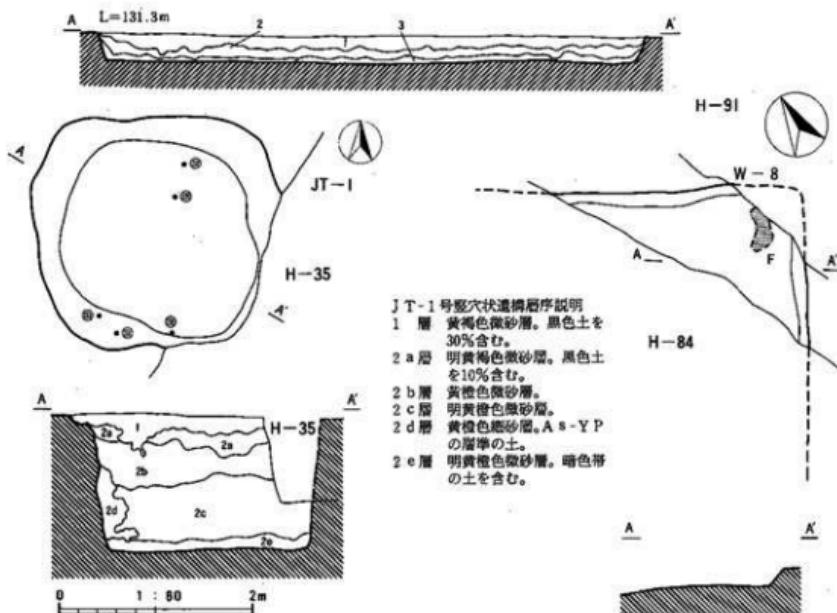
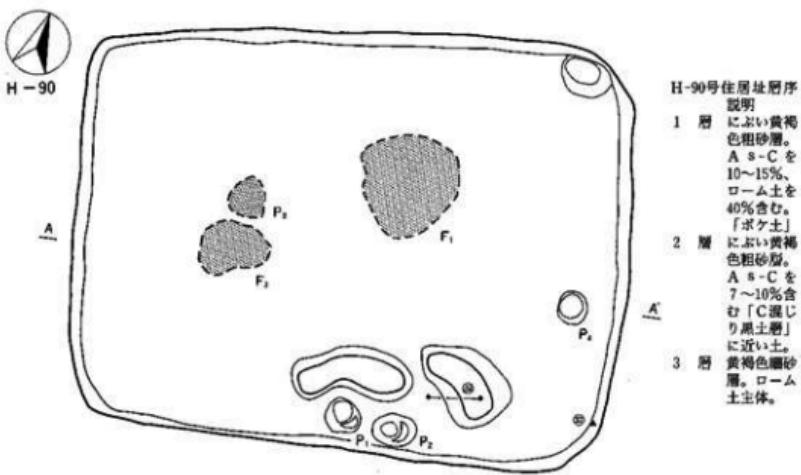


Fig.38 H-90・91号住居址、JT-1号竪穴状遺構

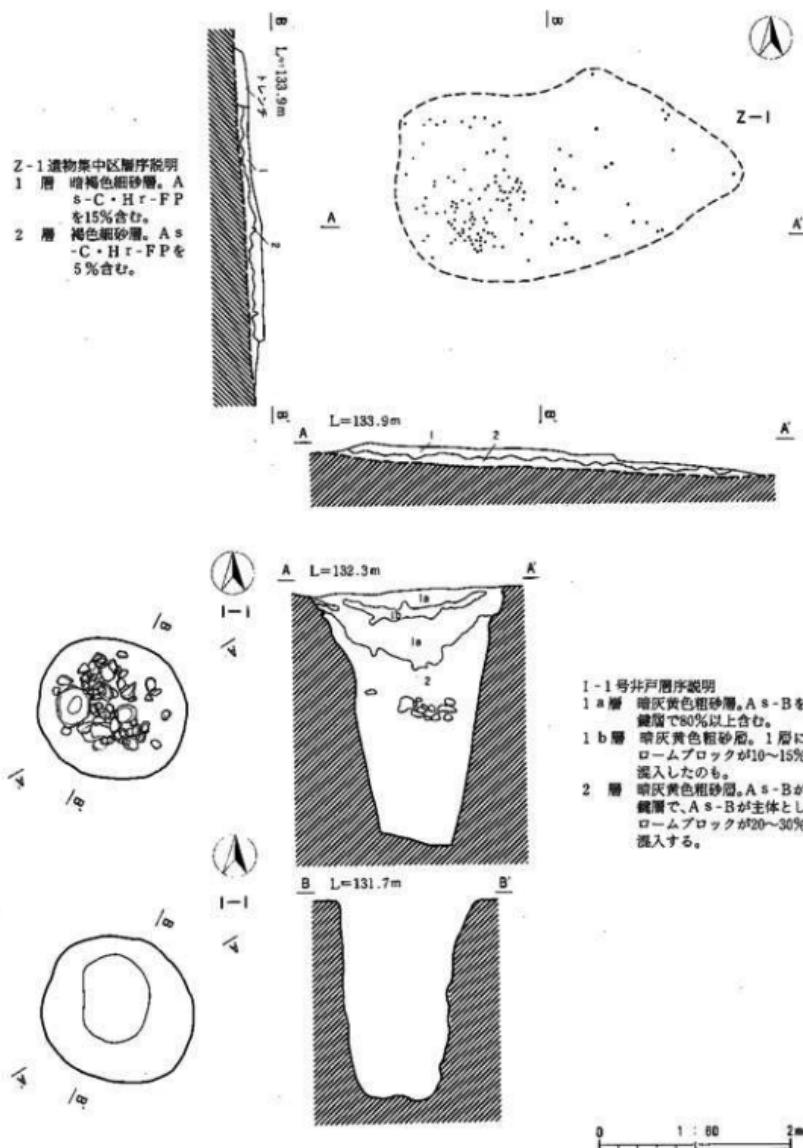


Fig.39 Z-1 遺物集中区、I-1号井戸

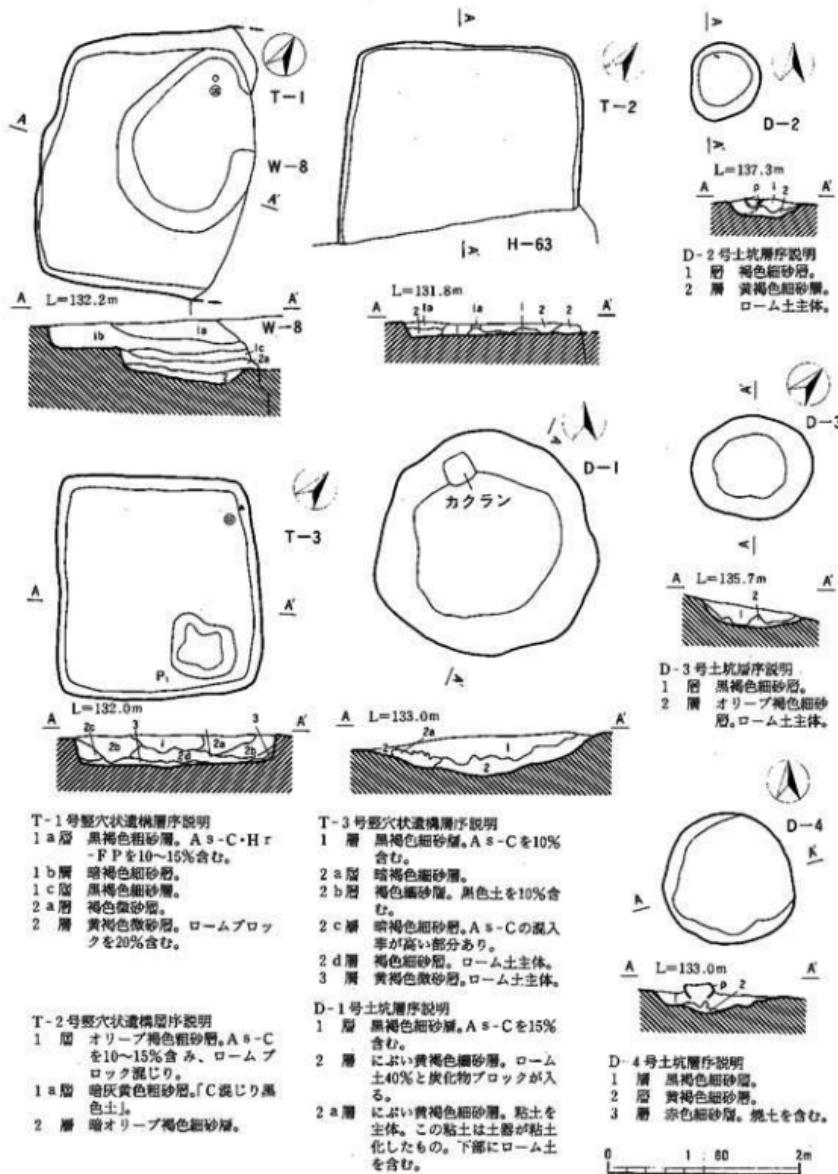
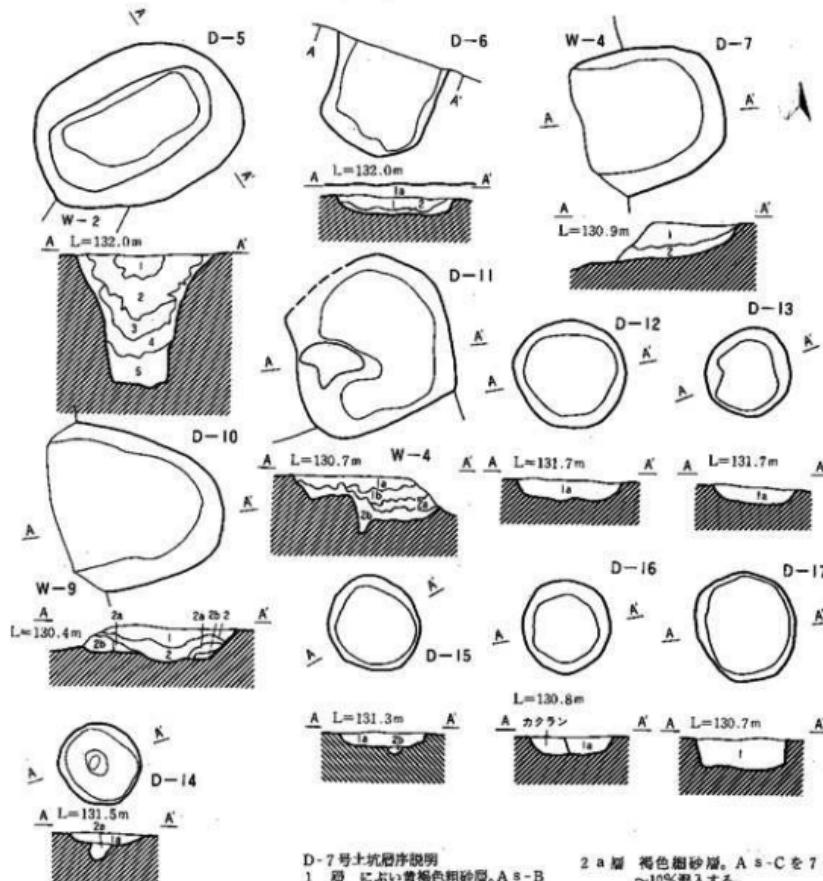


Fig.40 T-1～3号竪穴状遺構、D-1～4号土坑



D-5号土坑層序説明

1 層 黒褐色細砂層。A s-C を 15~20%含む。

2 層 黒褐色細砂層。A s-C を20%含む。

3 層 灰黒褐色細砂層。

4 層 オリーブ褐色細砂層

5 層 黄褐色微砂層。ローム土主体。

D-6号土坑層序説明

1 a 層 棕褐色細砂層。A s-C 15%含む。

1 層 にぶい褐色細砂層。A s-C 20~30%含む。

2 層 オリーブ褐色細砂層。A s-C を10%混入する。

D-7号土坑層序説明

1 層 にぶい黄褐色粗砂層。A s-B が鏡面で30%入る。

2 層 黄褐色粗砂層。A s-B が 10%、ローム土が20%混じる。

D-10号土坑層序説明

1 層 オリーブ褐色細砂層。A s-B が20%入る。

2 層 黄褐色細砂層。A s-C 10%含む。

2 a 層 黄褐色微砂層。ローム土主体。

2 b 層 オリーブ褐色微砂層。均一的。

D-11号土坑層序説明

1 a 層 にぶい黄褐色細砂層。A s-B を40~50%含む。

1 b 層 褐色細砂層。A s-B を 40~50%含む。

2 a 層 棕褐色細砂層。A s-C を 7~10%混入する。

2 b 層 黄褐色細砂層。

D-12~17号土坑層序説明

1 層 哈褐色粗砂層。A s-B が鏡面で70%含む。

1 a 層 黑褐色細砂層。A s-B が30%含む。

2 a 層 哈褐色細砂層。A s-C 20%含む。

2 b 層 棕褐色細砂層。

Fig.41 D-5 ~ 7 · 10~17号土坑

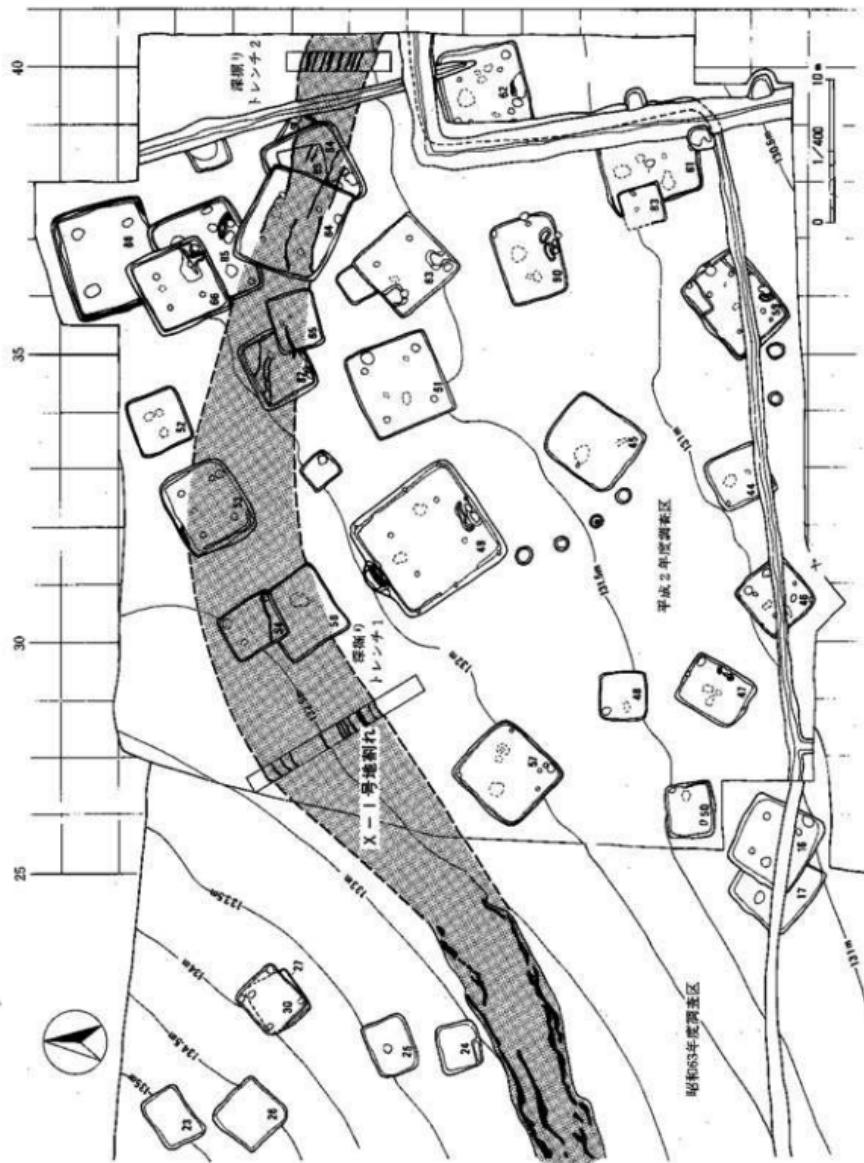
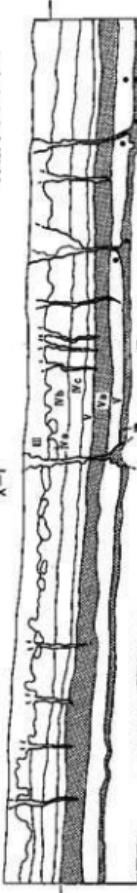


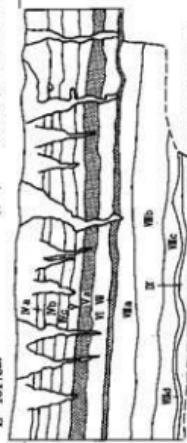
Fig.42 X-1号地割れ

L=132.0m

深掘りトレンチ 1



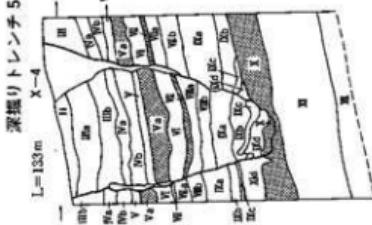
深掘りトレンチ 2



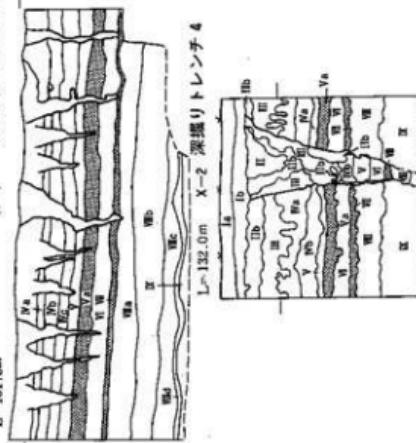
深掘りトレンチ 3



深掘りトレンチ 4



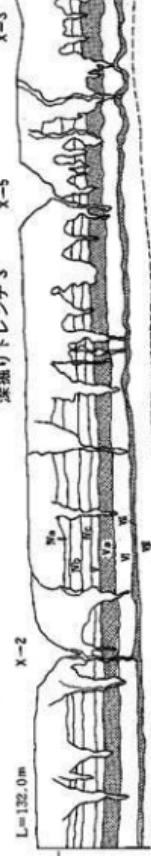
深掘りトレンチ 5



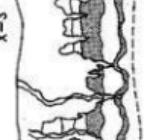
X-1～5 号地割れの断面図
I a 層 黒褐色粗砂層。A ~ B < 50
%以上含む。
I b 層 黑褐色粗砂層。A ~ B、A
~ C、H ~ F 各層を含む。
II a 層 黒色細砂層。A ~ C、H ~
F (20mm) を含む。
II b 層 黑灰色細砂層。

III 層 淡褐色細砂層。透色黑粘土層。ソフトローム層。細文時
代植物包含層。
IV a 層 明黄褐色砂層。ハードローム層。A s - Y P を 7 ~ 10%、
A s - S P を 5% 以上含む。
IV b 層 明黄褐色砂層。ハードローム層。A s - Y P 5%、A
s - S P 10% を含む。
V 層 明黄褐色砂層。ハードローム層。A s - B P をブロック
で 20% ~ 30% 程度含む。
VI 層 明黄褐色砂層。ハードローム層。A s - B P をブロック
で 10 ~ 15% 程度含む。
VII 層 明黄褐色砂層。ハードローム層。A T の含有量が極大。
VIII 層 明黄褐色粘土層。色調で a ~ b の 2 層間に分類できる。
IX 層 明黄褐色粘土層。a ~ d の 4 層間に分類できる。
X 層 明黄褐色粘土層。H r - H P。a ~ c の 3 層間に分類でき
る。
XI 層 褐色粘土層。マンガン・鉻分塊を含む。
XII 層 青灰褐色砂層。汚染によって発達される。黒泥炭層。

深掘りトレンチ 3



深掘りトレンチ 4



深掘りトレンチ 5

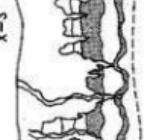


Fig.43 X-1～5 号地割れ

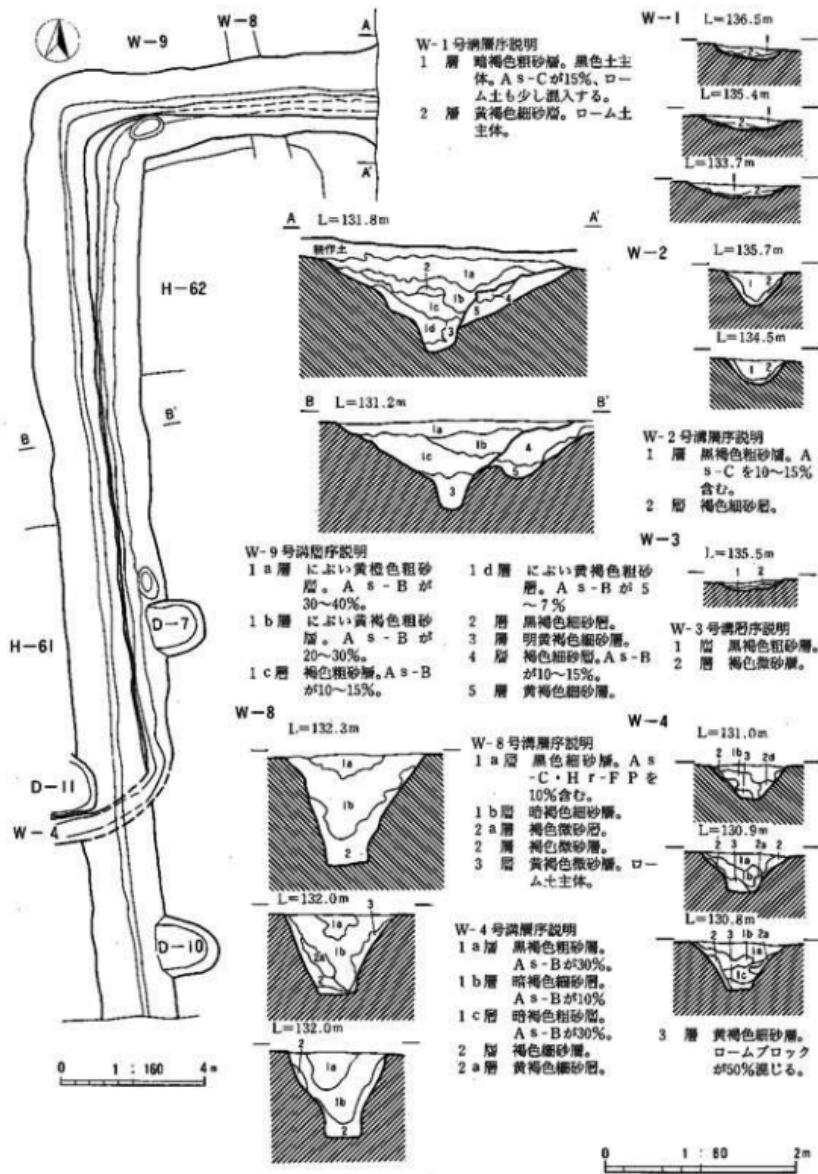


Fig.44 W-1~4・8・9号溝

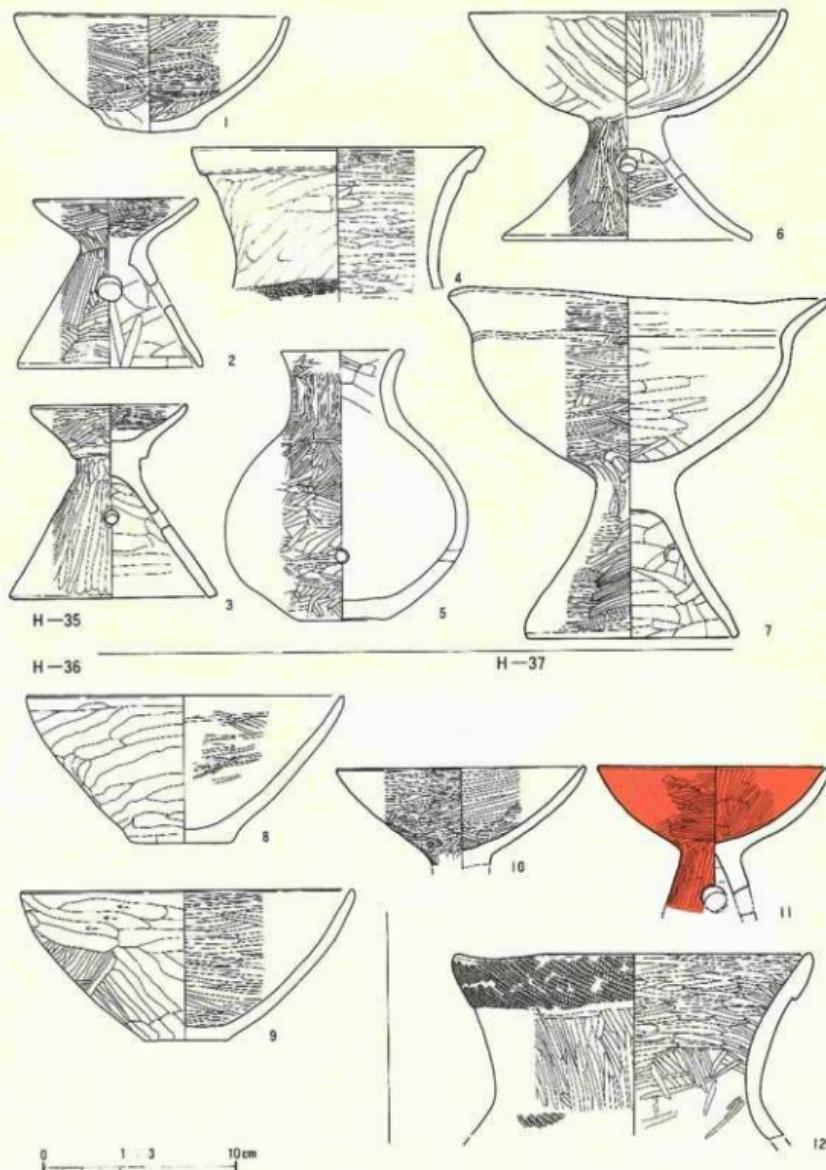


Fig. 45 H-35~37号住居址出土の土器



Fig. 46 II-38~40・42・43号住居址出土の土器

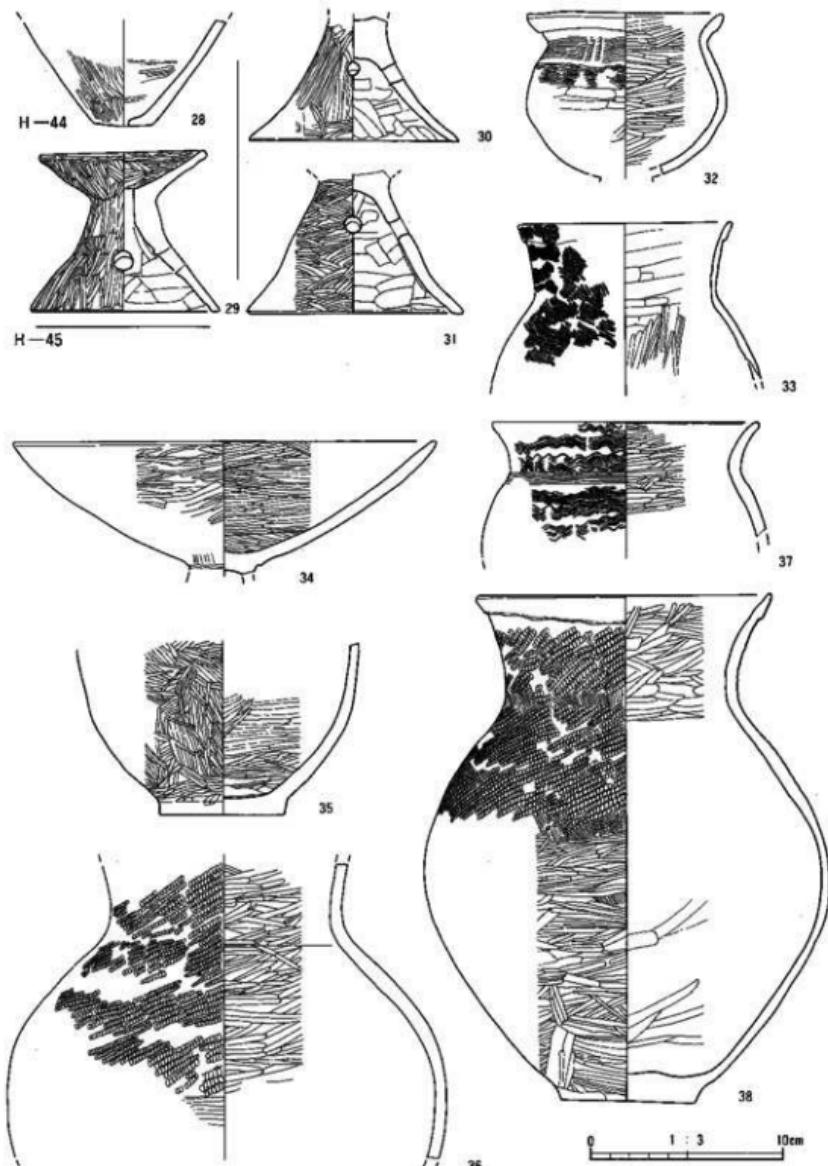


Fig. 47 H-44・45号住居址出土の土器

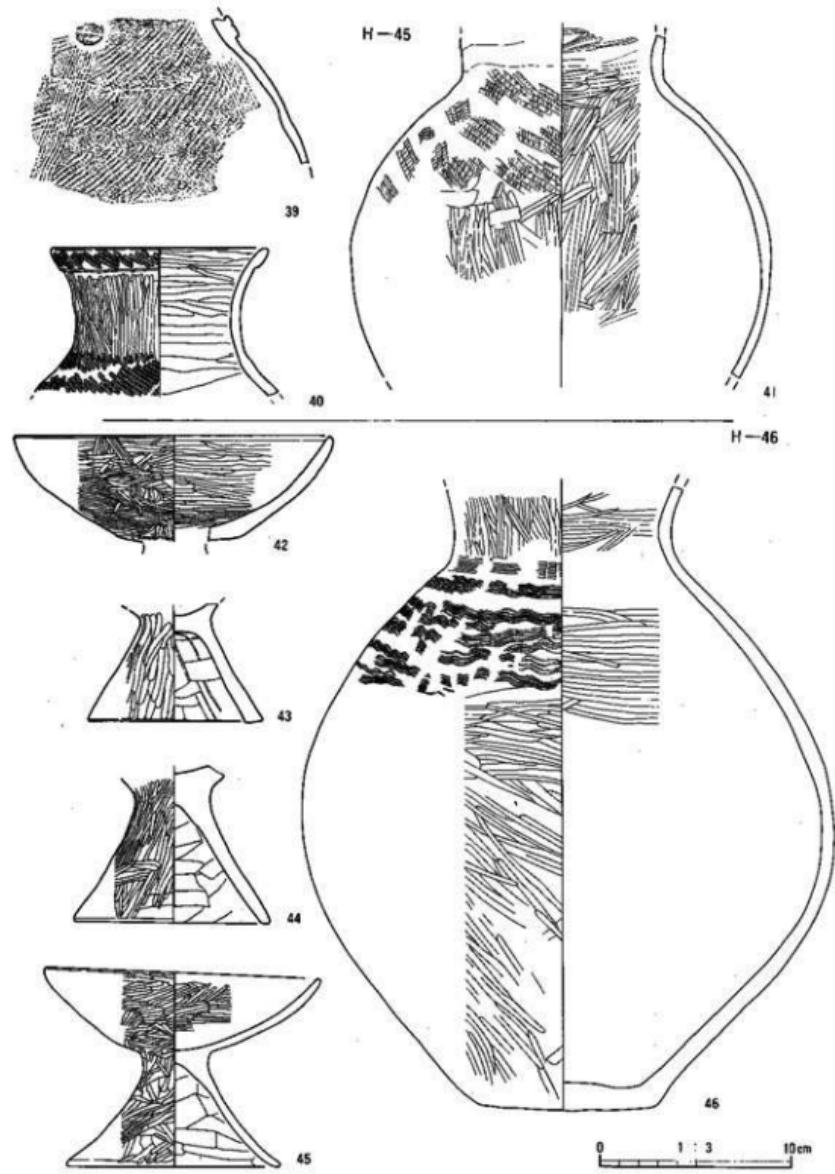


Fig. 48 H-45・46号住居址出土の土器

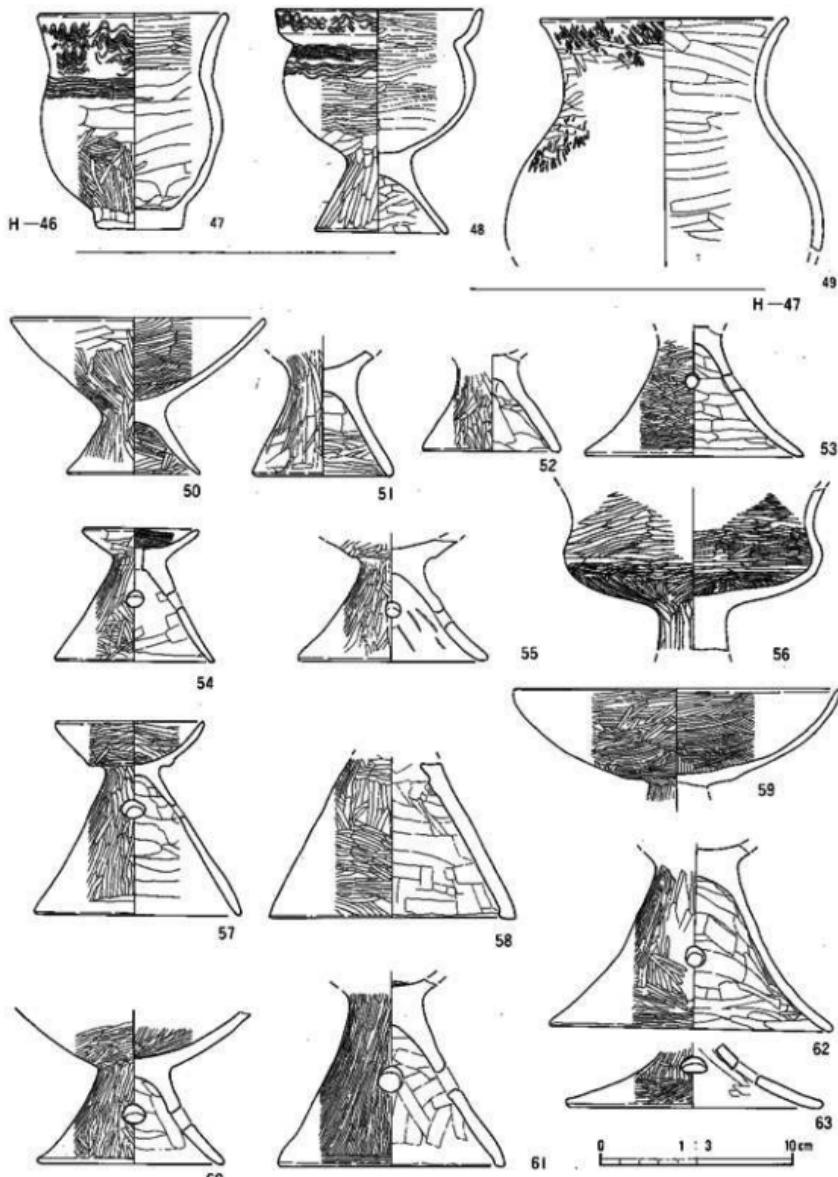


Fig. 49 H-46・47号住居址出土の土器

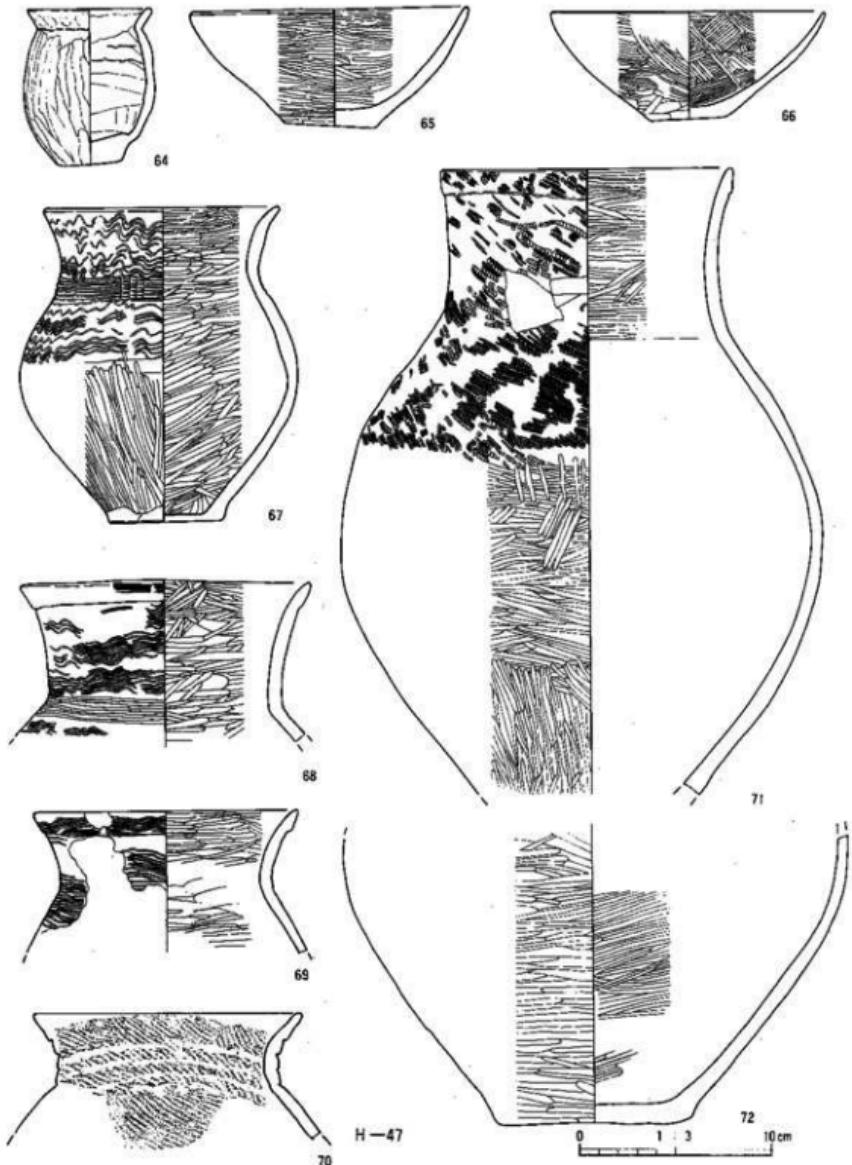


Fig. 50 H-47号住居址出土の土器

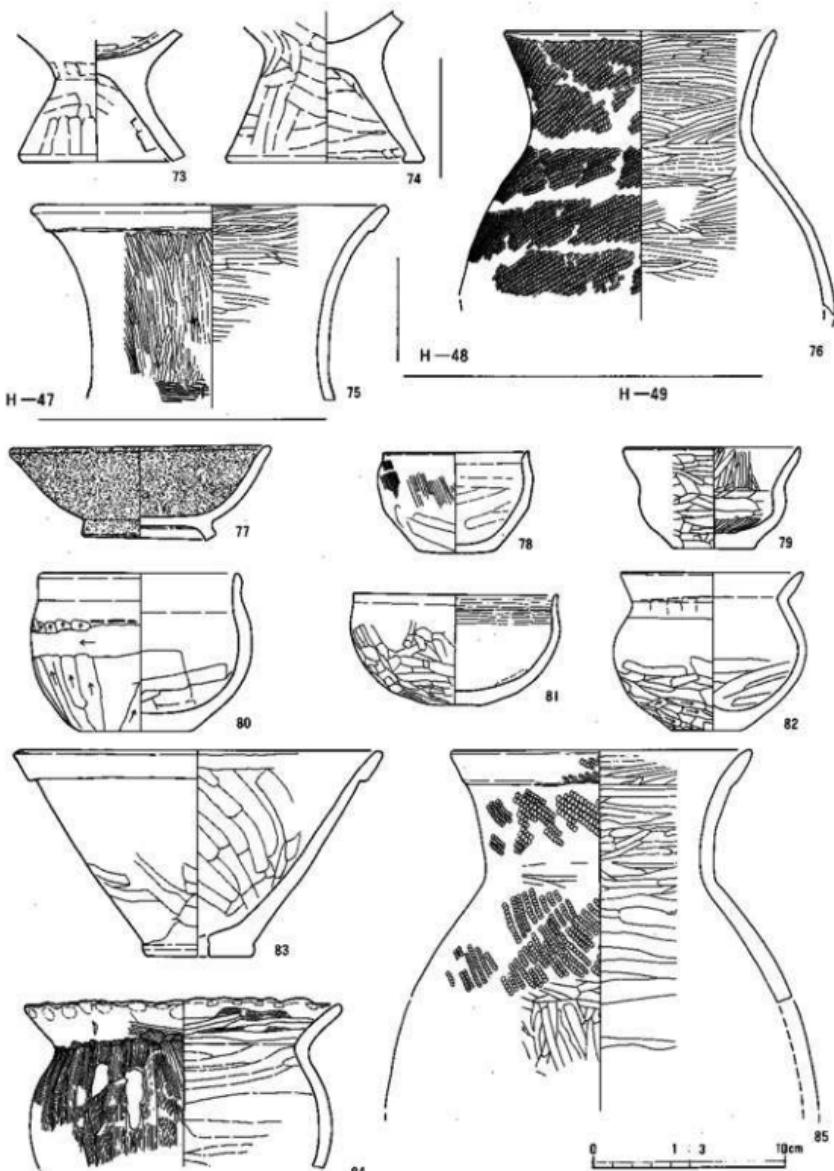


Fig. 51 H-47~49号住居址出土の土器

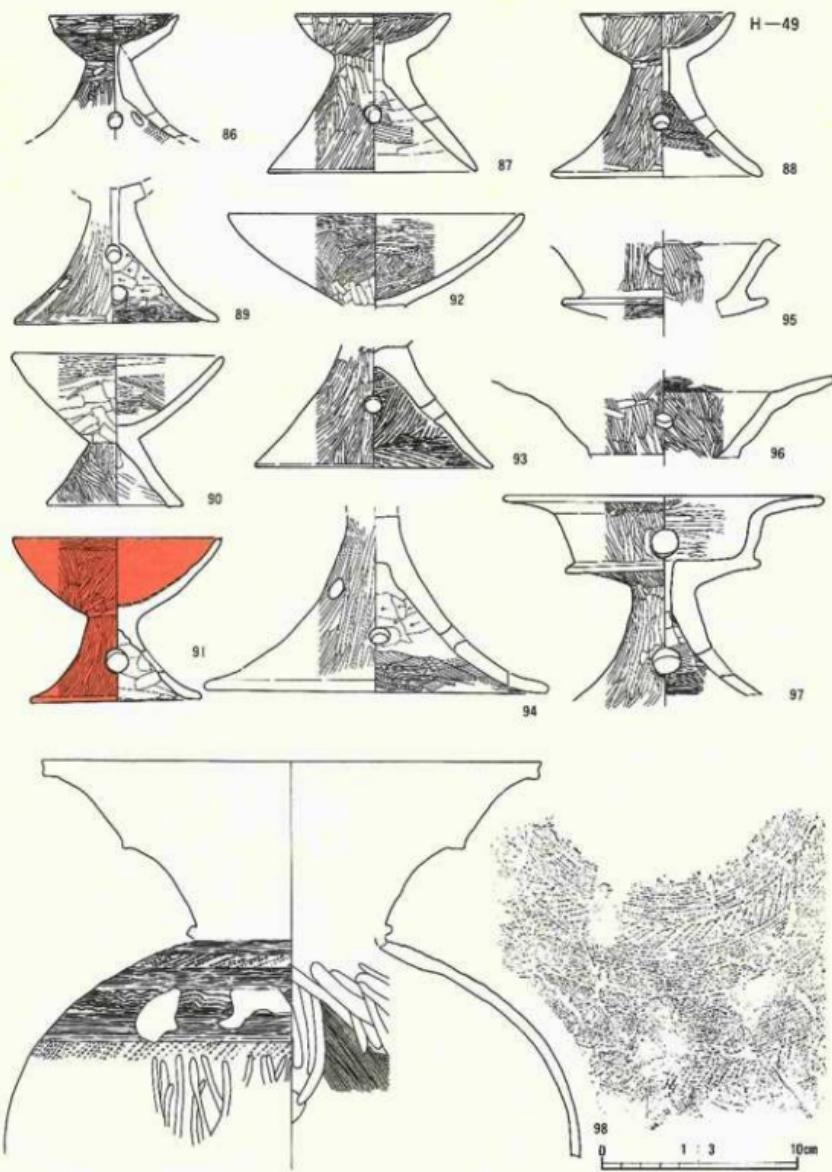


Fig. 52 H-49号住居址出土の土器

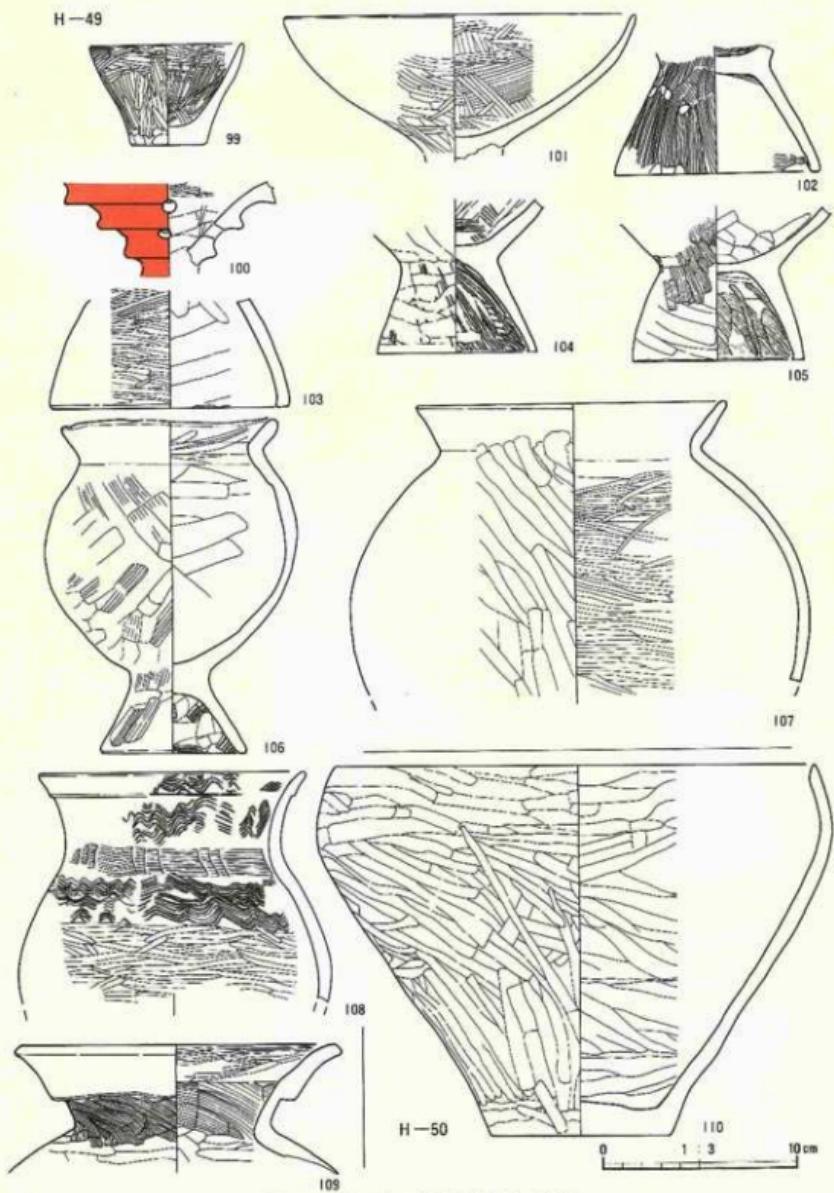


Fig. 53 H-49・50号住居址出土の土器

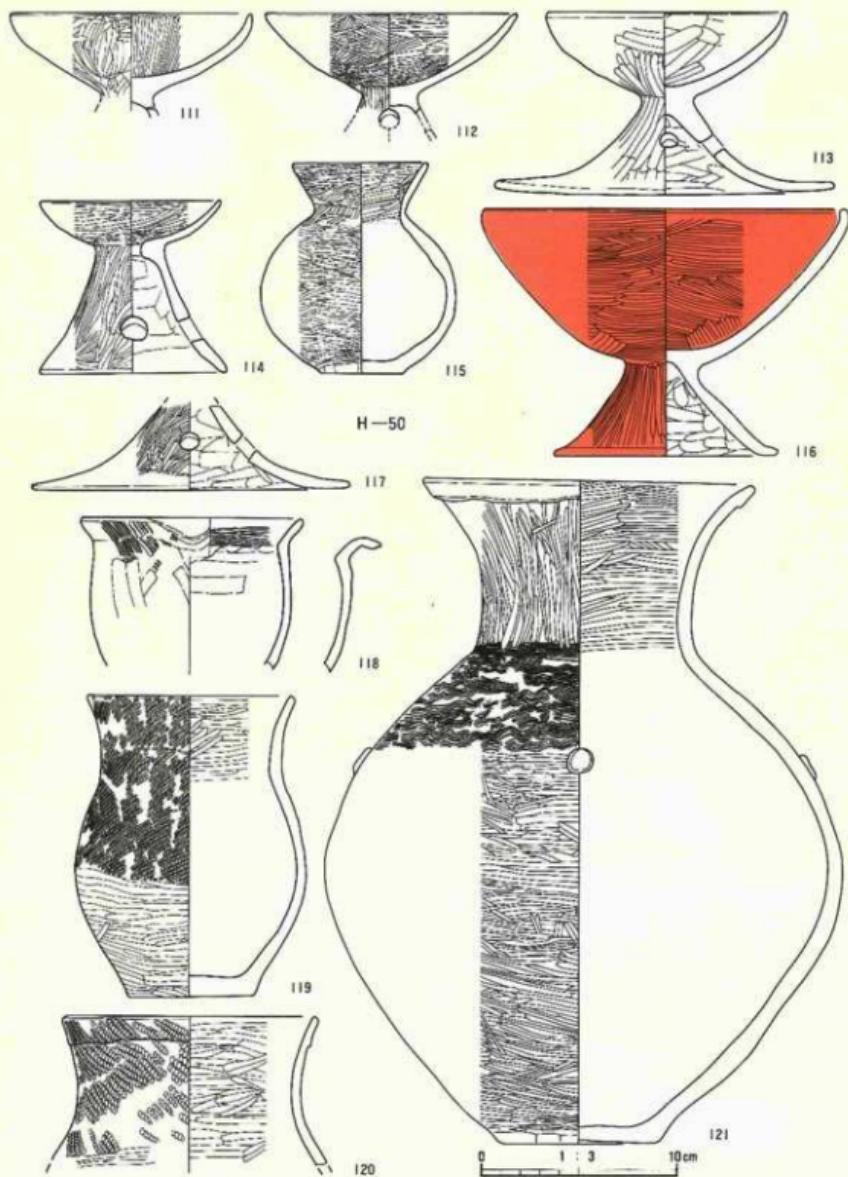


Fig. 54 H-50号住居址出土の土器

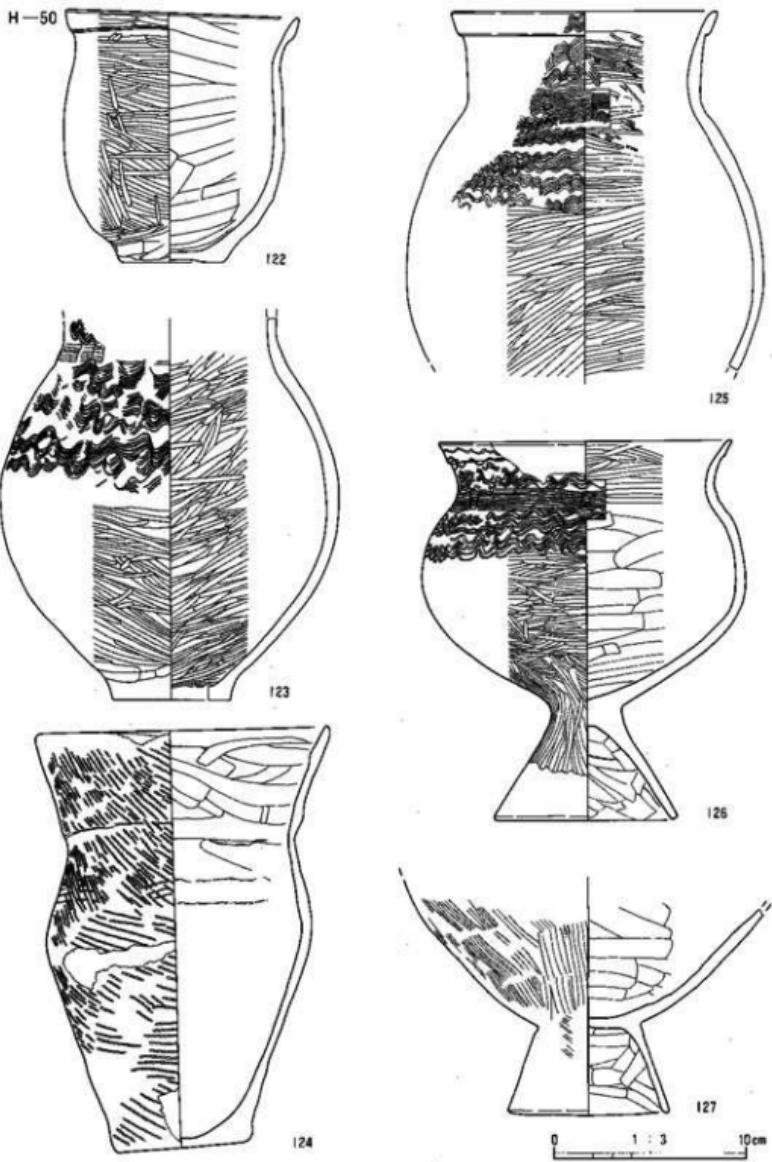


Fig. 55 H-50号住居址出土の土器

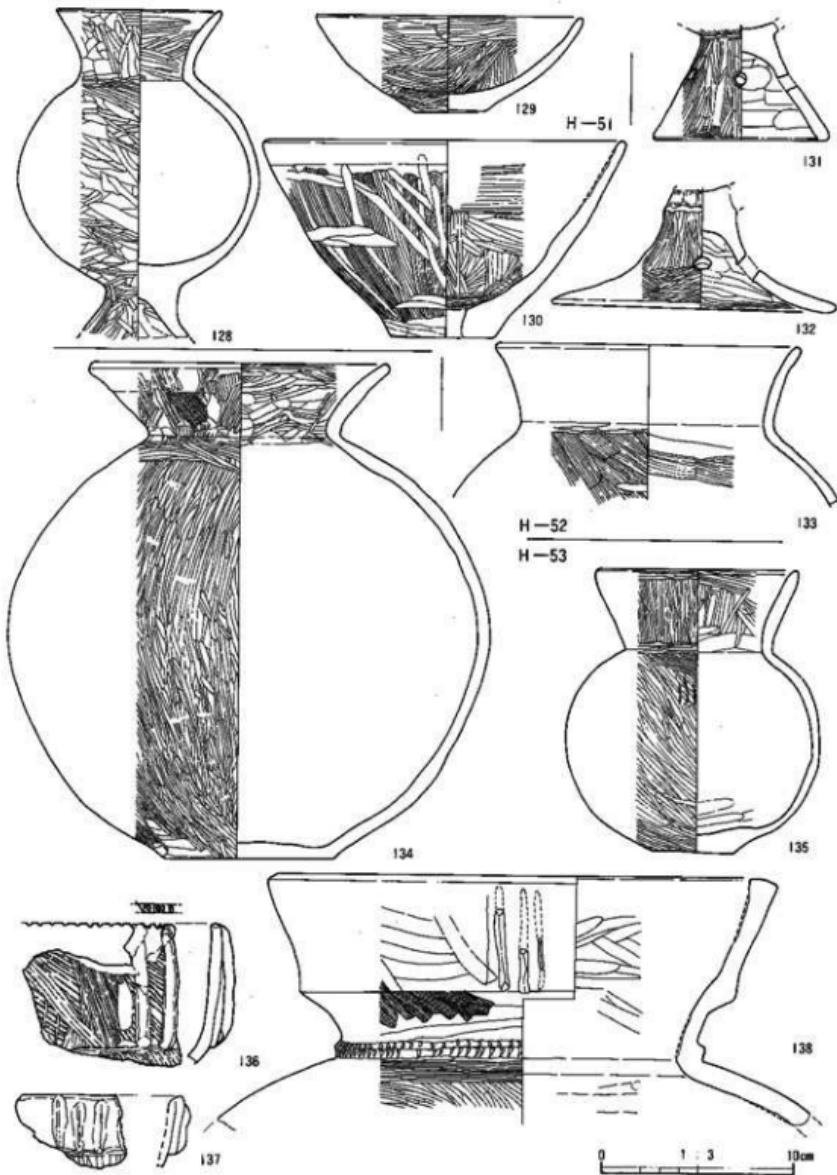


Fig. 56 H-51～53号住居址出土の土器

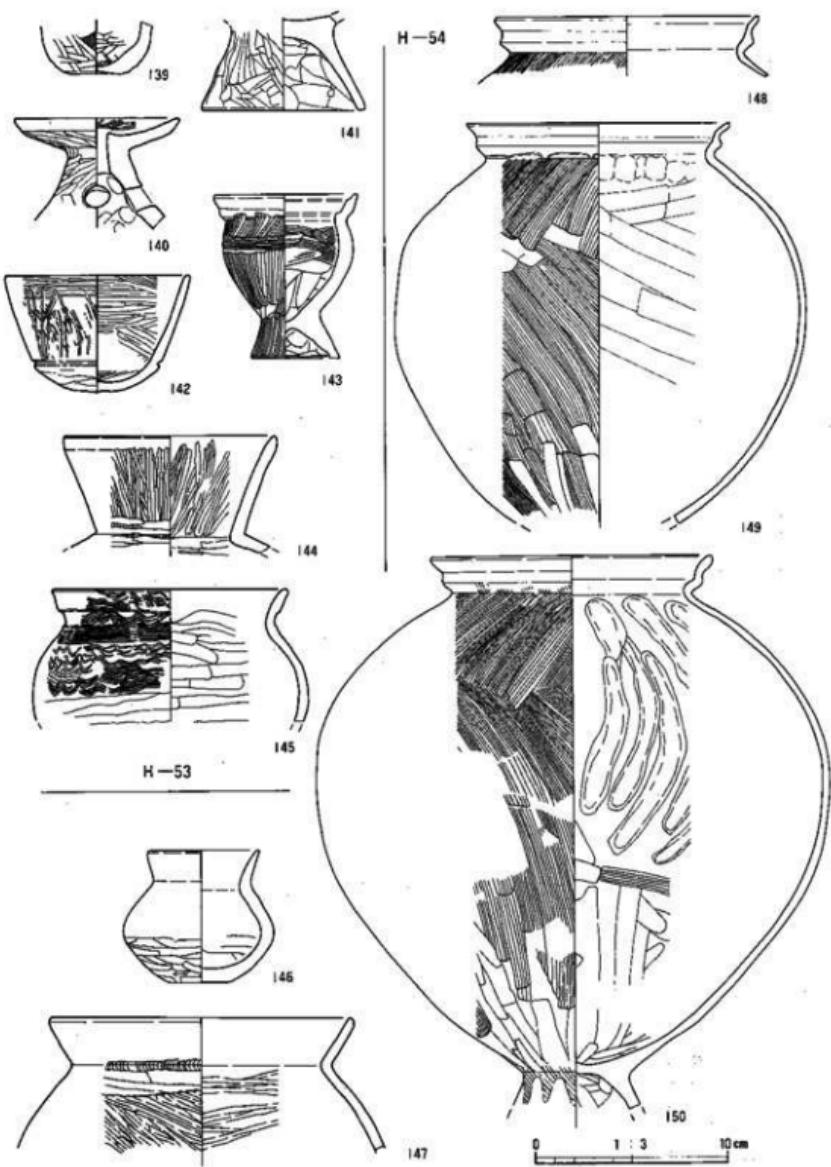


Fig. 57 H-53・54号住居址出土の土器

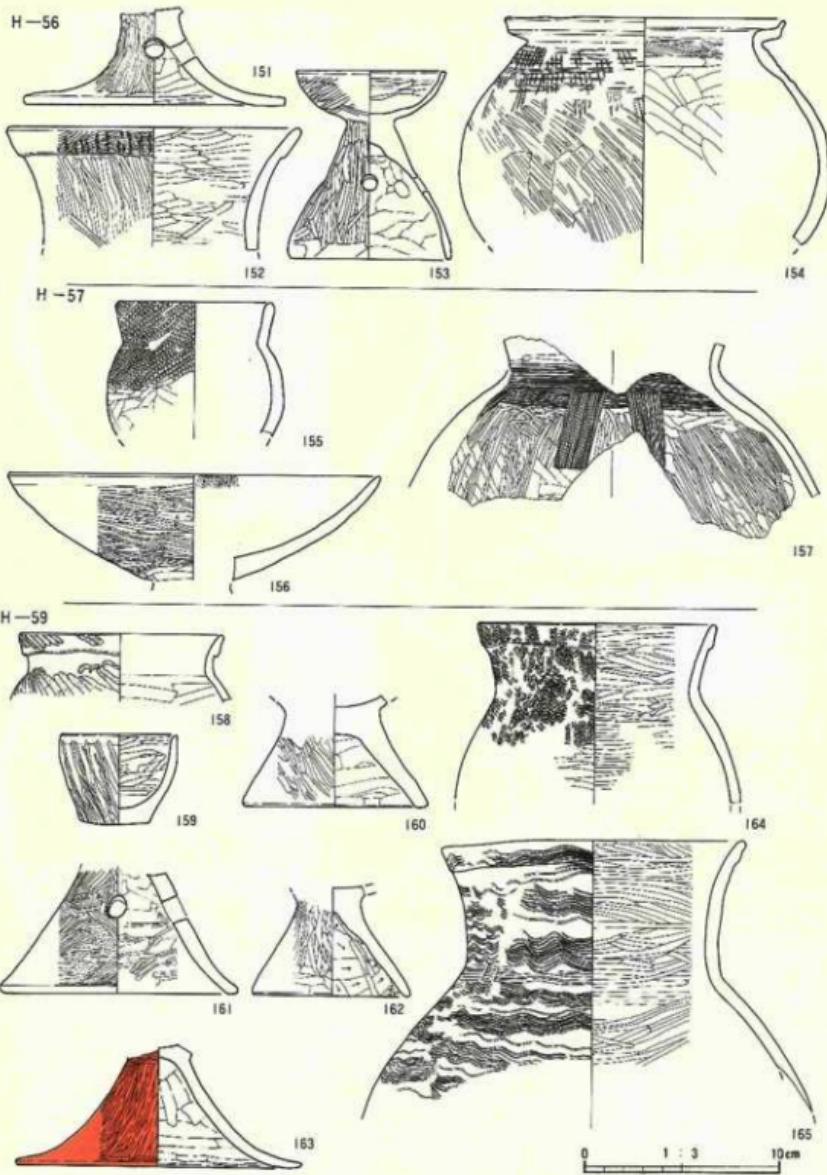


Fig. 58 H-56・57・59号住居址出土の土器

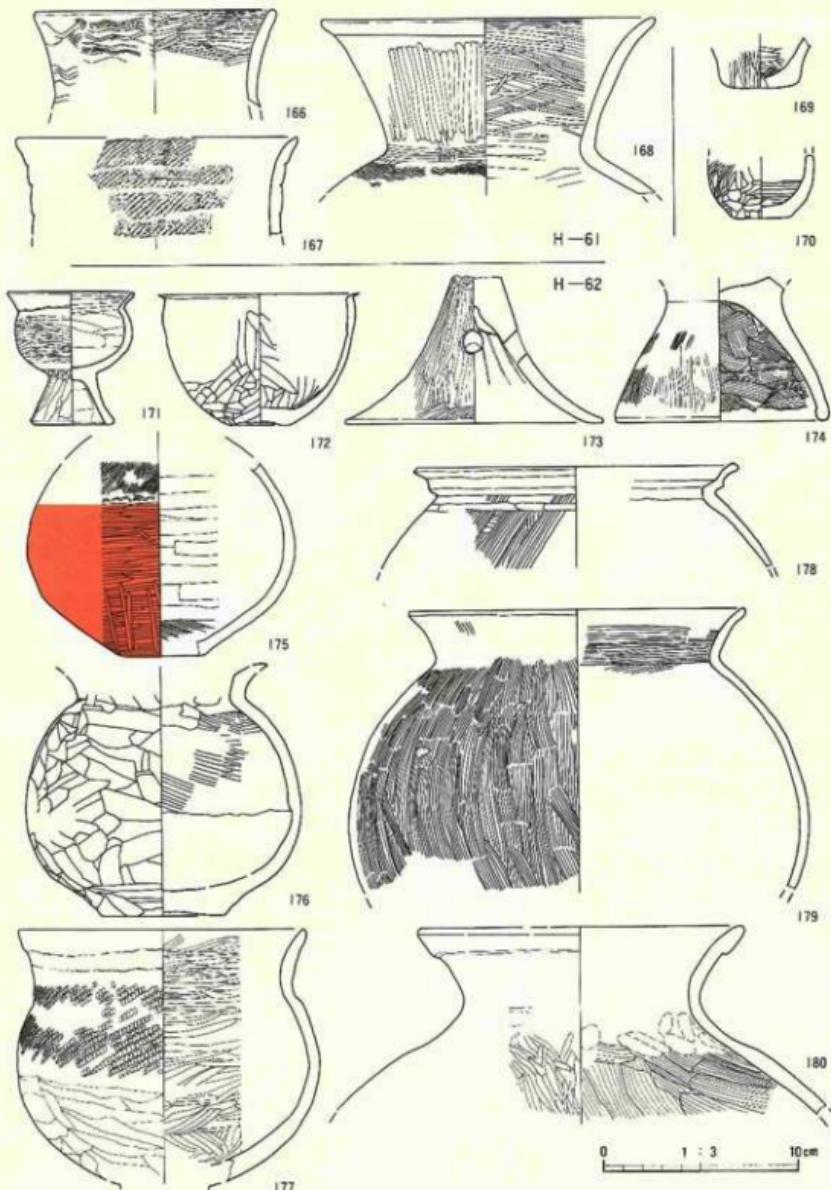


Fig. 59 H-61・62号住居址出土の土器

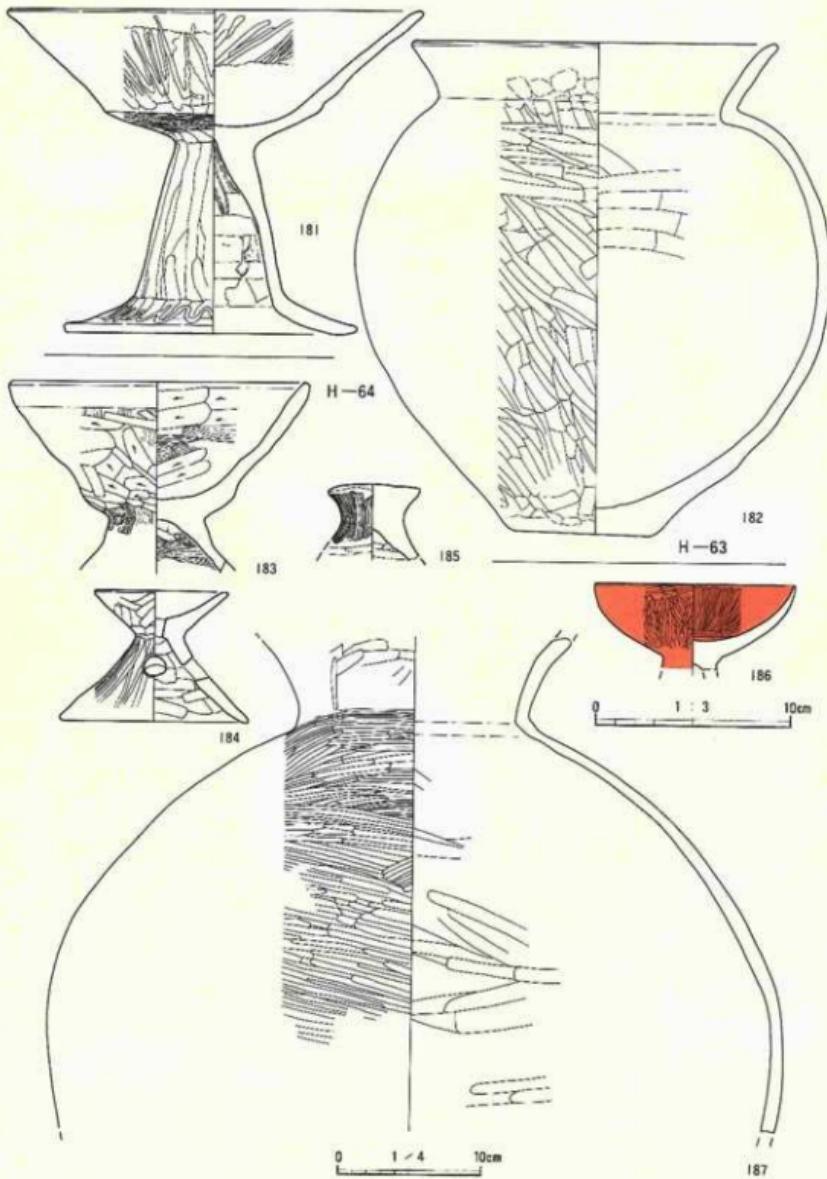


Fig. 60 H-63・64号住居址出土の上器

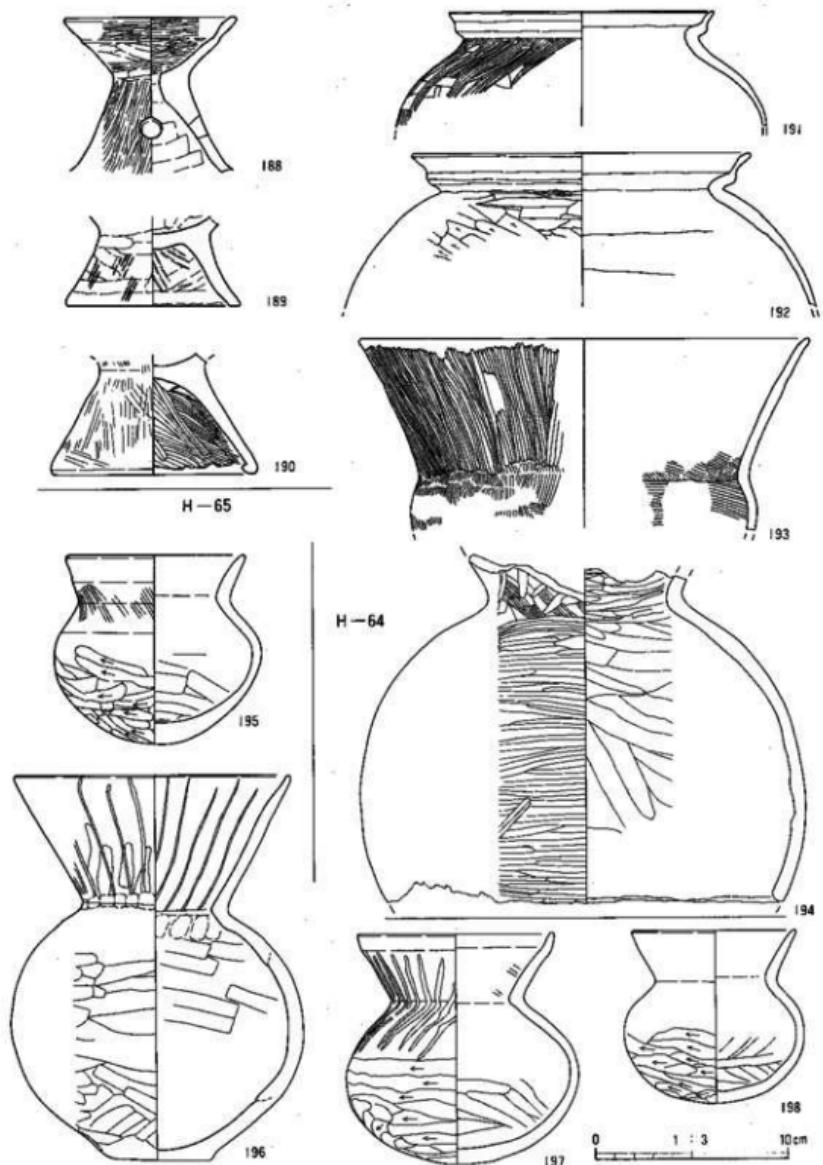


Fig. 61 H-64・65号住居址出土の土器

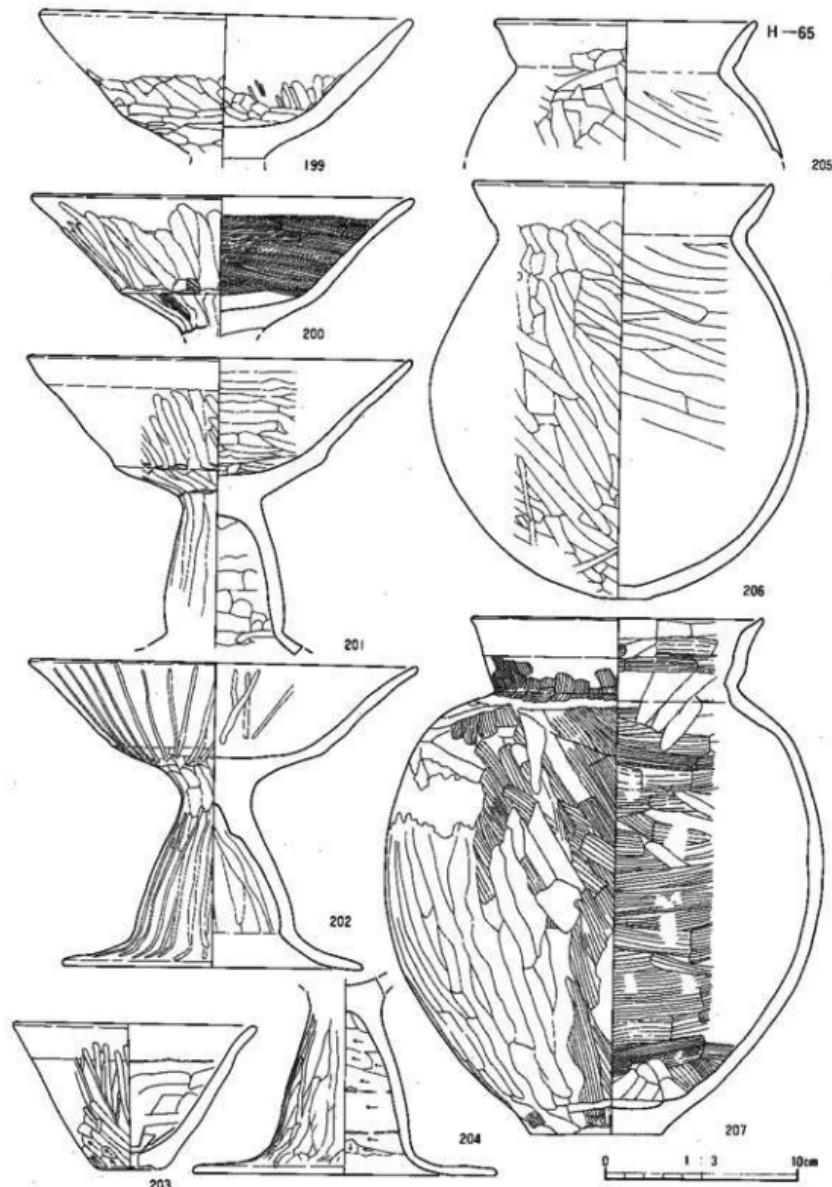


Fig. 62 H-65号住居址出土の土器

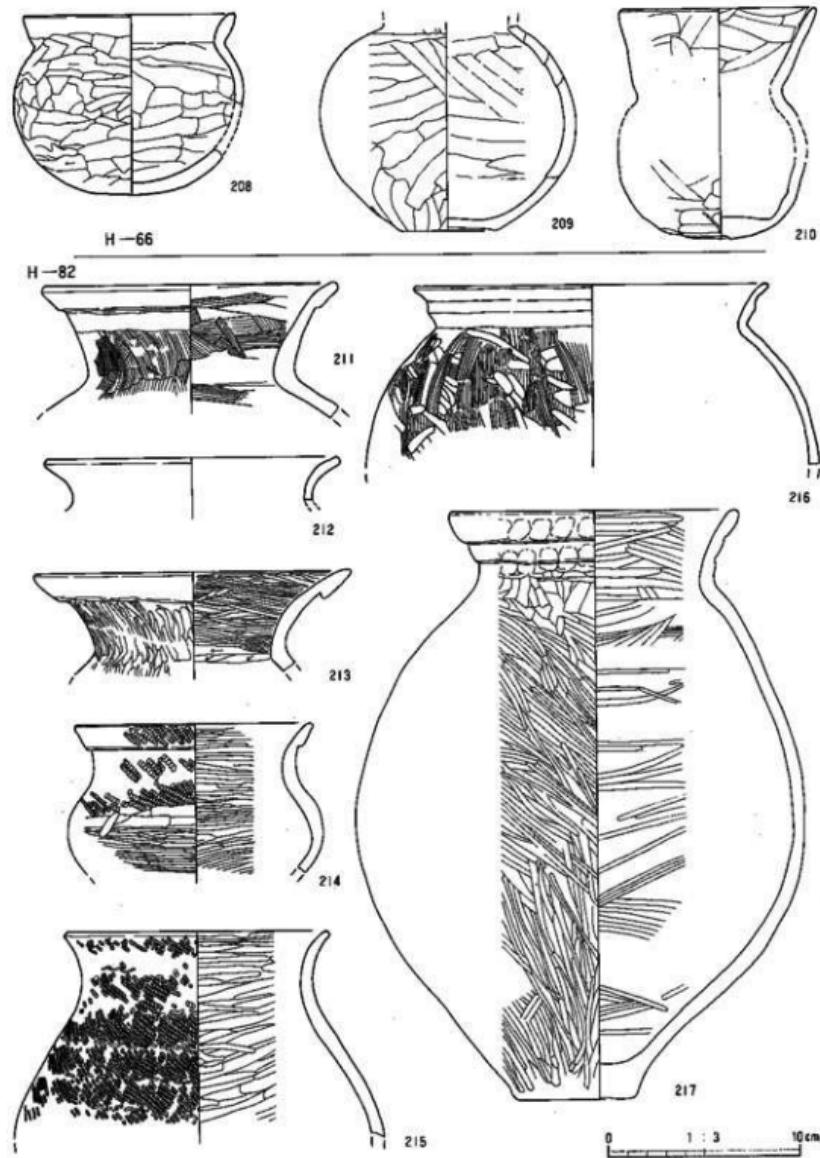


Fig. 63 H-66・82号住居址出土の土器

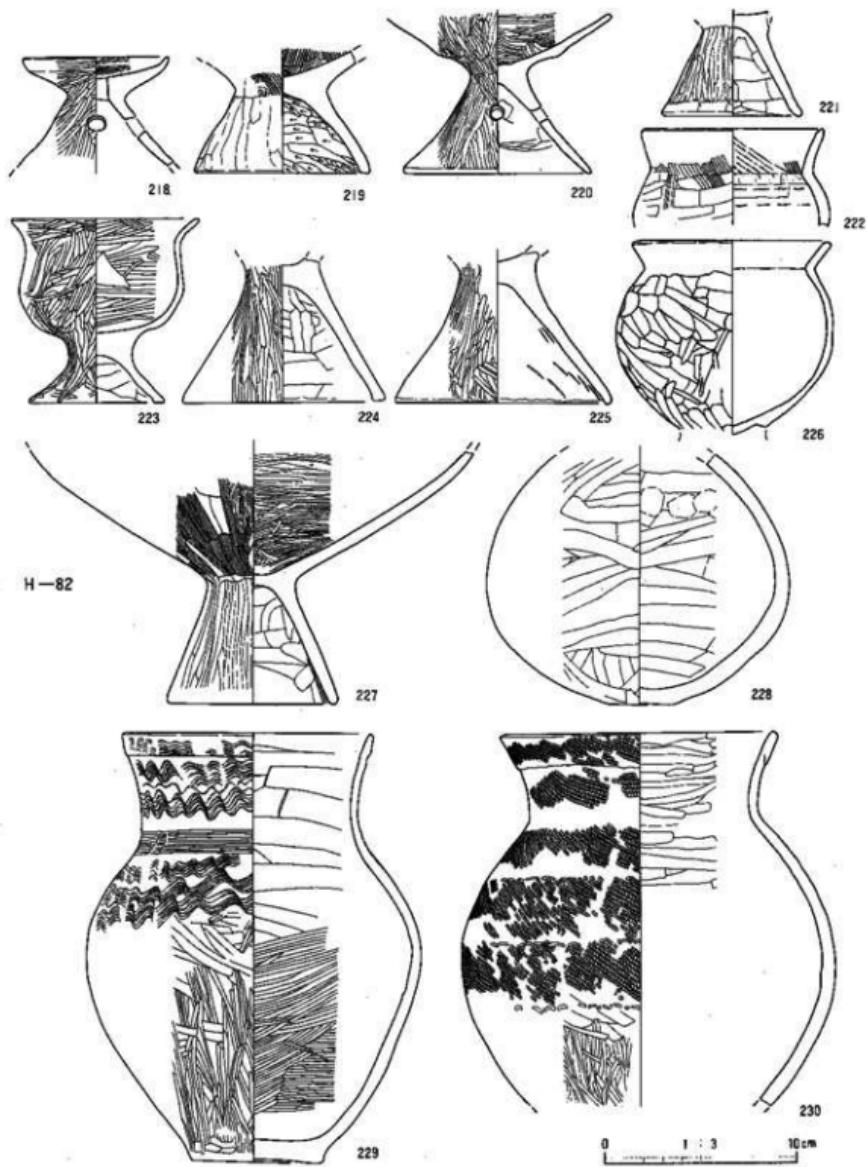


Fig. 64 H-82号住居址出土の土器

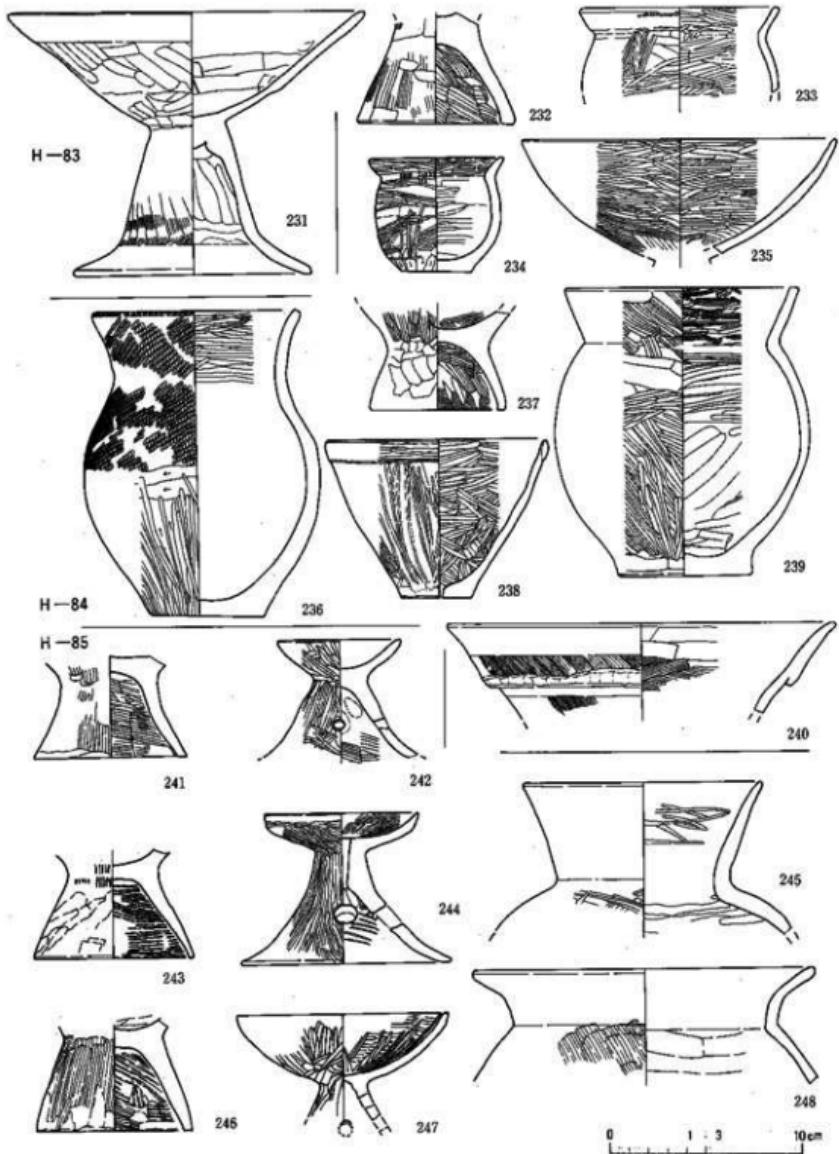


Fig. 65 H-83～85号住居址出土の土器

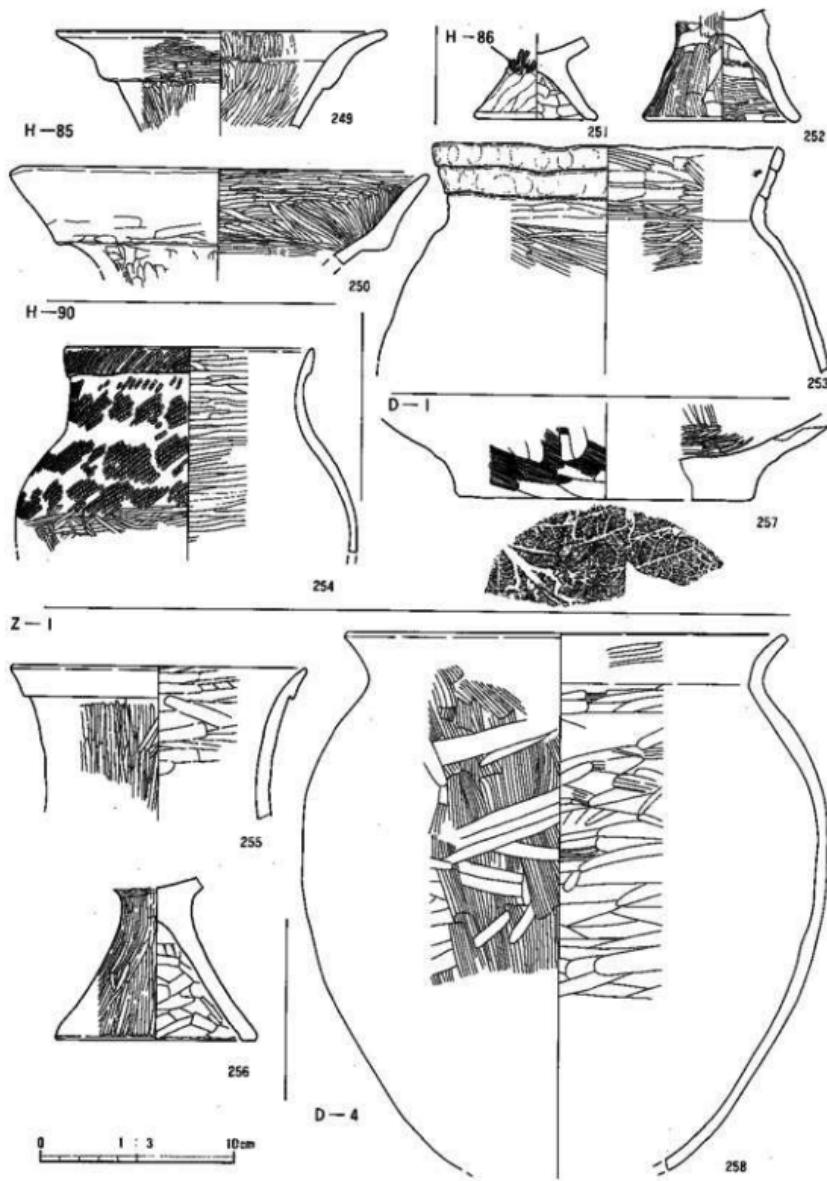


Fig. 66 H-85・86・90号住居址・Z-1号遺物集中区・D-1・4号土坑出土の土器

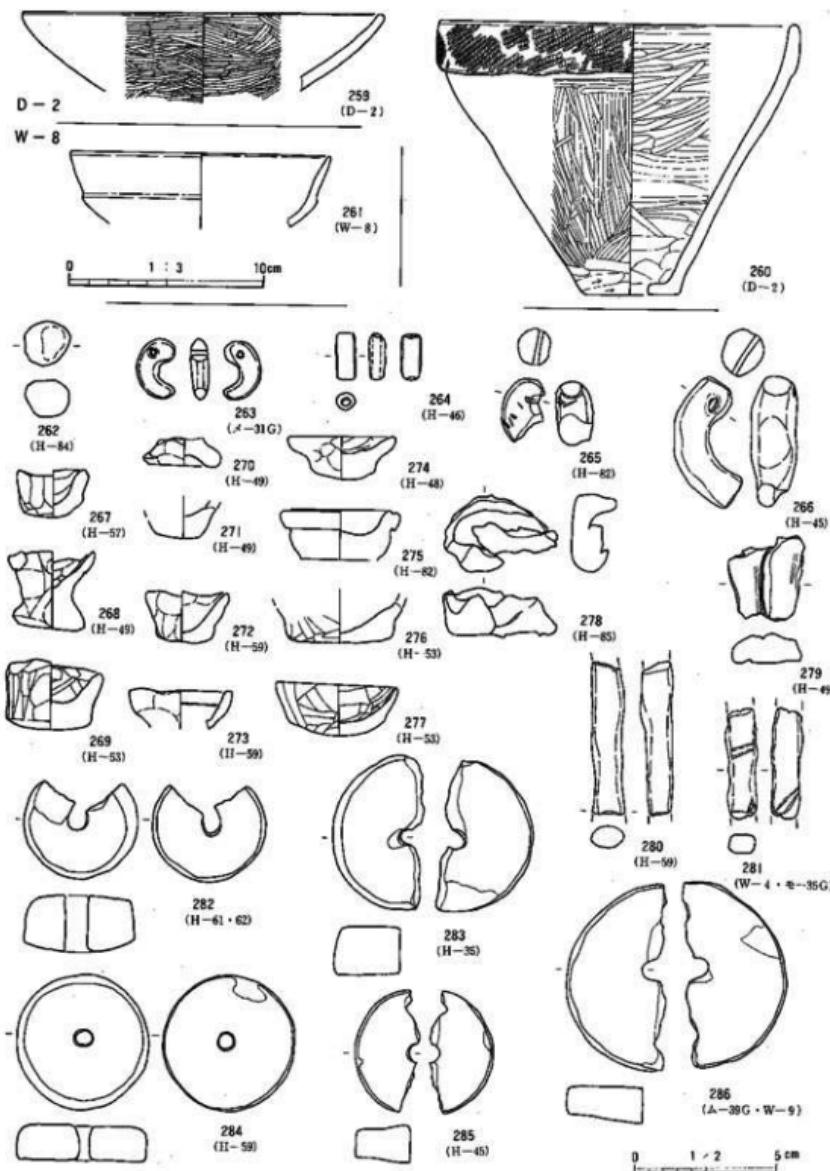


Fig. 67 D - 2 号土坑・W - 8 号溝の土器と土・石製品

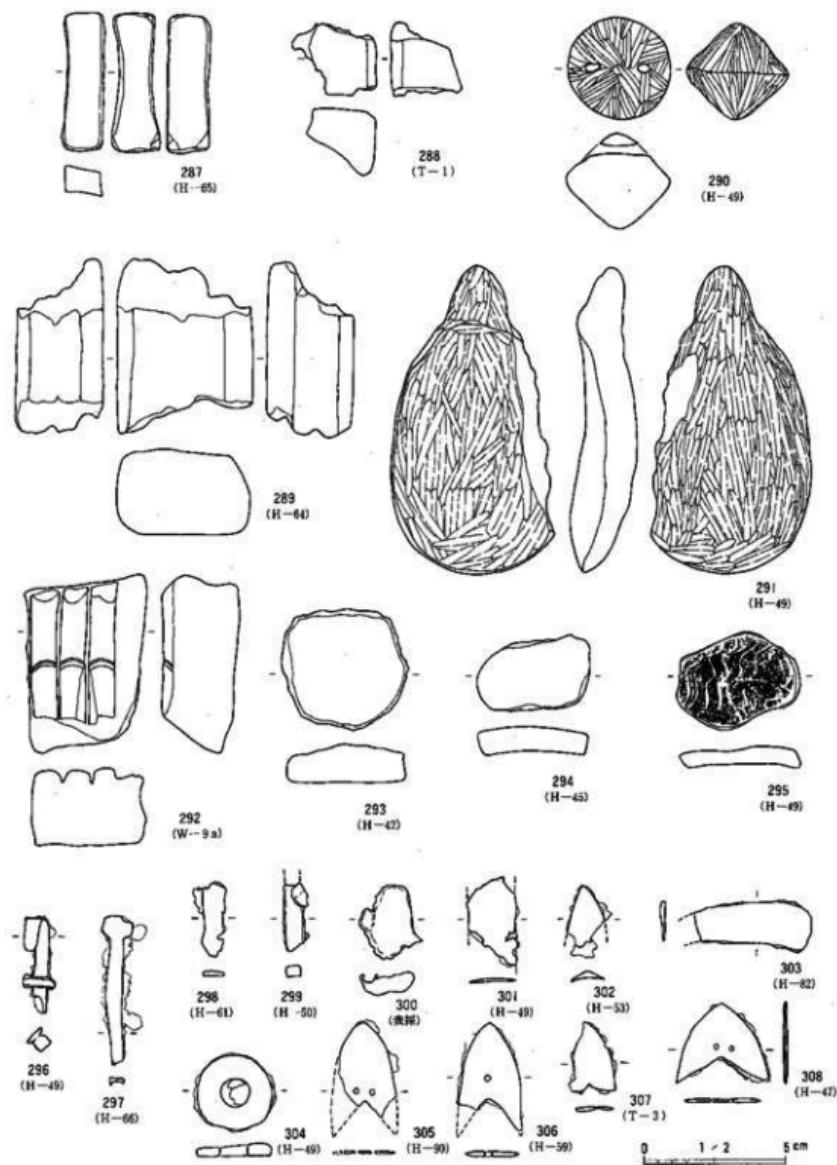


Fig. 68 土製品・石器・鐵器

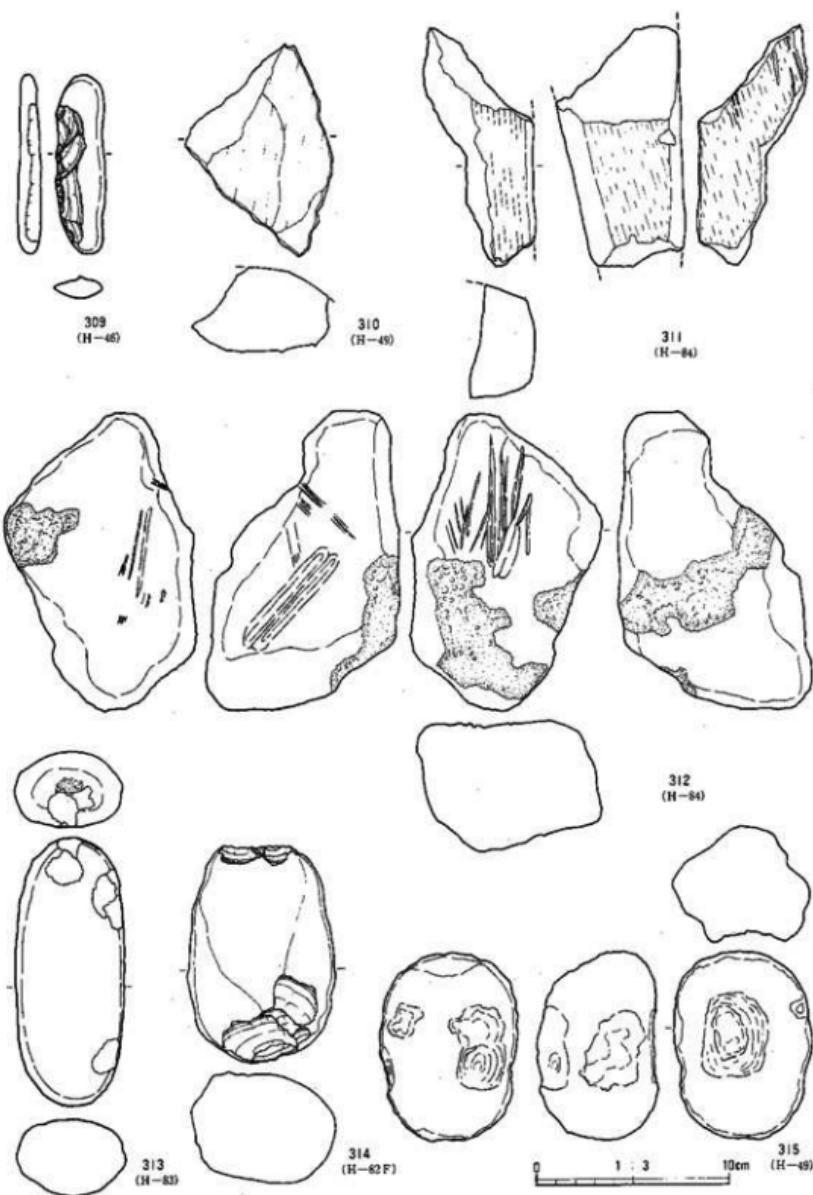


Fig. 69 石 製 品

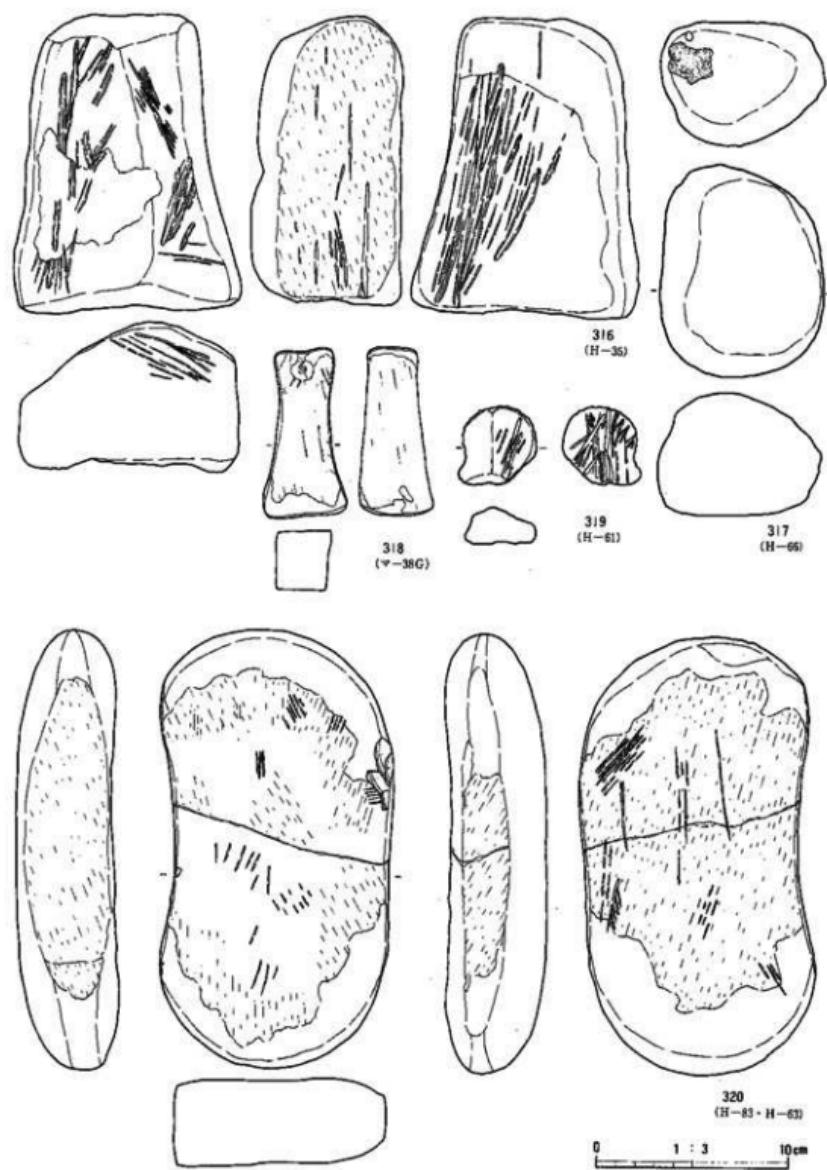


Fig. 70 石 製 品

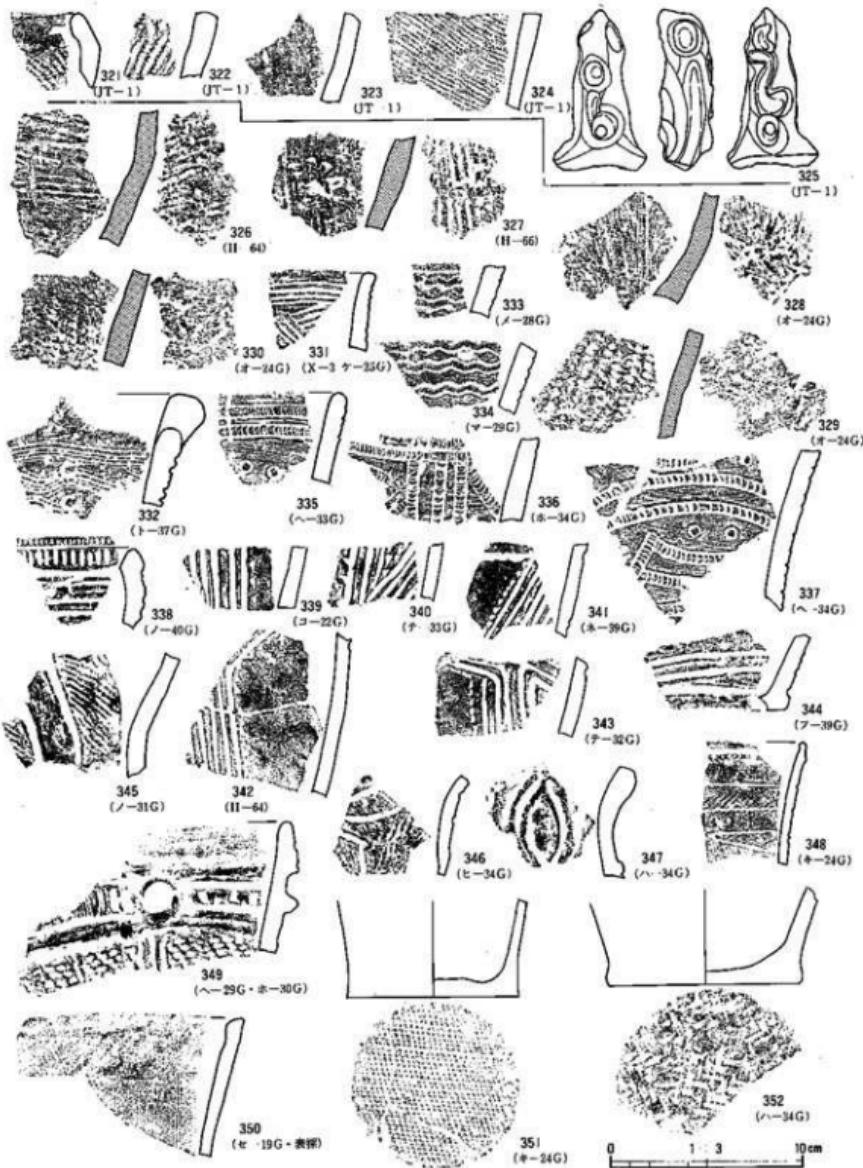


Fig. 71 織文土器

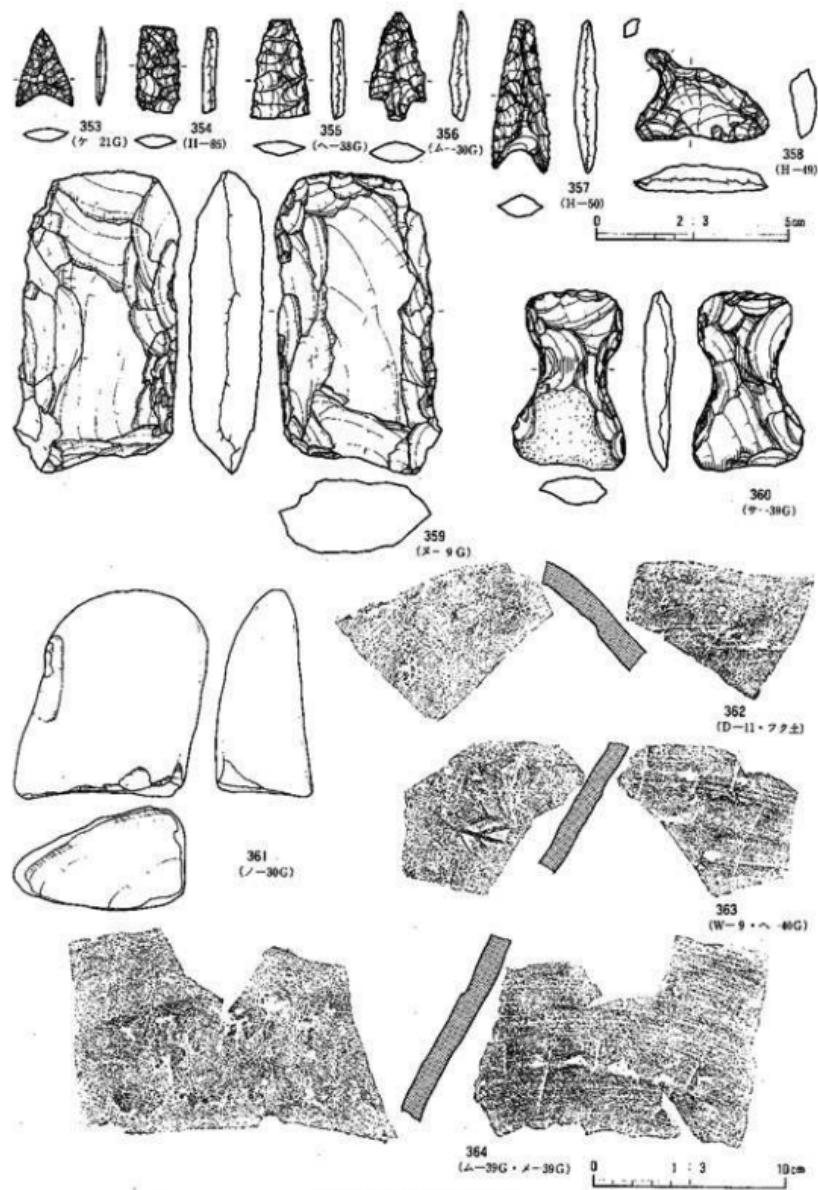


Fig. 72 繩文石器・常滑焼

写 真 図 版



1. 平成2年度内地遺跡群査掘査区域全景（上が北）



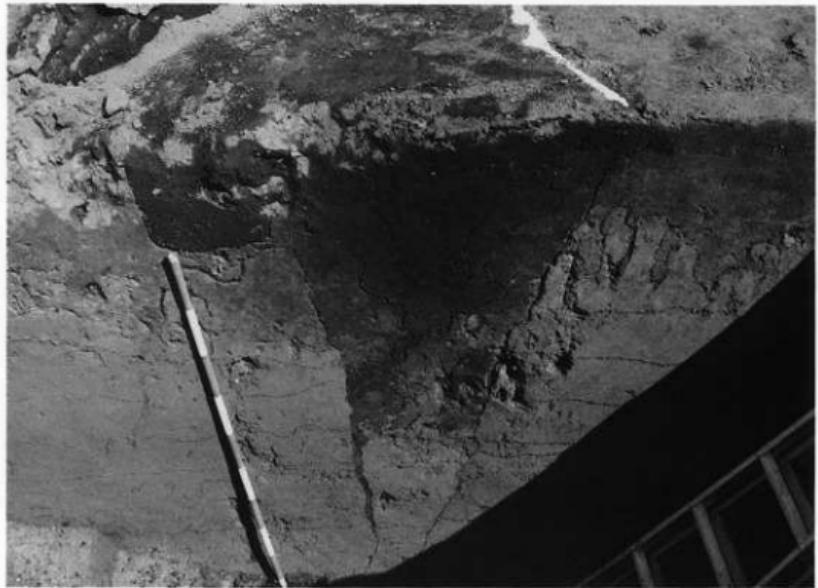
1. 平成 2 年度内堀遺跡群発掘調査区域全景（南東から空撮）



2. 大室公園予定地中央の丘陵からみた調査区域と五料沼（北西から）



1. X-1号地割れ（南東から空撮）



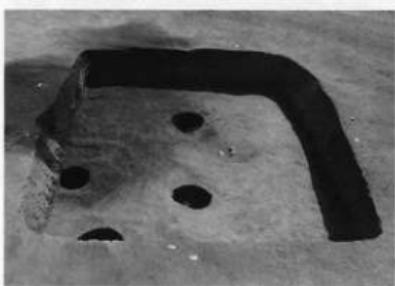
2. X-2号地割れのセクション（北西から）



1. H-35号住居址（東から）



2. H-35号住居址遺物出土状態（南西から）



3. H-36号住居址



4. H-36号住居址の炉（南から）



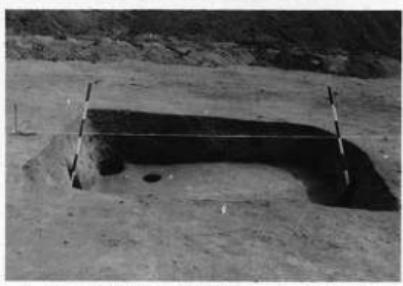
5. H-37号住居址（北から）



6. H-37号住居址遺物出土状態（南から）



7. H-38号住居址（西から）



8. H-38号住居址柱穴の立ち上がり（北から）



1. H-39号住居址発掘調査風景（北東から）



2. H-39号住居址（北東から）



3. H-39号住居址の炉体土器（北西から）



4. H-40号住居址（北西から）



5. H-42号住居址（北から）



1. H-43号住居址（西から）



2. H-43号住居址竪のセクション（南西から）



3. H-44号住居址（東から）



4. H-44号住居址 As-c堆積状態（南西から）



5. H-45号住居址（北東から）



6. H-46号住居址（南東から）



7. H-47号住居址（北から）



8. H-47号住居址の甕出土状態（北から）



1. H-48号住居址（東から）



2. H-49号住居址炭化物焼土分布状態（東から）



3. H-49号住居址（南から）



4. H-49号住居址の土匙出土状態（西から）



5. H-49号住居址階段状施設のセクション（南東から）



1. H-49号住居址階段状施設（北東から）



2. H-50号住居址（西から）



3. H-50号住居址遺物出土状態（東から）



4. H-51号住居址（北から）



5. H-51号住居址の台付壺出土状態（北西から）



6. II-52号住居址（北から）



7. H-53号住居址（南西から）



8. H-53号住居址の台付壺出土状態（南西から）



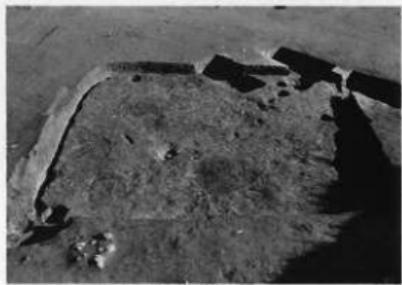
1. H-54号住居址（南から）



2. H-54号住居址遺物出土状態（南西から）



3. H-56号住居址（西から）



4. H-57号住居址（北西から）



5. H-57号住居址の土器分布状態（北西から）



6. H-58号住居址（南から）



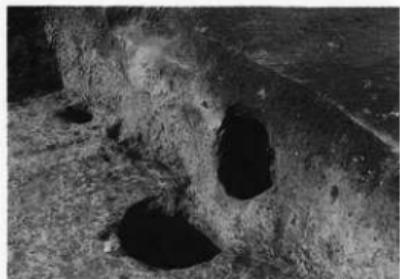
7. H-59号住居址（北東から）



8. H-59号住居址の鉄錆出土状態（北から）



1. H-59号住居址（南西から）



2. H-59号住居址貯藏穴（南から）



3. H-61号住居址（南から）



4. H-61号住居址の甕出土状態（北西から）



5. H-62号住居址（北から）



1. H-63号住居址（北西から）



2. H-64号住居址（北西から）



3. H-64号住居址の炉（西から）



4. H-65号住居址（西から）



5. H-65号住居址遺物出土状態



6. H-65号住居址（南から）



7. H-65号住居址の壺出土状態（南東から）



8. H-65号住居址の砾石出土状態（南から）



1. H-66号住居址（北から）



2. H-82号住居址（東から）



3. H-82号住居址遺物出土状態（南から）



4. H-83号住居址（北から）



5. H-83号住居址の土器分布状態（南西から）



6. H-84号住居址（東から）



7. H-84号住居址の小甕出土状態（北東から）



8. H-85号住居址（東から）



1. H-86号住居址（東から）



2. H-89号住居址（北から）



3. H-90号住居址（北から）



4. H-90号住居址の甕出土状態（北から）



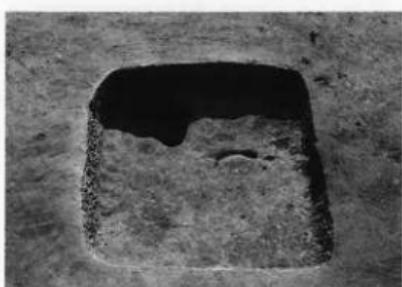
5. H-91号住居址（北東から）



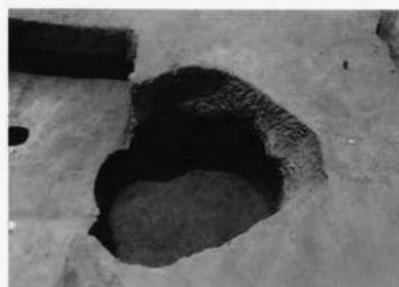
6. T-1号竪穴状遺構（北東から）



7. T-2号竪穴状遺構（南東から）



8. T-3号竪穴状遺構（北西から）



1. JT-1号竪穴状遺構（北から）



2. I-1号井戸（東から）



3. I-1号井戸の石出土状態（南西から）



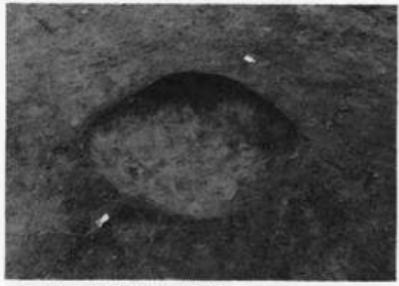
4. D-1号土坑（西から）



5. D-1号土坑遺物出土状態（北から）



6. D-2号土坑（北から）



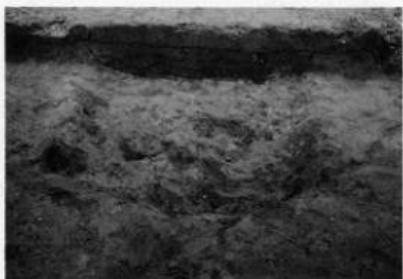
7. D-3号土坑（北から）



8. D-4号土坑（南から）



1. D-5号土坑 (東から)



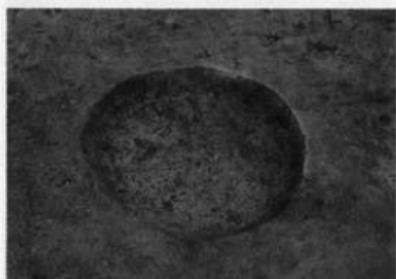
2. D-6号土坑 (南東から)



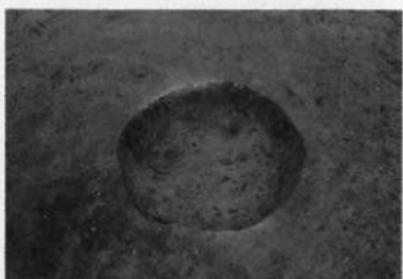
3. D-10号土坑 (北東から)



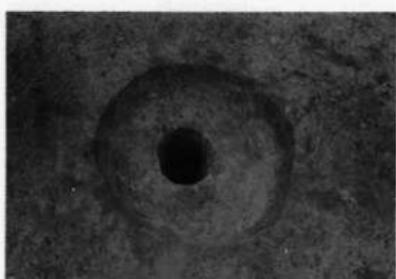
4. D-11号土坑 (北から)



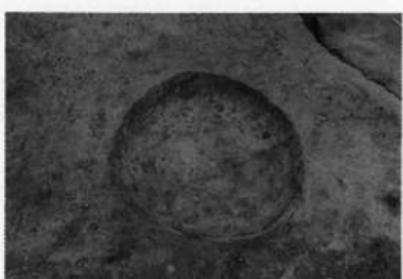
5. D-12号土坑 (南西から)



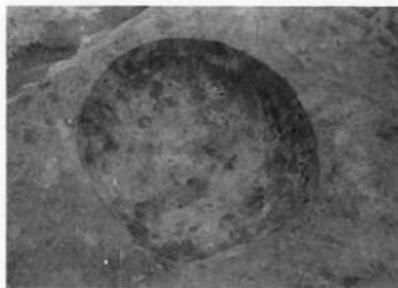
6. D-13号土坑 (南西から)



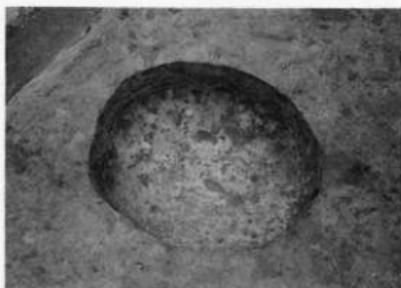
7. D-14号土坑 (南西から)



8. D-15号土坑 (南から)



1. D-16号土坑 (南西から)



2. D-17号土坑 (南西から)



3. W-9号溝 (南から)



4. W-1号溝 (南東から)



5. W-2号溝 (北から)



1. W-3号溝（西から）



2. W-4号溝（西から）



3. W-8号溝（北から）



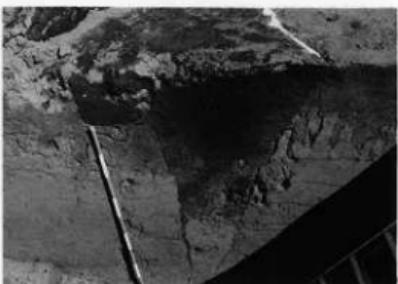
4. W-10号溝（北から）



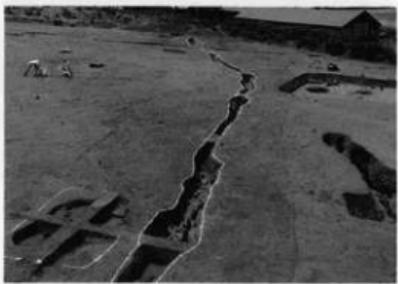
5. X-1号地割れ（東から空撮）



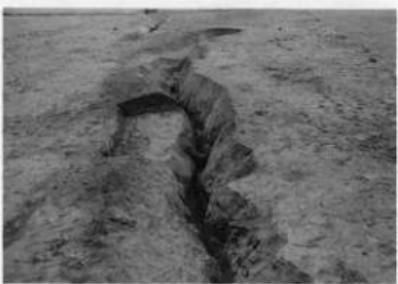
1. X-2号地割れ（南東から）



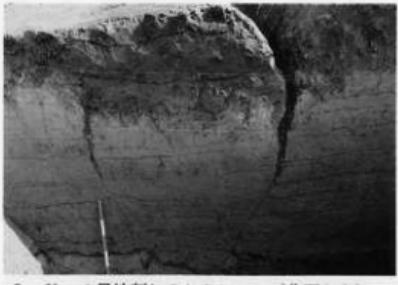
2. X-2号地割れのセクション（北西から）



3. X-3号地割れ（東から）



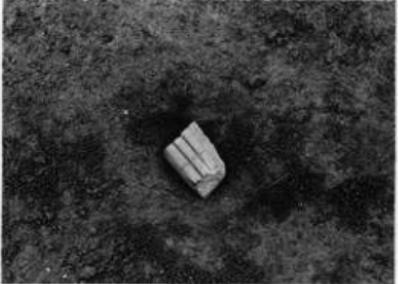
4. X-4号地割れ（北西から）



5. X-4号地割れのセクション（北西から）



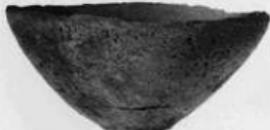
6. X-5号地割れ（南東から）



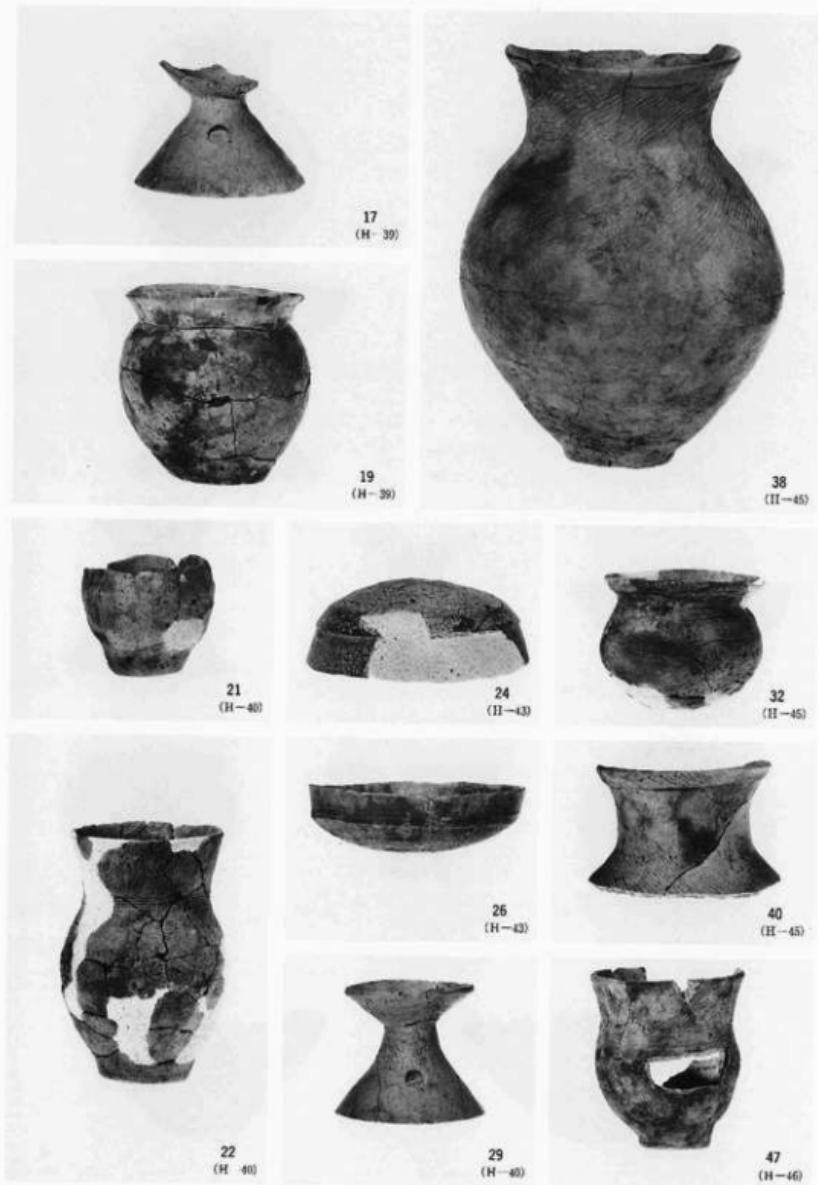
7. 瓦塔の出土状態（西から）



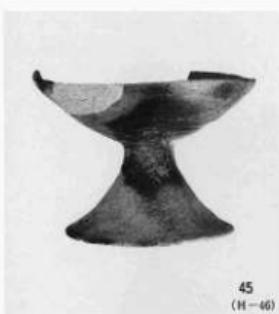
8. 記念撮影

7
(H-35)5
(H-35)6
(H-35)1
(H-35)2
(H-35)3
(H-35)13
(H-36)11
(H-37)18
(H-39)9
(H-36)8
(H-36)

H-35~39号住居址出土の土器



H-39・40・43・45・46号住居址出土の土器



67
(H-47)

H-46・47号住居址出土の土器



64
(H-47)



54
(H-47)



57
(H-47)



51
(H-47)



106
(H-49)



71
(H-47)



76
(H-48)

H-47~49号住居址出土の土器



H-49・50号住居址出土の土器



126
(H-50)



110
(H-50)



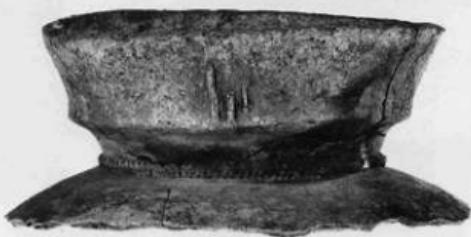
119
(H-50)

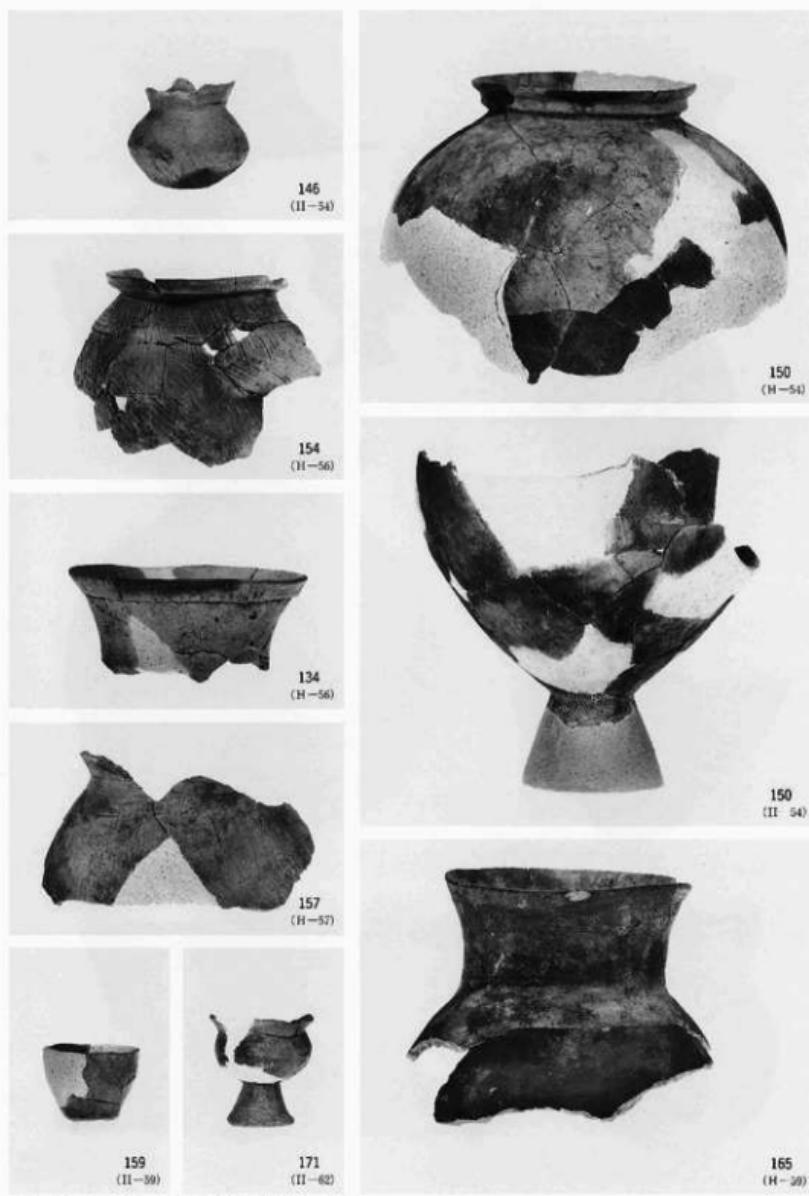


124
(H-50)



121
(H-50)

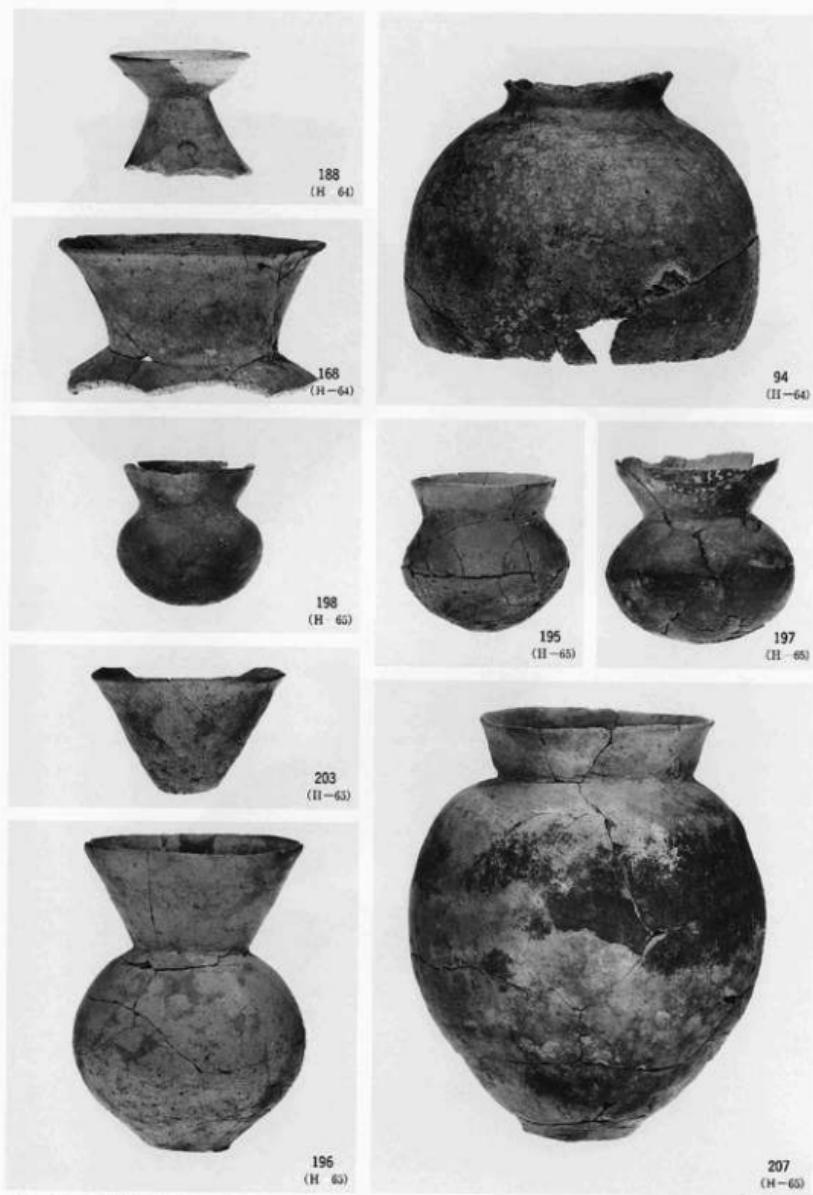
129
(H-51)132
(H-52)128
(H-51)143
(H-53)142
(H-53)134
(H-53)130
(H-51)135
(H-53)138
(H-53)



II-54・56・57・59・62号住居址出土の土器

177
(H-62)182
(H-63)181
(H-63)187
(H-64)

H 62~64号住居址出土の土器



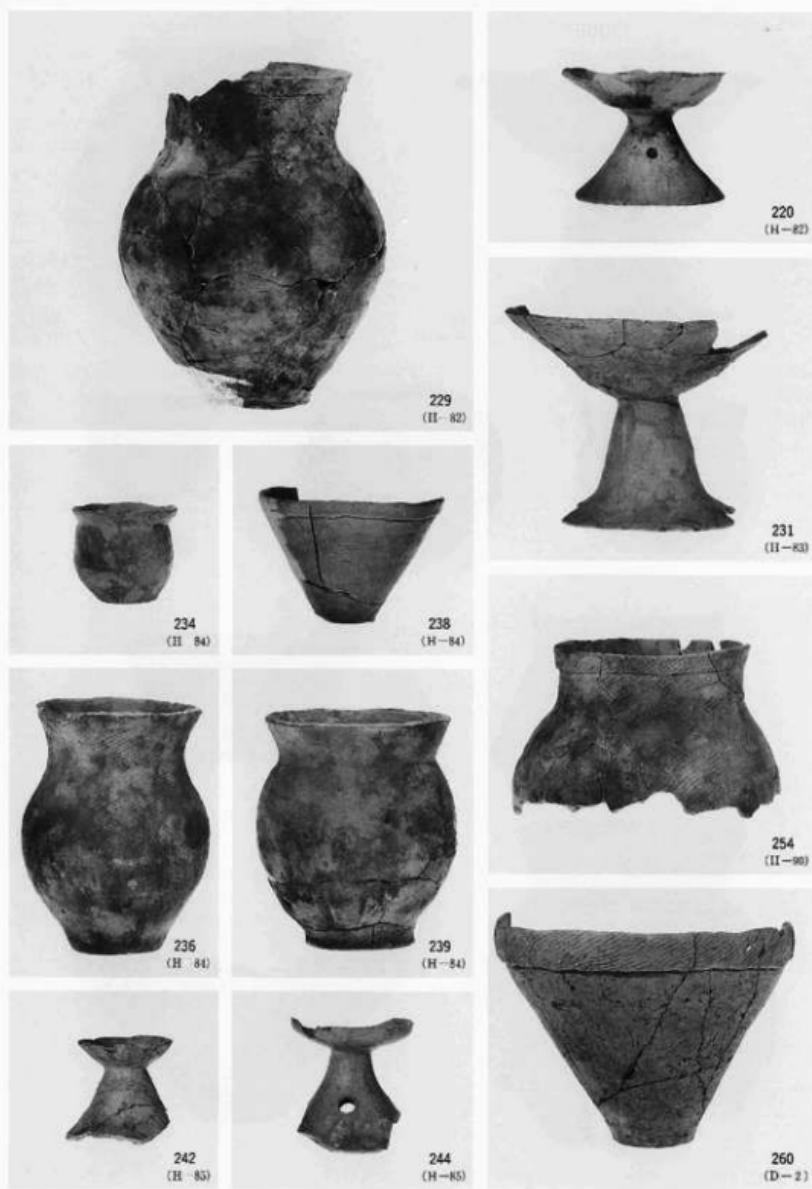
H-64・65号住居址出土の土器

202
(H-65)206
(H-65)208
(H-66)209
(H-66)223
(H-82)

(H-82)

230
(H-82)217
(H-82)

H 65・66・82号住居址出土の土器



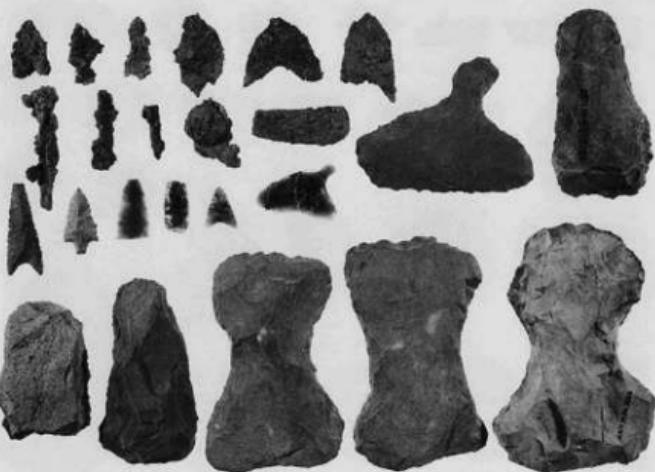
H-82・83・84・85・90号住居址とD-2号土坑出土の土器



1. 石・土製品



2. 石器・石製品



1. 鉄器・鉄製品・石器



2. 繩文土器・常滑焼・瓦塔

調査要項

遺跡名稱	内堀遺跡群（うちぼりいせきぐん）下堀引II遺跡（しもなわびきにいせき）
遺跡記号	2E11
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町2521-1・2526・2530番地
調査期間	確認調査・発掘調査 平成2年5月9日～平成2年11月30日 遺物整理・報告書作成 平成2年12月3日～平成3年3月25日
調査面積	発掘調査…9,000m ² 確認調査…2,500m ² 開発面積…369,000m ²
調査原因	公樹造成
調査依頼者	前橋市長 藤船清多（公園緑地課）
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 遠藤次也
事務局	事務局長 福田紀雄 事務局次長 遠藤和夫 財政係員 内田由治郎 藤岡龍也 庶務担当 須田みづほ 田野真喜子
調査担当者	前原 豊 伊藤 良
調査参加者	飯塚 明三 石崎 信雄 石崎はるの 伊藤 孝子 井野江利子 関野 行雄 関安善次郎 狩野 美雪 川島 勝治 木村源次郎 木村はる子 久保もり子 近藤 盛次 佐手 利子 佐藤 佳子 下田 利子 関 トシ子 関口みよ子 高橋きしの 竹内るり子 田中善四郎 角田正次郎 内藤貴美子 内藤 たか 主代 伸治 川 千恵子 堀越 豊 鮎岸あや子 横堀 富衛 吉田真理子 小保方豊五郎
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県埋蔵文化財調査事業団 柏川村教育委員会 公園緑地部公園緑地課 麻生 俊 右川正之助 岡本 東三 女屋志雄 加部 二生 岸田 治男 木暮 誠 小島 敦子 小島 純一 佐藤 明人 神保 侑史 杉山 秀宏 関 邦一 早田 勉 大工原 豊 田口 一郎 能登 健 川 隆之 細野 高伯 前原 照子 大館 保 宮本長二郎 山下 藏信 岩井 徹 総實 錠子 イズミトレス たつみ写真 シン航空 齋高館 株式会社測設

内堀遺跡群 IV

平成3年3月20日 印刷
平成3年3月25日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
〒371 前橋市上泉町664-4
TEL 0272-31-9531

印刷 朝日印刷工業株式会社

